
一人より二人

宇都宮 古穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人より二人

【Nコード】

N3528T

【作者名】

宇都宮 古穂

【あらすじ】

中堅規模の結婚相談会社『ハッピーパートナー』に勤める野呂駿平。彼は営業兼コーディネーターの担当業務。既に六ヶ月を経過し、この仕事も慣れてきた、とその半面この仕事に飽きかけてもいる。男と女の纏れた間に入り、走り回る日々腐っている。

そんな事を薄々知ってか、知らぬかの山根課長。上司である山根は貫い煙草の常習犯。日頃からのダラダラと絡んでくる行動と発言にも駿平にとってやる気が失せる人物。だらしなく当てにならないようだ、胡散臭い。裏で何かと精通している。

何かに付け、駿平に突っ掛かってくるクソ生意気な事務員、奈津美。態度とは裏腹に駿平を気に掛けている。年配の女性カウンセラー遠藤。

それから、もう一人とんでもなく話しにならなくいい好きな女、藤原。日々、会話や絡む相談すらも噛み合わない。だが、以外にも面倒見がよく、駿平より一枚上手の人物。

男と女の出会いビジネスでは日々トラブル発生。五名の職員が繰り広げる結婚相談。

第一話（派閥争い）

1（前書き）

のっけから少子化問題を引き合いに本社の専務が息巻くキャンペーン企画会議から始まる。実はこの駿平の出席する会議は人事を巡った会議が目的らしい。

負けたほうがM&Aをされた子会社への出向が決まるらしく、兄の常務との攻防争い。そんな勢いの会議の中、ぶっ倒れてしまった専務……。

1.

『一・二五』 会議資料の見出しの数字。――ふむ、やはり今この時代を映し出しているな。

『二十八歳』、平均年齢。そんなものか？――そうだろうな。

野呂駿平は小声で頷き、配られた会議資料の頁を捲る。

「えー、と……」 「うーん」 澤田専務はいつもの捻り出す口調から始まる。

専務は長い前置きから本題に入り、念仏を唱えるかのようにたつぷりと話が続く。つい居眠りしそうになる。仕事に対して粘り強い信念も持ち合わせているが、見た目は何処にでもいる普通の物静かな中年のおじさんといえる。冷静で威厳を感じさせない、生真面目で事をあまり語らない人柄から普段の専務は高慢さを感じさせない重役である。だからといって社員から慕われるほどのではないようだ。それは社員との距離感はいつも一定の距離を感じさせる。

駿平は気にもかけずボールペンを手の上で回した。日頃の癖で緊張感ない時などはさらに軽く貧乏揺すりし、つい無意識にクルクルと回している事が多い。専務のような口調で話す人物を前にすると得てしてよく回転するものだ。

それにしても今日の会議資料はとても分厚いな。いつもの薄っぺらな資料で無く、かなりなようだ。会議資料の厚みを横から覗くとゆうに二センチくらいはありそうだ。よくもまあ、ここまで纏めあげたものだ恐いいるよ。時間をかけ莫大なデータを基に具に調査され、そこから精細に分析された資料。

資料に目を落し、何気にパラパラと頁を捲る。

肩で短く溜息をつく。

何枚か捲るとふとある頁に目が留まる。眼鏡のつるを押上げ目を

凝らす。折れ線グラフと棒グラフの入り混じったデータと分析表に釘付けになり、興味をそそられた。

欧米のイギリス一・七一、フランス一・八九、ドイツ一・三四、アメリカ二・〇四で回復基調、一方、ご近所の東アジアでは韓国一・一九（いずれも二〇〇三年数値）、中国一・八〇と日本と同様に一貫して下降をたどっている。二〇〇六年、日本一・二五を最低としてそれ以後、微増だが僅かに上昇している。しかし、二〇〇七年さるなる低下。避けがたい状況のまま減少。今のままでは近い将来一・〇〇を割り込んでくる可能性も否定できない。

と、言うことは日本だけじゃなく人類規模の深刻な問題だ。駿平はぶつぶつと周りに聞こえない程度の小声で頷きながら資料の頁をさらに捲る。

どのデータも将来希望が乏しい。どれもこれもが横ばいから減少へと下降を辿るようだ。所々のデータの細かい注釈文字を睨む。これは！ 貧乏ゆすりが止まる。このデータは使えそうだな。目を凝らし、回していたボールペンでアンダーラインを引く。

『バシッ！』不意に叩く激音が部屋に響く。耳を劈く稲妻に撃たれたような音。虚を衝くその音に思わず駿平は肩を尖らせ、背筋が幾分か伸びた気がした。データの注釈文字にアンダーラインをしていたところ、真っ直ぐに引いたラインがとんでもない場所まで伸びてしまった。

「いいかね！ 諸君」意気軒昂というより、恫喝ともいえる専務の声が響き渡る

駿平は慌てて視線を持上げ、専務に顔を向ける。周りの出席者一同もほぼ同時にその声のする方向へ目を向ける。当然、専務に向けて一極集中する。

どうしたのだ、珍しい。いつもの専務らしからぬ穏やかな口調から一変した。

二ヶ月に一度のペースで行われる企画会議は、ダラダラと時間が流れ時折、ヒソヒソ声や物音が耐えない騒然とした会議なのだが。

今日は何故か少しばかり様子が違うようだ。

バシャと水を撒いた後のように会議室一面に緊張の空気が張る。張詰めた空気の中、何気に参加者へ視線を向ける。するとお行儀良く整列したはずの大半、いや全員ともいえる参加者が視線を落し、顔を伏せ始めた。見回して確認した訳ではないが、恐らく俺以外全員が不思議と息が合う同じ行動だ。

駿平は顔を専務へ向け直し、目だけを動かし左右を見渡す。

取り残され浮いている。どういう訳か俺以外の全員は示し合わせたかのように行動が同じだった。まるで画一化されたおもちゃの人の形のような。真面目に向き合っているのは俺だけのような。何故だ？壁時計を見ると十時を少し回ったところ。会議が始まって、まだ十分と経っていない。なのに何故この会議を無視した全員の態度。磯崎課長の議題説明を含んでも専務の話はまだ始まったばかりでダレる時間でもないはずだ。

伸びた姿勢のまま少し想像した。もう一度チラッと参加者を一瞥して、専務へ視線を向ける。――気まずいな、この空気。

会議室の正面、ホワイトボードに貼られたスローガン。その横にある、どデカイ百インチのスクリーンに手元の資料と同じデータがプロジェクターからの青色光線で投影されている。

いつになく専務は力説して話を続けている。

駿平はゆっくりと視線を落とし、資料を見た。いや見ているフリ、さすがにボールペン回しをしている状況ではなさそうだ。

――ふと気付くと専務の話が中断していた。

思わず専務を見る。話を続けている専務がどうやら異変に気付いた。一瞬、顔色を変えていたが、冷静さを保とうとしているようだ。じつと会議室を見回し、浮いている俺一人に感づくと視線を投げ返してきた。駿平は直視することを避け、それとなく視線を逸らす。

どうか、何事もない事を――。内心ハラハラしていた。

すると、どういう訳か何事も無かったかのように専務が再び話を始めた。なぜ、専務はここにいる連中に一言でも言わないのか？

連中の態度に一喝くらはは。

再び、バシッ！ バシッ！ とスクリーンに響く連打の音。言葉にしない分更に大きくなった様な気がするが。

全員が一瞬首を竦める。皆、顔を上げるが不自然に目を合わせないようになっている。

妙に居心地の悪い、駿平のお尻がムズムズし始めた。口にはしないが専務、相当怒り捲くっているようだ。堪えて会議を進めている態度、隠し切れず露だ。

「うん！」「短く咳払いをして専務は話を続ける。「二〇〇六年の世界全体現況報告書によるとのワーストが香港〇・九四。続いてウクライナ一・一三、スロバキア一・一七と他 国の事態は深刻窮まる。我が国日本はまだまだ最低じゃないが、この数字をどう見る！え！」「戸惑いながらも全員に問うように言い放つ。

「……」相変わらず全員は無言。当然、駿平もその場にいる全員と同じ状態といえる。

ここにいるスタッフ。各支店、支部、関連組織のスタッフ総勢二十名ほどの人員が召集されたこの会議。全員誰もが俯いたそのままの姿勢だ。

張り上げる声の専務に絡まないように会議室に座る全員が、また資料に目を落とした。目を伏せたままの再び姿勢を維持している。相変わらず、貝のように無言のまま。日頃になく専務もこれだけ大声を張り上げていることで萎縮しているのだろう。けれどどこか不自然だ。

さらにバシッ、バシッと連打する。その度に駿平の背筋ビクンとする。

いったい何？ 何んだ、専務の気負った態度。

専務の手に持つ棒のような物をよくよく見る。気付かなかったがそれは五十センチほどの背中搔き具。連打しない時、背中搔き具を弄んでいた。というより捻り曲げ震えていた。スクリーンを破らなばかりの怒りが背中搔き具に籠る。日頃そんな物持ち歩いていなか

ったように思えたし、今日はやはりどこか違う。

「世界経済の墮落！ 先行き不安による人生の将来設計、無計画！」
バシッ！ 相変わらず会議室に響く乾いた打撃音。

「……」全員は誰も目を合わせようもしない。響く音にすら驚きもせずひたすら資料に目を落とす。

スクリーンを叩く専務。スクリーンが揺れて投影されたデータが一瞬歪む。「我々の使命は、地球の繁栄と栄華、それに、子孫繁栄——」と言いかけたところで息が切れる。

専務は深く一息ついてから背中掻き具を持ち直してコツコツと肩を叩く。深く溜息をつくとき持ち直したようで、なおも続く専務の説明、と言うより演説、いや弁論大会といえる。これって営業会議なのか？

「えー、さてさて——」急に言葉に衰弊を感じられる。

「ところが、ここ最近中国の国家成長が著しく目覚ましい。むろん日本も同じく景気はさほど悪くない。しかし……」と言ったところでもう一度肩を落した。息切れる専務。だが、少し俯いていた専務は不意に顔を持ち上げると右手にギシギシと握りこぶしがプルプルと振るえる。そして力を振り絞って再び息を深く吸う。「日本の男女、なんてザマだ？ 二十代、三十代の男女の層に意欲がみえない。弛んでいるのか？ 弛むのは呆けた老人の落ちた頬と中年ばあの下っ腹だけでいい！ この現況を打破する為にも！」

『バーン！』と振り翳した拳を下ろし、目の前の机を叩く専務。

その勢いで机の資料とその横のマーカーペンが吹っ飛んだ。

俺はもうこれでもか、というくらいに伸びきっても伸びきれないほどの背筋が計ってはないが恐らく三センチは伸びたと思えた。多分。

「……」これまた全員の無言。

駿平はスキを盗んで横に座る一人一人をおずおずともう一度、観察してみる。ここにいる全員、これだけ専務の様子を目の当たりにすれば相当萎縮していると思ったからだ。

だが、啞然とする。

駿平が思っていた態度と反する状況だった。出席者の大半の行動に呆れる。

ぎこちなくモタモタする者もいるし、目が泳いでいる奴。腕を組み資料に目を落としたまま考え込んでいるフリの奴もいる。何故かしきりに首を傾げ電卓を叩くフリをしている者。鼻を穿る奴。こっそり携帯電話を覗きメールチェックして親指を動かしている者。これだけの中で船を漕ぎ眠りに落ちていりそうな者。それ以外は、メモを取り何やら手帳に書き込んでいる。とにかく出席者一同の頑なに専務と顔を合わせる者は居ない。これだけ大声を張り上げる専務を尻目にここに居る連中に心底本当に呆れてしまう。専務の無視している態度が露だ。おいおい何もそこまで。あからさま過ぎないか？ バリアを張り巡らし目に見えない隔絶された専務との大きな壁。いや攻防だ。こいつら皆、度胸ある奴ら？

ここまで徹底する目の前の奴らに俺も合わせるべきなのか。その場の空気を読むというより、どう振る舞って良いのか分からず視線は窓へ向けたままだ。どうするよ？ こいつらと同じ穴の貉、同類、反抗者……。いや、この状況ではあるがここに居る連中と一緒ににはなりたくない。けれど知らんぷりはできない。

気を取り直しておずおずと専務の顔を見る。とにかくしきりに駿平は頷く。

会議室上段で専務は語気を強め唾を飛ばす。なおも話を続ける地球規模の課題について。今度は資料を振り翳し、しきりに机にバンバンと叩きつける。分厚い資料が蒟蒻みたいにペロンペロンとしていく。

企画部の岩見が言っていたことをふと思い出した。同期であるとても油断ならない奴だが、時折洩らす内容が結構深い情報源となる。ここに居る連中はすべて常務派に寝返ったのか？ いつもなら会議の席でどうでもいい事をモタモタと話すパツとしない澤田専務だが、今日の会議ではあからさまに違っている。なんで気付かなかっ

たのだろうか。そういえば常務も一緒に参加する会議なんて始めてだな。専務と常務二人の仁義なき攻防。

俺のいる事業部『ハッピーパートナー』。まあ、早くいえば結婚相談所みたいなものだ。この事業部は澤田専務が取り纏める部隊だ。パートナーとなる幸せな男女。そのまま分かり易い事業部隊。けれどそういう呼び名は古臭いし、今時、そんな呼び方はしない。

『ハッピーパートナー』の事業は、立上げてまだ三年だ。軌道に乗っているのかどうか分らない。この世に二種類の人間、男と女。子孫継承の遺伝子、そんな屁理屈を捏ねた言い方は良くないが、結果として『結婚』を理想と掲げているが、金儲けに間違いない。それには理屈が必要である。

『ハッピーパートナー』を配下におく、本社『モリエ ハナ』は歳も五十後半のでっぷりした達磨体系の女社長が興した会社だ。付け加えると副社長は旦那である。どうみても大木に泊る蠅螂のようといえる。

やり手の女社長は、ブライダル協会の専務理事も勤める。一代でこのブライダルビジネスを関東、大阪、仙台、北海道、名古屋、福岡、それと沖縄の七拠点。販売代理店、契約店舗まで合わせると一五〇店舗にまで構えるほどに成長させた。社員数は、ブライダル事業と結婚相談事業『ハッピーパートナー』を含むと一三五〇名を抱える。年に一回のブライダルショーを渋谷の二流ホテルを貸しきって行う。ブライダルビジネスで有名で一世風靡した『ジョー高沢』セコイ男。この男がプロデュースしたブライダル衣装を専属として、我が物顔で威張っている。社員の陰口では、セコイ男。紐同然に社長に媚を売るいけ好かない男として知られている。

先月、二流会社、スタッフ総勢で八八〇名ほどの会社をM&Aした、と社内でのアナウンスがあった。偉そうにいない。うちも二流に毛が生えたようなものだ。

買収された会社の経営陣は当然全員解任。その為、子会社の経営を建て直しの命令が急務勧告された。当社の責任者となる人物が専務

クラス以下の連中、各セクションの部署を統制する。その辺りの流れからして当然の適任者は本社の派閥争敗者に自ずと任されると社員も読んでいる。

だから今日の会議で問う結婚相談事業の本キャンペーン企画の成功か？ それとも失態か？ 専務の采配に掛かっている。それをハイエナのように見据えてスキあらばこれ見よがしと常務は黙っている。現在の妥当な線として、専務か常務か何れにせよ子会社の責任者、社長に座り臭い飯を食わなきゃならない。所詮、本社からの追い出し。這い上がっても将来は絶たれる。その時にはすでに役員も入れ替わる。挙句の果てには、行き場のないポストが待っているだけだ。

女社長の息子、専務と常務だ。まさに一家眷族の会社だ。次男の専務、長男の常務。兄弟の役職が逆な事は実力の差が歴然としていた。日頃は物静かでパツとしない専務、だが見かけと違い手腕を問われる大きな仕事や結婚相談事業を今までこなしてきた。だから社長はどこかしら次男の専務を買っている。

兄の常務は役職が下になる。当然、それなりの大役をこなす事はない。この先任せられないし、経営者なんて不安この上ない。よってM&Aした会社の社長の座となるのだと誰もが読んでいる。言うなれば、社長を補佐する専務と常務との小競り合い。恐らく、常務はわが身の危険を察知し、専務への攻防だ。敵意剥き出しを露にする兄、弟へ万難を排した宣戦布告だ。その気配に気付いた専務。企画部の連中も専務に捲くし立てられ期限ギリギリまで缶詰状態で仕上げたに違いない。この企画も専務直々での立案であるらしい。それも相当の入れ込みである。

だからか、あれほどの勢いで相当息巻いているのが分かるがこの求心力のなさ、それに強硬なまで甚だしく無視する連中。一部のアホな出席者を除いて恐らくここに居る大半が間違はなく常務派なのだろう。どうやって手なずけたかは、俺の頭ではそこまで分からないが専務は最近体調を崩して病院通いと岩見から訊いたことがある。

何れ専務の体力も限界があるとの見方なのだろうか？

得々と続く専務会議――。

しかし、専務の話は分かる。今や全世界規模の問題であるに違いない。温暖化や高齢化も政治経済の失墜。どれをとってみても今後の社会は課題が山積みである。確かに厚労省は晩婚化晩産化が一番の原因と言っているが、そもそも本当に結婚をしたいだけなのか、それとも子供が産みたいのかという問題が大きいのでは？ 過去の理想的家族というのは崩壊しているといえる。結婚による自由の拘束、経済的苦悩やらで結婚するメリットがなくなっている。どの国をとっても少子化が深刻な問題となっているだ。結婚しても明るい未来はあるのか？ 非正規雇用社員の多くは生活の不安を抱える。ワーキングプワ―問題も老後の介護や年金問題も以前と先が見えない社会に誰しも、のほほんとしていない。そんな青臭い化石じみた考えはすでに崩壊でいる。

そんな事より俺は目標数字を達成すればよいのだ。専務企画のキャンペーンを自分の所属に卸せば良い。関係無い訳ではないが今、ここで少子化の問題定義を問いている事より、立案企画したキャンペーンの成功。会員数を獲得し、目標をクリアして高成績を収めれば良い。結婚の二文字をなんて俺にはまだ無縁だ。

こんな広く深い話よりもっと詰める内容があるのではないのだろうか。いったい専務の言いたい本キャンペーン企画の話は何処に行ってしまったのか？

手首を返し、腕時計をチラッと見る。十時三十五分、専務が話し始めて既に三十分は経過している。

いい加減にスケールダウンした話にしてくれないものだろうか。勢いのあまり話が大きいままだ。何が言いたいの理解できなくなってきたぞ。ボロボロになりかけの資料を片手に息巻いて滔々と話す専務。話が前後しても要領得ない話になっても止めはしない。

相変わらず専務は渾身の力を振り絞り、ギシギシと歯噛み、目ん玉をひん剥いた形相で息巻いて捲し立てる。あれじゃ、ぶっ倒れる

のじゃないか。

はあ、疲れる。専務の気迫も忘れ、気付かれぬように駿平は溜息を落す。見た目俺も回りにいる連中と同じように見えるのだろうか。昨晚もホテルで行われたうち主催のお見合いパーティーで運行係と司会の補佐を急遽させられ狼狽した。慣れない補佐を任され、ドギマギしながらもなんとか乗り越えた。幸いに会場に来られた全員が二度目、三度目と参加でもあり、回も重ねていたお陰で事無く三時間ほどの立食パーティを終わらせた。クタクタな上、朝からのこの会議。とても疲れる。

「おい！ そののやつ！ 何故だと思う？」バシッ！

突然、専務に名指しされた。思わず身を引き、息を呑む。

宙を見上げ、窓から見える遠くの景色を見ながら頭の中で昨日の考え事をしていた駿平が専務へと何気に目を向けるとバツチリ目が合う。専務は目を剥いて背中掻き具で俺を指差している。すると他の全員が同時に視線を向けてきた。あたりをキョロキョロ見廻しているとダメ押しされた。

「おまえしか居ないだろう。」

「え、俺ですか？」駿平の声が裏返る。――やはり俺か。

「ああ、そうだ。君しかおらんだろ。名前は？」専務は背中掻きの柄側で駿平を指す。すると背中掻きが消えた？ いや、力尽きたように握る背中掻きをダランと落す。

あれ、専務。どうした？ おかしい。顔色が悪そうだ。専務に気を取られていると何か一つ、突き刺す光り？ 感じる何か――。

目にチカチカと光線らしきものとすぐに分かった。

その突き刺す光が胸の辺り、一センチほど赤く丸いスポットが揺れている。思わず窓の外を見た。標的にされた俺の額、照準は隣ビルの屋上から向けられたものなのか？ 狙いを定められたターゲットのようになる。

殺し屋？ 俺を狙われている？ まさか――。

俺は怨みを買う覚えは無いが、この商売は時として人を崖から突

き落とすようなこともある。いやいや、それでも俺にそんな怨まれるほどの甲斐性はない、はずだ……。しかし、多少の心当たりあるとも思える。

「おい、聞いているのか？」バシッ！ 生気を失いかけているような専務の声が聞こえた。

視線を戻すと目にキラリと刺さる光線。眩しい！ 手で遮る。今度は自分の手の平に赤い光。

室内を素早く探る。するとその放つ光の発信源がやっと分かった。常務が手に持つプロジェクターの電子レーザーライトペンの光線。それも赤いスポットが揺れている。

危ねー、そんな物、人に向けるな。何考えてるんだ常務！ この唐変木！ 腹の中で毒づく。

「おい、お前さっきからどうした？」

「あ、はい。私ですか？」動揺を隠し切れず裏返ったままの言葉を飲み込み、冷静を出来るだけ装い、自分を指す。

「何度も言ってるだろうが」

駿平の行動に不審を抱く。その不審な行動の原因が常務の悪戯と分かると横目で睨みつける専務。目で恫喝する。

常務は電子ライトペンの光線は止め、首を横に振りそっぽを向く。その仕草を睨む専務の口がへ字に歪み、鼻の孔が一段と大きくなる。会議室の室内照明が専務の額を照らす。薄く不毛地帯と化した一带にネットリと汗が滲む。専務との距離はあるが、ものの見事に窺える。

気を取り直して右眉を吊り上げ駿平を睨む。本人は鋭い視線で睨んでいるのだろうが先ほどの気迫がまったく無いし鋭さが失せていた。

「ところで君、名前は？ ん？ どの部署か？」駿平を遠くから見下ろすように言う。

「野呂です。東部支社の野呂駿平です」

「ノロ？」専務は間を置いてから思い出した「あ、山根君のところ

の？」眉間に皺を寄せ訝しげに訊く。

「はい？」それがなにか？

「いや、なんでもない。まあ、いいから言ってみろ！ さっさと答えろ！」バシッ！

やべ、訊いてなかった。思わず俯く駿平。つい、横の連中と常務の悪戯に気を取られ、あれこれと会議とは関係ないことを考えていた。

——つい訊き直した「で、何を？」駿平はすつとぼけた間抜けな返事を返してしまった。

『バスッ！』専務の背中搔き具を机に叩きつける。いったい、そんなに憤慨しなくても。唇を歪めガキみたいに切れそうな振る舞い。大の大人が勘弁してくれよ。

まいったな。これ以上、下手ないい訳や切り返しをすれば尚悪い。当たり障りのない返答しないとな。しかし、今日の専務はいつもと違う。いや、もともとそんな人だったのかもしれない。ドロ臭い営業畑で築きあげた自前論を振り翳す時代の先駆者は俺の言葉を遮るかのようにかぶせてくる団塊の世代の頑固親父を絵に描いたみたいで、高度経済成長時代の化石人間といえるのかもしれない。

その横でこの会議をおちよくっている常務は知らん顔して腕組している。どこか遠くの空を見るように窓に視線を向けている。

「だから、日本のこの数字をだな……。『1. 25』この出生率の実態だ。おい！ お前何を聞いていたんだ？ え！俺の話を読み取ってなかったのか？」専務が擦れる声で言う。

「え、いえ……。その……。」「なんとと言うか、『1. 25』の実態がどうしたと言うのか？」

しどろもどろに言葉を探す。

「ええい！ もう、いい！」バシッ！

専務は俺をバツサリと吐き捨てるかのように切り捨てた。勝手に匙を投げるなよな。更に自分の敵を作るのか？ 大袈裟な所作、専務の顔が赤らみを帯びている。それも赤黒い形相に歌舞伎役者のよ

うにも見える。

「とにかくキャンペーンだ。いいか！」パシッ！心なしか響く音が弱くなったような気がした。「今回のキャンペーンは今までにない企画だ。詳細はこの後、部長の方から説明をして貰う。まあ、とにかくだ。結婚しないことには少子化問題も解決しない。そこが当社の社会責任とも言える。練りに練って今回は、……した。し、た……」

やっとキャンペーンの話になってきたか。

しかし、変だ。専務、なにか様子が変わだ。俯き、溜息を着いて椅子を掴む。掴む手がプルプルしている様子が見て取れる。

テーブルにあるミネラルウォーターのボトルを傾けグラスへ注ぐ。一息ついてグイッとミネラルウォーターを飲み干す。それからネクタイを緩める。背を伸ばしもう一度、手に背中掻き具を握ると背中を掻く。荒い息遣い。肩で溜息をもう一つ着くとかぶりを振り、気を取り直した表情を見せる。

「はあ……、さて、どこまで話したかね、それから――」まだ、話すつもりか？ そろそろ部長と交代するのか、と思った。こちらも溜息がでそうだ。

資料に目を落とそうとした。突然、床に響く物音。一同が揃って音のする専務へと目を向けた。

専務は俯いてテーブルに両手を着く。先ほどより息遣いが荒い。形相も違う。背中掻き具が床に転がっている。先程の顔つきより醜く明らかに変だ。

側にいる部長がそっと耳打ちする。

「おお、そうだった。うん。はあ……」

体を起こす仕草も今までとは違い、どう見ても異常だ。青ざめている。さっきまで息巻いて矢継ぎ早に話す専務の額に脂汗が滲むのがここからでも見て取れる。

「さて、いいかね。手元の資料に……」「うっ……」と、そこまで話したところでまた椅子に手をかける。胸に手を当て抱きかかえる

ようにしたかと思うとドサツと鈍い音をたて、床へ座するというより膝を突き倒れこんだ。

「専務！」

「専務！ どうされました？ 専務！ 専務！」側にいた部長が慌てて詰め寄る。

会議室が揺れる。全ての視線が一斉に上段へ向けられる。辺りが騒然となる。

すかさず駿平も周りの社員も駆け寄る。

息苦しく唸る専務の形相が赤鬼のようになる。悶えて口をパクパクとして焦点の合わない目線。全身が硬直し顔は引きつり、痙攣し始めた。悶えておぞましいほどの形相で口元は涎まみれになっていく。

散々、息巻いていた専務。あの会議室に轟くほどの大声で一時間ほど力説していた挙句、ぶっ倒れてしまった。

横で慌てふためいている課長は手に持っている資料でバタバタ狼狽して扇ぐ。

常務もうろたえる仕草、声を荒げて大音声で叫ぶ割には妙に嘘っぽい。心配の欠片もない嘘の言葉、歓喜のお叫び、作り声で芝居そのものの。

取り巻きの部長と課長二人に抱きかかえられるように専務は連れ出された。おいおい、そつとしておかなくて良いのか？ その場で横にして救急車を呼んだほうが――。

会議室が揺れたと思っていたが、実はそうでもなかった。その場に居たのは駿平を含め三人ほどの社員。常務を含め他の連中は驚きと言うより、席に着いて冷ややかな視線の奴、コソコソ話でニヤリする奴、鼻を穿る奴、中には一瞥だけして資料に目を通す奴、携帯電話を見ている者もいる。とにかくどれもこれもその姿に呆れるどころか心底軽蔑する。

本社ビルのロビーに横付けされた救急車へ担架で運ばれる澤田専務。心配しているというより、参加者一同も追いかけてロビーに野次

馬みたいに集まる。そして救急車を取り囲む。

サイレンの音をたて、野次馬を掻き分け、救急車が発車する。ビルを曲がり、本通りへと勢いよく消えた。

見送るその中の一人、常務は腕を組み肩が揺れる。それとなく横顔をチラッと窺うと唇が攣り上がりうっすらと含み笑いを浮かべ、ほくそ笑んでいるように窺えた。

はあ、溜息をつく。自信失いな……。この会社長く勤めて行くことに嫌気差しそうだ。

「よう！」

いきなり背後から呼ばれる。声のするほうへ振り向くと岩見がズボンのポケットに手を差し込み立っていた。

「少し、いいか？」

さてよ。腕時計を見ると会議が始まるにはまだ時間があった。あの騒動の為、会議が一時休憩となったのだ。

「ああ、いいけど」駿平は頭を掻きながら背中を見せ歩く岩見の後に続く。

ロビーの一角に設けられた喫煙室で石見と二人、ロビーを行き交う通りの見えるカウンターに並んだ。本社ビルの裏側に面した一角の為、ほとんど人通りがない。時折、社内の人間が横切っていく程度だ。喫煙室を見渡してみても誰一人いない。本社も最近禁煙となり、この喫煙室でしか吸えない。男性社員も最近禁煙者が多いと聞いた。それに仕事や会議の合間も態々、ここに来て吸うのも面倒だから利用する者は少ないようだ。

窓の外を横目に見ながら、おもむろに取り出したピースを咥えろと岩見は勧めてきた。

「いや、俺はいい。最近、メンソールに変えたから」

「そうか……」

駿平が懷から、ウイNSTONメンソールをボックスから取り出すと、岩見がライターの火を差し向けてきた。軽く吸込むと脳天まで

煙が行渡る。俺は胸にニコチンが廻る、というより脳みその隙間を駆け抜ける煙と思う。更に深く思いつきり吸込む。するとクラツと眩暈がする。

高校に入学した時からこの軽い眩暈を一種の恍惚的陶醉感。繰り返し求める中毒感を症状に溺れている。やはり脳天だ。

紙コップに注がれたコーヒーを一口啜り、灰皿へ灰を軽く落としもう一口吸う。

わざわざ呼び出して何もしない岩見。カウンターから見えるロビーを見遣りながら煙草を燻らせるだけだ。何か言いたいことがあるならと。業を煮やした駿平が切り出す。

「しかし、常務の奴、今頃裏で大笑いしているのかな」駿平は揶揄して言う。

「ああ、そんな感じだな」煙草の灰を落しながら岩見は小声で呟く。

「おまえ、どっちに付いているんだ？ 聞くまでもないだろうが」

駿平はなに気に聞いてみた。

「俺か？」自分を指さす。

「専務派なんだろ」当然のように駿平は言う。

「俺は別にどっちでもいい。派閥なんて性に合わない」肩を窄める岩見。

「え、そうなのか？ 企画の連中は専務派に属しているんじゃないのか？」

「そんな、有る訳がない」

「そうか、悪い。そんな風に見ていたんじゃないからな、気を悪くしないでくれ」

「いいか、こんな事で派閥争いに巻き込まれ、コバン鯨のようどちらかに張り付く。そんなの愚の骨頂だ。なんでそんなことを気にして先行きを決めるアホとは違う」岩見は少しムツとした顔から鼻でフンとすると冷ややかに言う。一口吸うと煙を吐き出す。「むろん、おまえもそうだろう」吸いさしを灰皿に捻じ込む。

「ああ、まあな」駿平も頷き言葉を返す。別段、興味がないがそれ

なりの顔つきで虚勢を張る。確かにと言っていないほど気にしていなかったし、これからも気にするつもりはなかった。

「ところで山根課長、元気か？」

「ああ、何か？」

「いやな、変な噂を聞いたんだが……」

「え？」

「ここだけにしておいてくれ。実は――」

課長がどこかの組織？ 暴力団？ 裏の組織？ とにかく変な奴らとの付き合いがある、と噂されている。もし、何かあれば教えて欲しい。本社直々に表立って調査する訳にはいかない。

岩見は上層部から内偵の命を受けている。しかし、本当だろうか？ そんな風なおやじじゃないと思うけどな。

岩見は湯気も立たないほどのコーヒを一気に喉に流し込むとその紙コップを屑籠に放った。そのまま手首を返し、腕時計をみやる。

「それだけだ」

「そうか……、課長がね」

「ああ、そうだ。お前も気を付けろよな。じゃ、俺行くわ」

「あ、ああ。いやちよつと待ってくれ！」

「何かあったのか？」歩き始めた岩見が首を捻る。

「あ、いやいい」口ごもった。

「そうか、じゃまたな」さらりと背広の裾を翻し喫煙室のドアを押す岩見。

「ああ」駿平は浮かない顔で一人、届きそうにないくぐもった声で答える。

喫煙室のガラス窓の前をシャキツとした足取りの後姿で過ぎていく岩見の背中を少し疎む視線で追う。

――あいつ、さゆりさんと付き合っている。そのことが今でも引かかる。分かっているが拭い去れない苛立ちもある。そのことをつい訊こうと喉もとまで言葉がでかったが飲み込んだ。

あいつの口から本社営業二課のさゆりさんと付き合っている事を

聞かされた時は、相当面食らった。

入社後、すぐに岩見と二人同じ部署に配属され、外回りへと先輩に連れられヘトヘトになるまで回った。それでも、帰社した営業の疲労感を一変に吹き飛ばす。彼女の慰めのような囁きの声。一瞬に止めた、外回りしても良いかも、と思うほどである。彼女は、誰もが頷くほどの容姿と気品が漂っている。しかし、臆面にはさらさら出さない女性ときた。営業部のマドンナ的存在だ。恐らく、同課の営業は大抵がそう思っていたに違いない。

ところが、どういう訳か岩見とくっ付いていたとは。よりによって、何故同期の岩見なのか？先輩を含む二課の営業は誰一人とこの事は悟られていない。偶々、岩見のアパートに行った時、彼女の贈り物に気付いた。

さゆりさんとの事、岩見はワザと俺に示唆してきた。その示唆はいわゆる見栄ってやつだ。けれど大丈夫。あのさゆりさんが岩見と？彼女のきまぐれに違いない。まあ、それ以来俺としては、岩見がいずれ振られるのを高見見物という事で知らぬふりしていた。

だからといって岩見を落とし入れるほど落ちぶれてはいない。そこまで腐ってない。チャンスは平等に廻ってくる。物にするかどうかはその人間の厚みだ。さゆりさんが愛想尽かすに決っている。決して悪い奴じゃないが女好きだ。だから、黙っていてもいずれ破局が訪れる――。多分、恐らく、なんとなく。いや、そうに決まっている。それを思うとイライラする。

二人のその後を探りたかった。付け加えて専務と常務のことをもう少し訊きたかった。

それを訊いたところでどうなる訳でもない。これ以上訊いても同じ事だと思うと、どうでもいいような気もした。しかし、あいつも派閥争い露のこんな会社にいることって、どうなのか？駿平は肩を竦めて溜息をつく。煙草を揉み消す。

勝ちを意識するあまりにブツ倒れた専務はダムの決壊と同じく、ああなっでは事実上の敗北を意味する。

喫煙室の壁にかかる時計を見ると十一時になろうとしている。「ヤバ！」駿平はコーヒーを飲み干し、ゴミ箱に投げ込むと会議室へと急いで向かった。

本社の企画会議、年末会員加入キャンペーンの施策説明を部長が二時間ほどかけて話した。その後は各支部からの責任者全員に現況報告させた。あの専務の騒ぎがあったにもかかわらず専務不在でも会議は進行し、終わったのはすでにどっぷりと日が落ちた夕刻だった。一日をかけて行われた会議、緊急中座した専務をよそにビツチリと行われた。

その後、常務は会議室に姿を現さなかった。すでに陰で画策を張り巡らせているのか、いや恐らくゆっくりと一席設けているかも知れない。一抹の不安を抱え駿平は会議室を後にした。

会議室を出て直ぐに手首を返し腕時計の針に目を落とす。十八時三十五分。もうこんな時間か。

ここで電車に飛び乗り事務所へ戻れば、明日朝からの営業会議の資料作りと今日の会議資料報告を同時に出来そうだと考えた。そのほうが二回に分けてやるより良さそうだ。

駿平は足早に中央エレベータに向い、閉じかける扉を割って乗り込む。軽い無重力を体に受ける。数秒後、足が地に着く感覚。扉が左右に割れるとエントランスホールへと降りる人に揉まれエレベータから排出された。

目の前に帰宅を始めている社員を掻き分ける。雑踏へと思い駆け出そうとした時。見覚えのある後姿が目飛び込む。

山根課長？

そういえば、今日は責任者会議もあったのだ。山根課長、本社へ出向いていると訊いていたが、まさか同じ時刻にばったりとここで遇うとは思いもしなかった。

ここで捕まれば、一杯付き合わされる。一杯ならまだしも、この前は偉い目にあった。一杯、たかが一杯の焼き鳥屋で三十八本もの

串を平らげるし、挙句の果て財布の中身は千円ぽっち。俺の財布から支払っておいた。呑みに行くなら、自分の懐具合を弁えてから誘ってくれ。上司だろ！ そんな上司何処にもいない。化石みたいな課長と付き合ってられない。

とにかく、貰い癖が抜けない人間だ。

気付かれぬよう踵を返し、その場から一目散に裏口へ踏み出そうとしたが、ふと石見の顔が浮かんだ。けれど今はいいい、駿平は逃げるように電車を乗り継いで事務所に戻った。

第一話（派閥争い） 2

2.

「はあ……」項垂れる駿平。

机の上に積みあがる資料の山。また、溜息を漏らすと虚ろな目で資料を一瞥した。

それにしても疲れた。うんざりだ。――まったく。

首をコキコキ折る。駿平はパソコンに向ってカタカタとキーボードを叩く。

今日のキャンペーン企画会議での内容を現場に添う内容に纏め、支部の現況を本社への報告書する命令指示を受けた。付け加え明日の資料を準備もしなきゃいけない。

やはり今日は止しておこうか。気が乗らない。眼鏡のつるを摘まむと耑るように外し、目頭から頬にかけて両手でゴシゴシと擦る。連日の残業疲れのせいか、しどろになり行動も大雑把になる。

胸のポケットからいつもの調子で煙草を取り出す。啜えると駿平は両手を頭の後ろに回し、だらしく背もたれに体を預ける。臀部が前にずれ、間抜けでしどけた格好で座る。ネクタイを弛め、天井を見上げぼんやりと考える。

天井の蛍光灯に蚊が漂っている。最近は季節に拘わらず蚊がいるような気がする。未だ四月に入ったばかりだと言うのに。そういえば、近年インフルエンザがこの季節まで日本領土を席卷している。この蚊もその一味か、刺されたらヤバイのかも。蚊？ インフルエンザ？ マラリア？ まあ、どちらでもいいや。

しかし、このキャンペーンの結末はどうなるのだろう？ 専務が復活できなきゃ、意味がない。このキャンペーン企画本当にやれるのか……。

事務所に戻る途中も岩見と携帯電話で話した。

「専務の病名だが……」岩見の小声。

専務の容態はあまり思わしくないらしい。表向き、対外的には一週間くらいの入院と二、三日の自宅療養、と家族から連絡を会社側に報告をよこしたらしい。どうやら本当のところは隠しているようで、社内には別の病名が流れている。血栓による脳梗塞、当分入院らしい。それに後遺症も残るとすれば、リハビリをしたとしても年明けになるだろう。いや、それ以上もつとかも。しかし、その裏情報病名も怪しいものだ。なんせ専務の存在が気になる。同じ血の繋がる兄弟なのだが、『血は濃い』と憎しみもお深いものがある。「専務ヤバイな……」携帯電話に向かって話す駿平。

「そうだな。でも、別段おれは派閥争いに加担している訳じゃないから関係ないし、まあ、どうってことない」と岩見の相変らず関係ない口調で言う。企画の連中は専務との繋がりが深いはずだが、更に付け加えて他人事のように話す岩見「それがな、担ぎ込まれた病院の院長は専務の知り合いらしい」

裏で手を回し、病院筋に操作しようものなら……、まさか、とは思うが。あの状況で担ぎ込まれた病院からの様子はいち早く院外のある筋へ内通している。それがもし専務だとすると、快復を遅らせる指示をすれば当然、いやもっと致命的な状況に追い込む事も可能だな。そうすれば、専務は復活の可能性はない。キャンペーン企画書どころか専務その本人が居なくなれば、それも本人が手をかけず傍観者の専務の思うまま。

「しかし、そこまでは考えすぎじゃないか」

「いや、十分あり得ると俺は思うが」岩見は相変わらず淡々と話す。駿平は岩見との電話でのやり取りを思い出した。自然に腕を組みなおし、机の卓上カレンダーに目をやる。

突然、ビジネスホンが鳴る。静寂な事務所に響き渡る電子音。ズルッと危うく椅子から滑り落ちそうだった。

慌てて、起き上がると壁にかかる時計を見る。すでに十一時を回っている。もうこんな時間か。

誰なんだ。いったい――。

舌打ちしボヤクが、一息おいて駿平は受話器を取り上げる。

「はい、こちらハッピーパートナーです」こんな時間帯にいつもの馬鹿丸出しの受け答えはないだろう。この業界は、こんな時間帯でも不意打ち的に連絡が飛び込んでくる。そんな事は分かっているが、会社の対応はダラシナイ。当然、個人的な感情面を訴えられないように携帯電話の番号は会員にも知らされていない。

「山さん？」

「は？」いきなり、山？

「カミムラで……」

「はい？」

「あ、……」

「あの……、もし……」こちらの出かたを窺うように聞く。

「……」

なんだこいつ、急に無言になりやがって――。

「もしもし！」

「……」間違いなく電話越しに聞こえる息遣い。

「どちら……」と言いかけたとたん、「ブツ」と耳に聞える。つたくも――、

山？ 確か……山さん？ て、山根課長？ そう聞こえた。今日

は『山さん？』と確かに聞こえた。『カミムラ』と名乗る。最近、無言電話が矢鱈多い。嫌がらせか？ いたずら電話と思っていた。

不思議と夕方からの時間帯が特に多く感じられるのはやはり、何かあると思っていた。――確かにカミムラと名乗った。それも『山さん？』名指しで言った。これは岩見が言っていたあの事だろうか？ 受話器を戻し、溜息をつく。眉に皺を寄せ、腕を組み呻る。いきなり課長に問いたただすのは変だ。確証がない限り当分このことは岩見には内緒だな。

けれどこの電話からしてもう連絡が無いかもしれないが。気を取り直してパソコンに向う。

えーと、資料に目を落とす。キャンペーンは専務抜きでも当面は部長の指示の基、推し進められる。派閥争いがなくても俺のいる支部も支部毎にスローガンを掲げ、同業他社へ巻き返しを図ることがここ数年の行事となっている。これも例年のことだそうだと。

結局、今月から三ヶ月間は強化月間キャンペーン。この数字、何度見ても目が皿になる。三ヶ月のこの期間で年間の売上げ半分を積上げなきゃならない事になる。本決算が十二月ということもあり、最終の詰めがこのキャンペーンの目的である。

先ずは、会員登録者数の目標数字。

うちの支部で百五十名。三ヶ月間でこの数字をやる為には月当り五十名。会員の新規入会費用が三十万円、年間更新金額が五万円。先ず、百五十名として四千五百万円、月にして千五百万円。それから、成婚数目標数字。七十五組の成婚を目指す。月当たり、二十五組。現在の会員と新規会員から、仲介成婚による一組の成婚金が三十万円とし二千二百五十万円、月にして七百五十万円。

この目標数字は、日頃の一・五倍の目標値として設定されているが概ね達成しなければならぬ。

今から三ヶ月もの間に、六千七百五十万円を稼ぎ出さなければならぬ。この数字可能か？とにかく、月に二千三百万円近くを売上げとして叩きださなければならぬ。なんだか、クラクラしてきた。どう考えてみても無理。不安が胸の中で広がり始めていた。

支部全体の売上げ。俺個人の営業成績は先月に引続き今月もヤバイ。月末が近いしこの調子で売上げを伸ばせなかったら、居場所なくなるな。まさか、澤田専務のように子会社へ出向なんぞ言われた限りには。

一週間で成約組残り十組。土台無理な話だ。策が思いつかない。本社の部長連中は、アナログで培った営業を俺たち社員に押し付ける。とことん回れ！見込み会員を作れ！死んでもいいから客に喰らいつけ！もっと若い女を捜せ！すれば、男は間違いないから喰い付く！なんて、本当にアナクロリズムで泥臭い営業を強要して

くる。それが支部の成績となっているのか。このキャンペーンの達成策も課長の口から聞かない限り不安だ。

若い奴らは、結婚願望なんて微塵もない。それをどうやって……。多少の嘘でも構わない。嘘から始まる本当の恋もあるくらいだから、躊躇している男女の背中をチョイと押してあげるだけだ。勢いも必要だ。

とにかく、何とかして数字積上げないと本当にヤバイ。

今年の四月人事異動で、本社営業からここに着任して半年が過ぎたばかりの俺だって分かる。この時期に三ヶ月の強化月間、だから日々職員全員は山根課長と目を合わせることを避けていたのだ。その為、有無を言わず新人の俺がこのキャンペーンに係わる担当する嵌めになった。

だが、不思議な事にうちの支部は小さいながらここ数年目標をクリアしていると言っていたな。会議の席で昨年と一昨年の成績を部長から紹介された時、支部単位では三番目の成績らしい。だったらなおさらプレッシャーだ。

とにかく今日の会議資料を明日、課長に報告しておこう。指示を貰い、事を進めて行くしかない。本当にあの課長で乗り切れるのだろうか。どうしても領けなかった。本気で不安になって来た。

おもむろに灰皿を探す。書類の下、バインダー、足元まで探す。その仕草と同時に机の引出しからライターを取り出し握っていた。

「はっ！」半開きの口。思わず肩を竦め、周りを見回す。俺にとって自然な仕草だ。まあ、いいか、もう一度思った。既に誰一人いない。当然だ。おれ一人残業だ。

などと思いつながら啞えた煙草のフィルターが下唇に張り付きプラプラとしている。

ダメだ。やはり本社通達のことを思いなおし、煙草を啞えたままその場を離れ、廊下から非常口の階段踊り場へとペタペタとあるく。先週、本社から禁煙の通達が流れた。例外なく、この事務所もだ。『そうだ、きっぱりとするべしだ。大人のマナーとはこういう時に

あるべきものだ！』すべからくルールを守るのが社会人に勤め、とほごく。声を張り上げ、言葉の語気が強く大きくなる。決して俺は小心者ではない。だから喫煙も我慢したのだ。本社の通達に叛くことが怖いわけじゃない。

「ふーっ」吸込んだ煙を見上げた夜空へと吐き出す。

後ろ頭をガシガシと搔く。非常口の踊り場の縁に両腕を乗せ、身を預ける。もう一口吸う。今度は、膨れっ面で口から洩れる煙。吹かす煙草は一瞬にして薄闇に溶け込んでいく。指と指の間に挟まれた煙草の火口から緩く立ち上る煙は明るい夜空へとゆっくりと吸いこまれる。

だいたい誰も居ないオフィスなのだから。ちよっとくらの煙草……、喫煙なんて分かる訳がない、と。――暫く考えた。

自然と溜息が漏れる。情けない。強がれず項垂れる小心者だ。息巻いても上の人間には面と向って言える訳が無い。

何気に見下ろすビルの裏面。外階段から薄闇の中、蠢く人影。通用品の横に供えてある横長の腰掛に茶髪に染めた高校生のガキが女となにやらイチャついている。女の肩に腕を回している。その反対の手には火が薄っすらと見える。

このビルの裏手は、通りからまったく見えない。死角となる通用口に何故か腰掛が置かれているのも変であるが、誰が置いたものなのか管理人もまったく関知しない。

このヤロー。こんな時間までフラフラして。クソ生意気なガキが色事で遊興しているようじゃこの国も終りだな。こいつら、まさかな……、このまま結婚するような玉じゃねーな。今さえ良ければ、と明日の生き方も将来の人生を描くほどの想像をする事があるだろうか。その前に一発。大人を舐めるな、人が残業までしてろくすっぽ飯までお預け状態。それどころか帰りの電車も危ういのに。更に追い討ちをかけ、苛立ちを覚える。

ふと思いつきで遣ってみたくなった――。

駿平はモゴモゴと口に溜めた唾、下を見下ろすと大凡狙いを定め

る。女を抱き寄せたガキが丁度この真下に移動した頃合に『プっ』と口を離れた。

腹立ったので唾を落してやった。

唾が音も無くスーッと消えて行った。

ほどなくして下から大声で吠える怒声がビルにこだました。

「誰だ！」

ザマーみろ！ 見事命中だ！

こんな時間にイチヤついている奴が悪い。駿平は勝手に自分の都合で頷いた。

もう一度見下ろす。

薄闇の中、あいつらはこの場をそそくさと退散したか、どうか？
ところが、高校生のクソガキが見上げている。それも半端な面じゃなく、その辺のゴロツキ、ヤクザみたいな形相でだ。

見下ろしながらそつと引き、階段の踊り場へと半身を隠す。すると視線が合った様に思えた。ゆっくりと空を見上げ、視線を逸らす。自分でもはっきりと耳に聞こえるほどゴクリと唾を飲み込み喉が大きく上下した。

流し目で見下ろすと怒り納まらぬ顔つきで階段を今にも駆け上がるうとしていた。

駿平は体が引き攣り、吸いさしを下に向って投げつける。結果として更に相手を威嚇することになる。不味い、益々もって状況を悪くしている。

「てめー！ そのおまえ！ 待ってろよな！ ぶっ殺したる！」

薄暗い闇の中、目を剥き出し、指さし見上げる姿が分かる。それに恫喝する大声。

おいおい高校生だろ、そんな怖くていいのか……。物騒なこと言うなよな、たかが唾ごときで。このクソガキの吐き捨てるヤクザ並みの台詞、空いた口が塞がらない。

ほざいていたガキの姿が階段に吸込まれた。いや、階段を駆け上がる気だ。普通ならガキのほうが逃げるだろう。いや、この場合は

俺が逃げるのが普通だ。

う！ ヤベ！ 洒落にならん。

今日日の高校生、いったいどうなってるんだ？ 泣きべそ掻きそうになる。何が悲しくて、高校生のクソガキにビビらなきゃならんのだ、と思いながらも腰は引け、非常口に戻らずそのまま階段を駆け上がり、駿平は八階まで這うように脚が縋れそうになりながら逃げた。

そのまま非常口から戻れば、六階のフロアーを虱潰しに探すと一発だと思った。だから、駆け上がってフェイントをかます。八階の非常口から廊下に抜け、建物内の階段で四階まで駆け下りた。そこからエレベータで六階までゆっくりと呼吸を整えながら登った。

これだけ攪乱すれば、気付かれないだろう。ましてや夜だから面は割れてないはず。以外や以外、咄嗟に浮かんだ考えだが、まずまずと思う。だが、待てよ。虱潰しに片っ端から探していけばひとたまりもない。

エレベータのドアが両側に割れて廊下の空気が流れ込んできた。ゆっくりと首を出し左右を確認し、誰もいない事を確認して半身を乗り出す。こんな時間に誰も居るとは思えない。それに追いかけるれるとは思いつかなかった。気が動転している割には、思いのほか凄く冷静な自分に呆れた。

「ふうー」大丈夫だな。

エレベータのドアが閉まりかかる。慌てて両腕で押し開き飛び降りた。

駿平はソロソロと廊下から事務所の入口まで進み、さっとドアを開けて滑り込んだ。念の為に鍵を落とし、照明を落とす。あたりが一瞬にして薄闇と化す。廊下の非常灯がぼんやりと入口のドアを照らす。事務所の壁時計が刻む音。チクチクと刻む音が何時もより耳に飛び込む。

心臓がバクバクと跳ねる。

誰かに追われるとは小学校以来だ。同級生の女子と喧嘩したくら

いだな。

男子と女子二名ずつ週単位交替での掃除当番。エスケープしようとしたところを女子に見つかり、先生に言いつけると言い出した。後に引かない女子にふざけてモップで殴りかかると女子から返り討ちを浴びてしまった。一発直撃。モップの柄が脳天にクリーンヒットした俺は引っくり返り、その弾みでバケツの水を教室に辺り一面にぶちまけてしまった。ビシャビシャに服を濡らしたその女子は更に逆上して怒り捲くり追いかけられた。だから中学生くらいのガキに追われても怖いものだ。血迷った人間は子供であろうが、女であろうが怖い。駿平は遥か子供の頃から悟っていたはず。けれどそんな教訓を忘れていた。

更に脈が早まる。外の廊下に何やら小突く物音が聞える。少し大きくなってきたように思える。小便チビりそうだ。こんな時に限って尿意を催す。堪えれば堪える分、益々催す。股間を押さえ、内股になると両手で押さえつける。そして、堪える為に自然と貧乏揺すりを小刻みにしている。

足音が廊下に響く。人の気配がし、事務所入口に近づいてくる気配。

すると足音が止む。

足音が聞こえない廊下はシーンと空気が止まる。貧乏揺すりもピタリと止まる。

暫くすると突然、カタカタとドアを揺する音がした。身を引き飛び跳ね、ドアから這うように離れ、その場にうつ伏す。息を殺し、その場でジッとして悪夢が終わるのを堪えた。

すると、『ガシャーン』とけたたましい破壊的な音がして、男の怒声が一喝。

「コラーっ！ どこじゃ、ボケ！ ここか！」誰に罵声を吐いているのか？ 間違はなくこの俺にだ。

「隠れとんのか！」

『ガシャーン！ ガシャーン』割れんばかりの衝撃的な破壊音。

廊下のそこら辺りを蹴飛ばしているようだ。蹴りが入るブチかまされたドアが揺れる。その勢いで非常灯の明かりもチラつく。

廊下を行ったり来たりする足音と何かを叩きつける騒音が続いた。それから、数分、いや数十分。廊下が静かになったと分かる。

「ふぉー」額にジトーっと汗が滲む。

嵐が過ぎ、何事もなかったかのようにシーンとしている廊下から事務所、壁掛けの時計が午前零時の時を刻んだ。

膝についてその場で胡坐を掻いた。大きく溜息を漏らし、項垂れ疲れた。

少しチビッた。

もう煙草やめよう、と思った。いや、あそこが唯一憩いの場。しかし、あれごときで一目散に逃げる自分の不甲斐無さに嫌気がさした。そもそも唾を落す自分に問題があるのだが、それでガキに追われるなんて誰にも話せる訳無い。ダサくてみつともなくて……。

退社したのが午前一時半頃だった。

辺りに怯えながら鍵を落とし、周りの様子をみる余裕なんてなかった。あのガキがどこかに潜んでないか？　それだけでエレベーターのボタンを押して開きかけたドアに滑り込んだ。事務所のある建物は表口がすでに閉まっており、止むを得ず通用口をサッと確認して逃げるように裏口から表へと飛び出る。通りへと一目散に駆け抜けるが、後ろを何度も振り返り、人気を気にしてタクシーを拾った。それでも、アパートのドアの鍵を落とす時まで、ゼエゼエと息を切らし、ビクついていた。玄関先のその場にへたり込むと肩の力が一気に抜ける。

とんでもない一日。ドン臭い、ダサダサの一日――。

3.

「えー、わが社のビジネスは男女の恋を結婚という素晴らしい形にするビジネスだ。特化して他の支部とは違い……」

毎朝のいつもの光景。今朝はどうやら山根課長が息巻いているかなお朝礼が長い。手首を返し、腕時計をチラッと見る。すでに九時を少し廻っていた。

ここでは課長が支店長も務める。月末本社で行われる当月の数値目標、最終着地の詰め、本社の営業報告会でこつてりと絞られる。成績がよければ、翌月は毎日の朝礼が短い、営業成績が少しでも落ちるとダラダラと長い。

俺のいる支部は例年数値目標をクリアしている。課長の顔が幅をきかせている、とカウンセラーの遠藤ばあさんからの話。どうやら山根課長が伝説の課長と呼ばれる由来があるらしい。いったいどうやってこの数字をたたき出しているのか、今ひとつ分からないようだ。やはり裏があるに違いない。きっと何か繋がりが？ そんな与太話を誰が信じる。

とは言うものの、課長の話は概ね脱線する。要点が出鱈目でとても伝説と言う人物には当てはまりそうに無い。それに何とも始末が悪い。岩見の言う疑いは絶対にあり得ない。

課長と向き合って横一列に並ぶ職員は俺を含める四名。専門カウンセリング、女性二名、四つ年下の少し生意気な経理担当の奈津美、そしてプランニングや企画営業の駿平である。

カウンセラーは、先月五十歳になった現役の主婦、遣り手婆の遠藤と独身三十八歳の藤沢。

遠藤はどこにでもいる中年ばあさんで特に駿平には影響を及ぼさない。いつも気にかけてくれるので有り難く感謝している。ただ一つ

言えば、服装や身に着ける装飾品がケバケバしい。見栄えがとても派手の一言に尽きる。その遠藤の姿は新宿界隈のオカマバーのママと言っても通用する。前職時代から自ずと他人の事に首を突っ込む事、三度のメシより好きであった。今の職業が天職である事には間違いない。両名の普段の業務は主に会員の登録後からの面接による身上相談。相手の希望を聞きだして理想とする。いや現実的理想とする相手を登録会員の中から紹介していく。男女の仲を取り持つ仲介業。ほんと世話焼き好きな人には持って来いの仕事だ。けれどどうしてもあの女、藤沢には首を傾げる。

藤原という女は全く持って遣りにくい存在だ。この仕事向いていないと思うくらい愛想がない。そう、細く横に伸びる眉と薄く引いた口紅くらいの化粧に対面した時、レンズの奥底深くから威圧感で押ししてくる細い目が冷酷な人物。で、いつもムスツとした顔でとても人相手の仕事とはほど遠いものである。人の世話が微塵も感じられない。いつも尻拭いするのは駿平自身だと思う。

一番の印象は黒縁眼鏡が不思議と似合う女だということ。そもそも黒縁眼鏡をかけているだけで何と無く斜に構えているように見える。細身の体に纏う服装は遠藤ばあさんとはまるで反対の地味なモノトーンの黒を基調とするパンツスーツでその身なりが更に後押しをする。時折、乱れる長い黒髪は、女性の色気を醸し出すどころか昔の怪談に出てくる怨念の鬼畜女といったもいいくらい。いや、すこし言い過ぎか……。いや、そのくらいは言いたい。

両名の女性、ともに以前は大手保険の外交員をやっていた。遠藤ばあさんは藤沢の同僚であり、元上司でもある。遠藤ばあさんは大の世話好きの力量を買われ、今の会社に引き抜かれた。遠藤ばあさんの紹介もあり藤沢も引き抜かれる。まあ、その引き抜きに一役買ったのが山根課長だ。

俺は主に外回り営業と新規会員の受付け応対、企画、お見合いパーティーの受付けと進行役。時として業界関連のオプザーバーとして課長と共に行動する。

この手のビジネスは女性が良いとされているが、忙しい時はそうは言ってられない。時として男手が必要となる。カウンセリング役として応対する事も多い。その補助要員として俺みたいな営業がいる。「……よって、環境問題もクリアしなきゃならん。そこでエコとは……」

「あのー、課長」奈津美が口を挟む。

「ん？」

「そろそろ……」と奈津美が壁時計を指差す。他の職員も揃ってチラッと見上げる。だが、藤沢だけは黙って課長の話を訊いている。

もう一人、癪に障る女がいる。奈津美。御厨奈津美。

この女は生意気なことこの上ない。俺より半年前にこの会社に入社した少し先輩だ。課長と同じくらいの役職気取りで幅を利かせている。

だが、仕事はきっちりとこなす。その辺りがこの女の信用を築きあげている。悪い女じゃないがまあ、とにかく生意気な奴。

「おお、そうか、すまん。では、今月もお願いしますよ。みなさん。ジャンジャン決めちゃってよ。なんだもうこんな時間か——」山根課長が手を揉みながら口惜しそうに言う。まだ話し足り無いような口調だ。

解散してもう一度腕時計を見る。すでに九時三十五分を回っている。今日は長くなりそうだったな。奈津美が止めなきゃ、一時間くらいは平気で話す。いつもは三十分くらい一人で話している。課長の横に逸れる無駄話が多い毎日の朝礼だ。

駿平は自分の席に戻ると気持ちを引き締める。ロートレック調のフレームで、大枚を叩いて買ったばかりの眼鏡をかけ直す。さて——、昨日の続きだ。

課長に数字目標について相談する前に出来る限りの資料は纏めておきたい。今日中にはなんとか仕上げないと不味い。昨夜危うくともんでもない事になりそうになり、キャンペーン企画の資料が途中で放り出したままだ。今朝、事務所の入口に横にある傘立てが倒れ、

散らかっていた。おまけにドアに貼ってあるポスターまでも破れ、紙片が散らかっているのは昨夜のガキの仕業だ。

今朝、出社したとき、中腰になりながら、片付けをしていた奈津美と目が合った。訝しそうな顔して俺を一瞥、いや睨んだ。あんな何かしたんと違うのか？　と言わんばかりに。身が引けたがそ知らぬ顔した。

かぶりを振って今朝の奈津美の突き刺さる視線を頭から払いのける。パソコンの電源を入れ、営業鞆から会議資料を探し、昨夜の続きにとりかかろうとした。

目の前のビジネスホンがチカチカと点滅、視界に入る。すると遅れて呼び出し音が鳴る。少し旧型のビジネスホンは着信表示ランプと鳴動がズレている。そろそろ買い換えて欲しいところだが。

鳴り響く。何度も何度も呼び出し音が鳴る――。

おい、誰もいないのか？　体を振じりながら周りを見る。ん？

課長が奈津美からお茶を受け取るのが見えた。それ以外、他には誰もいないようだ。頭の後ろを掻き面倒だと思った。この二人に期待しても、と舌打ちして手を伸ばす。

資料に目を落とし、パラパラと頁を捲りながら受話器に手を伸ばし、耳に当てて応える。「はい、ハッピーパートナー、野呂です」抑揚のない素っ気ない、でも愛想よい声で応える。

――もしもし、山根君いる？

山根君？　誰だこいつ？　馴れ馴れしい口ぶり。――瞬間、考えたが思い浮かばなかった。

「あの、どちらさまですか？」

「富山だが」

富山？　何処の『富山』だ。偉そうに――、山根？　あ！

「あ、はい。し、暫くお待ち下さい」駿平の引き攣った口が縫れた。富山常務の声だ。瞬時に受話器を塞ぎ、保留ボタンを押す。

「課長！　山根課長ー！　電話です。本社の富山常務からです」身を振り、振り返えろうとした背後に居た山根課長に驚いた。

「わーッ！ ビックリした。」思わず受話器を投げてしまった。駿平は両手を万歳している。

課長が『ニッ』と歯茎をむき出し驚きもせずこちらを見下ろしている。このおっさん、いつもの間に――。

「課長！ ビックリするじゃないですか」声が引っくり返ったまま駿平は狼狽する。

「いや、ね……。おまえとシケモクしようかと思ってさ」課長は人差し、中指と親指をスリスリと擦りながら言う。

「あ、そうですか」駿平は素っ気なく返す。

「しかし、イカンなー。そんな電話対応じゃ」

「はあ……」ゲンナリする。

「駿平の電話対応。不味いな、それじゃイカン！」

はいはい、どうぞ続けて下さい。駿平は無視して受話器を拾う。

「いいか！ 僕を真似て。『はい、あなたの愛のパートナーを探します。ハッピー♪ ハッピー♪ ハッピーパートナーの野呂です』って言わなきゃ」目を瞑ると別人が話しているようだ。目を開ける。オエー。はつきり言ってキモイ。しかし、この顔の何処からこんな声が出せるのか？ 世の中の七不思議だ。

どうしても慣れない。いや、慣れたくないのが本音だ。この受け応え、アホ丸出しだ。くだらない社員研修を受けて、それをまともに言う奴がいるか。

「さ、復唱して！」駿平を全く無視して言う。

「はあ……、」

課長は両手を揉みながら「はい、あなたの愛のパートナー……。ハッピー♪ ハッピー♪ ハッピーパートナーの野呂です」すかさず、俺の顔を覗き込む。

「いいかね。『ハッピー♪ ハッピー♪』ここところがポイントだからね。明るく」チツチツチと人差し指を揺らす課長。

朝っぱらから、アホっぽく言えるか。俺をジッと見たままの課長と視線を逸らす。

「エヘン……」咳払いをひとつする。駿平の顔はあからさまに嫌そうである。

もうひとつ溜息をついて「あ、——はい、あなたの愛のパートナー——。ハッピー♪ ハッピー♪ ハッピーパートナーです」

駿平が言い終わるとすぐに課長が首を横に振り指摘する「あ！ダメダメ。自分の名前が抜けているじゃないか。誰が受けたかわからないじゃない。困っちゃうな」今度は人差し指を自分の唇に持つていく。

気色悪る！ あんたはオカマか！ その素振り誤解されるよ。

あっ！ とする駿平「——あの、課長、ところで電話ですが……」握っていた受話器を突き出すと、課長は何が？ 惚けた顔。

「富山常務ですが」

——すると少し間が空き、はっ！ と息を吞む。急に課長が真顔になる。

「ダメじゃないか！ 早く言ってくれなきゃ困るよ！」駿平の握る受話器を奪い取りにかかる。

「はあ、そんな……」今そう言って課長に真っ先に伝えたじゃないか。

何処でどうして困るのだ。まったく——。

「あ、はい……、滅相もない……、………はっはっは、またまた常務………」駿平の机の横で畏まってひたすら話す課長。何時も直立不動の姿勢で話す。

駿平は無視してパソコンに向う。まったく、自分の席で話せばいいのに……。

「こちらの女性はどうでしょうか？ うん。絶対にお似合いだと思います」そうかな、本当にそうだろうか？ 似合っているのか？ 心にも無いことを俺は言っているようだが。

折角、お似合いだと思える女性を推薦しているのにも拘らず。これで三人目だというのにまるで何で登録したのかわからない。

「先日、河崎さんのお写真を先方の女性もご覧になって頂いております。先方の方、河崎さんの印象が宜しく、お会いしたいというっております」無反応だった女性の顔が頭を過ぎる。あの時、無理強いて女性に拝みこんだ。写真をみるが河崎さんの印象は無反応。でも、恐らく、似合っていると思う……。

「河崎さんの理想に近い女性だと思われます。理想！ 現実の女性が貴方をお待ちしております」駿平の押しの営業声。つい、成績達成の為に声に力が入る。口調とは違う内心、不遜な下心で相手の腹を探る。

——……………。

黙っている様子が受話器を通して伝わる。相手も躊躇する反応が遅い、どうしよう。不味いなこのままだと……、懸命に会員男性に謙って薦める。「どうでしょう、来週にでもセッティングなど……、如何ですか？ 無理にとは申し上げませんが……。でも、絶対に！」考える間を与えては駄目だ。食い下がるが、強引すぎても相手が引く。押して引いての会話だ。

このままでは埒があかない。「まずはお会いになってみては？」少しほど背中を軽くトン、と押す。ここまで話してもう一度様子を見る。

——そうですか？ 本当にそうですかね？

「勿論です！」自身漲る言葉で語気を強める。

——でも、いや……、やっぱり……。

「自信持って下さい、秋山さん。あなたの人生、ここで道開けるのですよ。チャンスですよ。ここが決め所ですよ」

駿平も本心少し迷うが、ここぞとばかり口先が勝手に動く。

——それは……、そうなんですが。

内心、舌打ちした。じれったい男だな。

「いえ、先方の女性、別の方とお会いになるつもりはないと仰っていました」

紹介する女性は他に三人ほど写真を見比べ、全員に会ってみたい

と言っていた。

「今を逃すと、恐らく……」

——恐らく？ 何か？

「いえ、何でもありません」もったいぶって、わざと濁す。

——ま、待って下さい！ でも……。

「じゃ、決まりですね」ここで一気に畳み込む。

——ええ、じゃ、お願いします。

「そうですね。先ずはお会いしてみるだけでも。では、後ほど日時と場所のご連絡を差し上げます」やつとだ。

——あ、……はい。

「河崎さんのご連絡の時間帯、お昼休み時間が良いと伺っていますので、その頃メール差し上げます」やつと力が抜ける声で言う駿平。

——お願いします。

「こちらこそ。では、宜しくお願いいたします。後ほど」

相手は気圧されている。駿平は右手の拳を握る。

受話器を置く駿平、全身にドツと疲れが押し寄せる。上手く行きそうであるがメチャクチャ神経を使う。これで、良いのか？ こんなやり方で本当にいいのか？ キツカケが大切だ。男と女共々の背中を少し押せば後は流れに任せる。それでも、つい考えてしまう。陰々滅々と煮えきれない。やはりこの仕事向いてないのかな——。

三ヶ月前、会員登録して頂いた男性。河崎さんへの紹介のアプローチを終える。そもそもこの男性の職業は派遣会社で営業の仕事をしているはず。ならば人の世話を焼くことが得意な筈なのだと思うが、こと女性ともなると妙に奥手になる。というより臆病そのものだ。けれど相手が相手で、仕事ならこうは無いのだろうか。けれど大抵はこう言った手の会員が多いのも否めない。この結婚に絡む業界はこれが普通なのだ。

ふと過る。

不味い、湧き上がるように思い出したキャンペーン企画、まだ仕上っていない。鞆を開きガサゴソと探す。机の端に放ってある資料

を掻き集め、パソコンに再び向う。

「しゅんぺー」背後から嫌な声が聞こえる。

無視していたがとても馴れ馴れしくすり寄る課長の気配に攻防出来ず首を捻る。どちらが年上なのか、上司部下の関係なのかわからない。常務とのやり取りで苦みばしった顔をして額の汗をシワシワのハンカチで拭っていたはずなのに、もうこれかよ。やはり、伝説は伝説なのかもな。この課長に伝説は有り得ない。指二本突き立て、口の前でゆらゆらさせる。

一瞥して無視してやった。それでも、態度は変わらず、馴れ馴れしい。

「なあ、モク」

「はあ？」

「『はあ？』じゃないだろ。モクだよモク」人差し指と中指を突き立て、スパスパと煙草を吸う真似をする。まるでその辺にいるオヤジだが、妙にその姿がリアリティだ。臭い芝居をするダサ役者にも負けないくらいの演技だ。どうも調子が狂う。分かっているが惚ける。俺のところにくいて背中を軽く一発叩くと肩に腕を回してくる。指をカサカサと擦り、貰い煙草を要求してくる。毎度、このオヤジいったいどんな神経しているのだ。人の見ていないすきに、こっそり煙草も掠める。

それでも溜息を着き、不本意ながらもそんな課長に引き摺られるよう後ろに続く廊下から非常口の階段踊り場へと向う。またいつものお決まりの場所だ。不思議とどこか逆らえずでいる。しかし、早いところキャンペーンの仕上げしないとヤバイ、勘弁してくれよ。

鉛色の雲が立ち込めたどんよりした憂鬱な空だ。今にもポツポツと降りそうだ。

今日も朝から目覚めが悪かった。昨夜、あんな事があってアパートに戻った時間が遅かった。企画書に目を通していたが疲れ果てていた。どうしても空腹を抑えきれずカップラーメンを啜ったのがい

けなかった。胃がもたれて、吐き気がする。

ふと横に目をやると怪訝な顔ひとつもせず薄ら笑いする課長。

「なにか？」駿平は惚けて聞く。

「いやー、なんでもない。それより、モク」

「え！　またですか！」呆れる。たいそう驚きもしないが、駿平のリアクションはわざとらしくオーバーアクションだ。

――がしかし、一向に効果なし。おいおい、いい加減に貰い煙草は止してくれよな。ゲンナリしてしまう。大体立場が違うだろ。それも年上で上司とくれば、『吸うか？』とひと言くらい言っただけのものだ。このおっさんよ――。

面倒くさく首筋を指で掻きながら、煙草を差し出す。そして、揺すると一本の煙草が飛び出る。すかさず箱を強く握りそれ以上の煙草を引き抜かれないように閉める。

「お、今日もモクが上手い。♪モクらはみんな生きている♪　なんてね」課長の薄笑いする唇。歯茎がむき出しになる。この闊達で拳措などうしようもないおっさんだ。

「ん？」

一本の煙草をどころか二本も抜き取ろうとする。瞬間に指先に力を籠める。

「ん、ん」駿平が煙草を取られまいと攻防するが、それ以上に負けまいと課長の指も攻める。

二人、目が合う。

駿平の阻止する指の圧力がハードパッケージ箱を徐々に変形していく。煙草の箱が潰れそうになる。課長は力を緩め、仕方なく諦めると後ろ頭を掻きながら、懷からライターを取り出し、火を点ける。煙草の煙が目沁みる。俺を一瞥した。

「いやー、美味しいな。実に美味しい」

そりゃ、貰い煙草はそうだろう。

「なんだ？」惚けた顔をする課長。

「あ、いや何でもありません」

課長は常に煙に巻かれていないと生き延びることが出来ない男である。鰹や青魚が昼夜寝ずに泳ぎまくると同じかもしれない。それにしてもライターを口頃から持ち歩いているなら、煙草を買えよな。毎朝貰い煙草は勘弁してくれ、俺みたいな平社員に。

チンケな事をする器の小さいショボいおっさんだ。だが、好かれている。どういうわけだか好かれている。女性が多いこの業界、にも拘らず不思議と慕っている職員や本社の人間までもが。

早いとこキャンペーン企画の資料を纏めて仕上げたいところだが課長と二人、ここで屯するかのように煙を燻らせる。この憩いの場所で二人屯する事が多い。この時ばかりは男二人で虚しく空を見上げる。さっきまでの状況とはまるで違う男の世界だ。

時折、藤沢が避けるようにここで喫煙するのをみたことがあるが、決して一緒に吸おうとすることは無い。

踊り場にこっそりと置いてある灰皿の前で煙草を吹かす。酷く汚れた空缶は課長の実家からの仕送りで送ってきた紀州みかんの缶詰。ここに配属された翌日から駿平に馴れ馴れしい口調で話しかけてくれ、非常に親しみを感じたが大きな間違いだと気付かされたのは一週間もしなかった。

山根課長、独身。たしか四十七か八歳だったと思う。いつも課長の頂上辺りに目が行ってしまう。どうしても目が離せないのである。煙草は髪に悪いとある鬘メーカーの調査に出ていたように気がしたが、課長の頭は手遅れだと思う。それはすでに諦めているようだ。首から耳、モミアゲ辺りとチラホラ混じる白髪。そこからなだらかな丘陵地帯は、もう不毛の地帯と化している。絶対に。その丘陵には、とってつけたような鳥の巣みたいな鬘が居心地悪そうに乗っかっている。いつかこの手で鷲掴みしてみたい。偶にそんな願望に駆られる。

高校時代、担任の教諭に同じ衝動にかられた事があった。まさにそれだった。黒板に向う後姿に悪意はないのだが、クラスの奴らには興味そのものだった。どうしても不自然な頭部に釘付けになり、

俺は、いや全員はいつもモヤモヤしていたに違いない。かき消そうとするが、授業中も手が付かない。クラスの奴らは分かっているのだが、なかなか証明する者がいない。

クラスのやつらにも何度となくチャンスがあるものの、それでも担任教諭の頭に手を伸ばす勇気のある奴はなかなか現れなかった。なお更じれたい。まさか、本気で行動するなんて到底考えられない。あの額の生え具合と髪と髪との不自然な境目。けれどそのモヤモヤは払拭できないまままで青臭い青春は終わった。別段、恐ろしい訳ではなかったが、ただなんとなく。それを解き明かしても何も残らない焦燥感にも似た気持ちに徐々になっていった。

青臭い思い、徐々に薄れていったとはいえ、あの時の気持ちが課長の頭を見遣る度に湧き立つ。成し得なかった思い、とまではいかないが、いつかその証明を、と。

それなのに、何時だったか課長と並んで煙草を吹かしている時、後ろから近寄った奈津美が言った「駿平と課長って親子みたい。まるでそっくり」と指差して言った台詞にメチャメチャ、ムカついた。

背丈くらいは、と思うが奈津美を睨み返してやった。

「だって後ろ姿が似てる」全然悪気がない奈津美は二人を交互に指差して笑う。課長もまた同じく、まったく動じず同士哀れみと横目でヘラヘラと笑う。

おいおい、こんなふた周りも歳の離れたオヤジと一緒にしてくれるなよ。事もあるうか、この禿げオヤジと。

ふと空を見上げ想像してみる。親父の頭と横にいる課長の頭を重ねてみる。苦々しいがあえて集中して頭を重ねて想像する。

親父は中学校で国語の教員をしている。考えてみれば生徒からどう思われているのだろうか。恐らく、自分の親父も課長と同じなのかも知れない。ショボイオヤジだと思われるのだろうか。人の事などいえない。だから、独身のままのほうがよいと思う……。

「ん、ふむ」思い浮かばない。

最近、父親と会っていない。だからだ、思い浮かばない。けれど

奈津美の言うとおりの課長と父親は似ているのだろう。だからそんな言葉が躊躇いもなく言えるのだろう。

親父も今年確か、五十歳になったばかりだったはず。課長と同世代だ。今は独り身で過ごしている。俺が高校一年の夏、離婚した。母と二人の間に何があったか、どうかは分からないが、恐らく母の浮気だと思う。親父に同情をしたが、以外にも親父本人は全然堪えておらず、他人事のように思っている。

二十七歳と、まだまだそんな自分を追い立てる必要はないが結婚が良いものかどうか、両親のことを思い、折に触れると考えてしまう。だから独身を通すのだ。面倒なことを今は考えたくない。

先月、五年付き合っていた二つ年下の彼女、アヤと別れたばかりだ。と言うより、行方不明のまま。なお更始末が悪いのかも。人には、上手い言葉を使い、偉そうな事を言っただけ。男と女の間柄を悟りきった言い方をする女でざまあない。しかし、『人生とは出会いがあれば』と続くアヤの言葉があるのも事実だ。

アヤという名前、おれのタイプお淑やかで本名は綾乃。財前綾乃とどこかのお嬢様ふうに見えるのいい名前だ。ところがまったく、まったくもってまるっきりの正反対だ。パンクのイカレバンドでメインボーカルを担当していた気性の荒い女だった。大学の連中は、おれ達の事を囁く者が「いつ見てもおまえら、やっぱ、全然不釣り合いだな」全くだ。言われなくても自分でもそう思っていた。

彼女と出会ったのは、大学四年のコンパだ。入学したときから軽音楽サークルの篠田が手を揉みながらにじり寄る。何のことはない、合コンで頭数合わせに俺を誘っただけの事だ。パツとしない軽音楽サークルの連中五名と同数の女、のはず。都内の介護系の専門学校二年生の四名。

アヤは、トンデモナイ女。合コンにくるようなタマじゃない。コンパが始まり一時間ほど遅れてやってきた。来るなり俺の横を陣取った。座るなり何も言わず、黙ってガン飛ばしてきた。その勢いに気圧され俺は目を伏せる。アヤは下から視線を持上げながら俺を見

続ける。酒臭い。すでにこの女、出来上がっているのか。遅れてや
つてきてにも係らず、すでにだいぶ酔っている。

膝まで紐で編み上げたヒールの高いブーツ、ピッタリとした革の
スーツ、両手首の革ベルト、首周り銀色のクサリがとぐろを巻いて
いる。色白だが、とんでもないアイライン。目の周りパンダのよう
な黒塗り。頬のチークは紫とオレンジで燃えあがる。ポテつとした
唇に黒色の口紅をヌラヌラとしている。右瞼の上にピアス二個、左
耳たぶに三個。極め付けが舌に一本の銀。髪は言葉で言えないほど
バサバサで鶏冠みたいだ。とにかくとんでもなくヒドイ。これがフ
アッションか？ 小学生低学年に厚化粧の女性を描かせたら、おそ
らくこんな女お化けになるだろう。アヤ、いやこの女、専門学校の
生徒か？ ありえない！ 絶対にありえない！

アヤは、運ばれた生ビールを一気胃袋に流し込むと事もあるうか
すぐにゲップを吐く。

俺をジロツと睨みポケットに紙切れを捻じ込む。そして右手でパ
ーをする。何んだ？ と思い顔を近づけるといきなりヘッドロック
された。

” 払いないよ！ 五枚だからね ”

” ふがふが ” アヤはグイグイ俺の頭を締め付ける。

” あたいのコンサートを見に来なきゃ、許さねーからな。きーてん
か？ このタコ！ なあ、みんな！！ ”

” おおー ” どこかで怒号する威勢ある声、空気を割るように店に響
く。

” ふがー、ふぐむぐ ” 俺が暴れるとアヤは、酔いのせいかなよろける。
その瞬間スポツと頭が外れる。首をコキコキしているとアヤは俺に
抱きついてくる。払いのけると今度は泣きながら俺の胸にしがみ付
く。

駿平が深く溜息をつく。勘弁しろよな。首を左右に捻りながら右
手で首を揉み解す。ほとほと疲れる。ポケットから捻じ込まれた紙
切れを取り出し、『モダンキッド！ 爆発ライブ』？ と印刷され

た五千円のチケットを見ていると殴られた。

”来いよ！”又、後ろ頭を叩く。今さっきまで泣きじゃくっていたはずだが全くケロリだ。

”分かった、分かった”痛てー、このヤロー、女だからと言って許さんぞ。

”分かった。だから、な。コンサート行くから”この酔っ払いが！こんな事だったら合コンなんて、もう絶対に参加するもんか！

と篠田を睨みつけようと探すと篠田の唇が赤い。目を擦ってもう一度篠田を見る。

篠田の唇や頬に口紅が塗られ、横の女に小突かれている。周りを見ると他の連中も様子が変だ。煙草を啜えた女ヘライターを差し向けるやつ。ヘコヘコして女にお酌するやつ。女の腕が首を廻り硬直しているやつ。遠くをぼんやりみているやつ。サークル連中の胸ポケットやジャンパーの懷にチケットが見える。おかしい――。

どうやら、介護系の専門学校生なんて嘘っぱちでここにいる女全員、同じバンドのメンバー？ まさかアヤと同じイカれバンド『モダンキッド』のメンバーか？ それで俺がヘッドロックされた時に聞こえた威勢のいい声がこいつらだったのか。

最初は大人しい顔していた女達だが、アヤが来て酒が回ったところで状況が一変したのだ。チケットを買わされる為に仕組まれた。合コンという嘘だったことにここに居る全員が気付いた。但し、篠田を除いて――。

アヤがこの店に着てからその場が修羅場と化した。飲んで飲まされて酔いに酔っていた。恐らく周りから見れば変な男と女の集団だと思われるに違いない。客の視線がさっきから気に掛かるがもうどうしようもなく手遅れだ。

気がつくとも居酒屋の次のカラオケに居た。

途中から記憶がない。

ゴツゴツとマイクで俺の頭を小突き、疑いたくなる怒号の掛け声

をバックに悪魔とも思える唸り声でサザエさんを歌うアヤ。掛け声をかける女も居酒屋に居た時とはまるで形相が違う。間が合うと焼酎を突き出し、無理やり飲まされそのまま自分が何処にいるのか意識がなくなった。

目が覚める。

思わず起き上がる。いったい何処にいるのかすぐには分からなかった。目を擦り、頭を振る。「イッツツツ……」重く鈍痛が脳天を走る。両手で頭を抱える。俯いて辺りを見回す。――おれのアパートか。ふー、短く溜息をつく。

ふと横から鼾が聞こえる。目を移すと同じベッドの中にアヤがいた。

なんで？ なぜ、こいつがここに？

それから、アヤがそのまま居座る。

なんで自分の家に戻らないか？ と聞いたとき。その時点で、浮浪者一歩手前状態だった。家出状態にあるアヤは友達のアパートや下宿先を転々として、転がり込んで追いつかれないといった具合の生活を繰り返していた。なんで？ と思ったがアヤは稼いだお金を全てバンドの運転資金に回して、いつも金がない。とにかく、女も嫌がるくらいだから行く場所がない。寝泊りできるのなら、男の部屋でもへったくれもない。

意外だったことの一つに料理が取り柄だった事だろう。俺の居ない間に勝手に冷蔵庫を開け、中にあった余りもの材料と米を焚いて手料理を作った時、こいつ真剣、料理得意じゃん。特に味噌汁なんて半端なく上手かった。

「うめー」

おお、涙が浮かぶくらいに旨かった。母親に負けないくらいの手際の良さもあるが、それ以上に料理が上手だと感動した。

「馬っ鹿じゃない。味噌汁くらいで涙する奴、今時いない」俺の横で煙草を吹かすアヤがさり気なくひと言。

何処でこんなの習ったのか？ 問い詰めたが惚けてはぐらかし

た。

それから同居、同棲？ どちらともつかない共同生活が始まった。二年くらい経ったある日。バイト先から帰ってきたときにチラシの裏に書きおきを残し、『大阪へ行く』とだけ、アヤが突然居なくなった。その後一度だけ、大阪の『ブラックヘル』というライブハウス、時々前座している。あれから連絡の一つも寄こさない。それきり、そのまま。

とんでもなかったが寂しい、アヤ――。

人には愛だとか、恋だとか、偉そうなことを言う商売に少し嫌気もさしている。俺は女不振になっている気がする。アヤや親父のことを考えるとなおさらだ。

突然、埃っぽい物が顔にかかる。横をみると課長の煙草の灰が飛んできた。

「ブッ！ ブッ。ペッペッ」

「悪い、すまん」課長がニツと笑う。一気に現実に戻された。吸いさしをみかん灰皿に捻じ込む。おもむろに裏口を見下ろす。

裏口の長椅子辺りにゴミや缶ビールが転がっている。よく見ると女の下着のようなものも見える。昨夜を思い出すと何故か背中からぶるった。あいつらここで何してたのだ。今時の高校生はいったいどんな事を――。朝から考えただけでつい悪寒が走る。

首を振り、ゆっくりと持上げる。

青空に薄く覗いている。東の空に浮かぶ雲が流されて行く。どうやら、一日雨に降られず何とか凌げそうだ。

「さて……」と課長が腰に手を当て背中を逸らす。「ててて、てっ」背筋が伸びるというより丸まった猫背のまま、膝だけがくの字に折れる。肩で溜息を落すとコキコキと首を鳴らし、課長がゆたゆたと事務所に向うその猫背の背中を見送る。

腕時計を見るとすでに十一時を回ろうとしている。慌てて転がるように事務所に戻る。

第二話（応援） 1（前書き）

支店の営業業務は今日も始まる。朝からダラダラと長引く課長の朝礼。

暗い雰囲気で事務所にきた男の目には黒々した痣が……。担当は藤原なのに駿平に縋る男から事情を洩々聞く。

その頃、玲子は反省する中、男への腹立たしさだけでなく、もう退会して白紙にしたい気分だが後悔もしそうで悩んでいる。

一応、表面上と呼べる友人と結婚相談所へ出向いた時、そこで紹介された男に玲子は惹かれていった。しかし、その男は気が弱く会う度どうもしつくりと合わない一面がある。本当にこの男とだろうか、男へ対する疑念、勘違いの連続。とうとう挙句の果て、男の顔面にパンチを一発食らわす。酒癖が災いした一抹。アルツハイマーの母を抱え、母と自分の幸せを望んでもいた。

男の事情を訊き、誤解を解く為に駿平は課長と連携して解決する為に奮闘する。

その結末、誤解も解け、二人は一緒になれそうだとの連絡に駿平の努力だと思いきや藤原の方が一枚上手だった。美味しい所を持って行かれた。

第二話（応援） 1

1.

誰よ、この娘？ どこかで見かけた？

少し酔いが回っていたが、女性に絡むこの程度のことではまだまだへっちゃらだ。

その女はするすると隣の男にすり寄る。決して酔いのせいではない。思わず目を疑う。目を擦ってみる。

よく見るとこの男、私の目の前で他の女と手を握る。そう言えば、この前の時もそうだった。あの時の情景が再び甦る。ふつふつと沸き立つあの怒り。

もしかして酔いが回っているのかしら。そんな、このくらいで酔うものか。

頭の奥の方が痺れてきた。

思わず叫ぶ。「何なのよ！ 又？」

どれほどか感覚が無いまま叫んだ。

クラッときた。それから……、慌てふためく自分の右手に何か当たった？

薄れ行くなか、男が両手で顔を……、倒れるたのか？

薄暗い景色が広がり、それから……。

続きのキャンペーン企画資料を纏めあげる為、事務所に戻ってきた。

椅子をひくとパソコンのモニターに貼ってある付箋に目がいく。

『会員の河崎さんから電話あり。折り返し携帯に電話すること。』

奈津』なんだよ、上目線でメッセージまで上司口調か。

は、まさか、河崎さん気が変わったのじゃないだろうな。少し考えた。――やはり後回しにしよう。そのほうがいい、気変わりも時

間が経てば、もしかすると元に戻れば、などお願いながら。

付箋を剥がし机に置く。

気になりながらもモニターに向かう。今朝から練り直した企画の考案、その内容を、キーボードをカタカタと叩き入力する。手を止め一息ついてモニターを食い入るように確認する。キャンペーンには支部の状況に合わせた行動にスケールダウンした内容を作成しなければならぬ。さっさと仕上げないと間に合いそうに無い。

集中してひたすら入力していると机のビジネスホンのLEDライトが点滅を始める。チラッと目をやる。遅れて呼び出しが鳴り響く。思わず躊躇した。左右を見渡すが、相変わらず誰も電話を取る気配なし。

軽く溜息をついて手を伸ばす。

「はい、あなたの愛のキューピット。ハッピー♪ ハッピー♪ ハッピー♪ パートナーの野呂です」営業の声で応える。やっぱりキモいくだらなく、馬鹿げている。

——はあ。

「はい？ もしもし？」誰だ？ いったい。

——はあ。

「あの……」

——はあ、もしもし、……いますか？

耳に聞えるドロツとした粘っこい声。どこか聞き覚えある声。

「え？ はい、誰ですか？」

——えーと、藤沢……、さん、お願いします……。

「ええ、はい。どちら様でしょうか？」

——だった、よね……。

何だ何だ、俺の話聞いてないのか。かみ合わないな。だから居るって言っているじゃないか。

「あの、藤沢ですね。カウンセラーの？」

——あ、よかった……。

それから暫く黙り込んでいる。この話しぶり、やはりあの男性か。

「もしもし、あの、秋山さん。ですか……？」

——あ、はあ。

こちらこそ重い、憂鬱だ。今日は嫌な人に捕まったな。この男、いつも溜息から始まる。当相談所に会員登録してすでに一年が経過した。まあ、当然それでも良いのだ。たしか、先月更新したばかりのはずだ。うちの継続の会員は全体のおよそ七割を超えている。これは決して喜ばしいものではない。成婚率が低いともいえる。新規会員登録数を掲げると同時に継続率を五割程度までもっていききたい。

——あのー、実は……。

「ちよっと待ってください。今、藤沢と変りますからね」

——実は……。

「いえ、だから……」

——えー、……。

えー、もう、なんでフェーズアウトしていくのだ。今、変わるって言っているじゃないか。

「どうされました？」やむを得ず駿平は聞く。

——……。

「秋山さん。なにかあったのですか？　ちよっと待って下さい」焦って保留ボタンを押し、振り返るとあの女の居る席へ手を振って呼びかける。しかし、彼女の姿が見当たらない。辺りをキョロキョロ見廻すが何処にも姿が見えない。舌打ちをして溜息をついた。

仕方ない。やはり概ねの話を聴いておこう。もう一度保留ボタンを押す。

「申し訳ありません。藤沢がただ今、席……」言いかけたところで話を折られた。

——このことは、電話では……、やっぱり……。はあ、じゃ……。
おいおい、電話きるなよ。

「秋山さん！」受話器に向かって叫ぶ。

——……。返事がない。なら、電話で話そうとするなよな。
それに今、居ないといっている矢先に。——いや、受話器に吹きか

ける息遣いが分かった。

「あの、良かったら藤沢から連絡差し上げましょうか？」電話を切る様子がないので尋ねる。

——……はあ。

なんとも歯切れが悪い、イライラする。まったくもう。

そういえば、あの女が先月、秋山さんの希望に近い女性を紹介した。当然、相手方の女性も会員登録して一ヶ月ほどになる。恐らく、この手の女性は直ぐに相手を見つけ、お見合いをセッティングできる。これは効率よく成婚まで持っていけると横目で見ていた。

案の定その翌日、秋山さんが訪れ、女性に一目ぼれとなる。こんな事を言える訳じゃないが、出来ればもっと他の会員と、と思うものの秋山さんはその女性を指名してきた。よって権利を一番に得た。そのため、彼女にこの事を伝えると割りと快く見合いを受け入れたようだ。それで直ぐ、いつものホテル「エクスピリエンスホテル」を確保したようだ。

それから、一ヶ月が経過しても音沙汰なく、痺れを切らし始めかけていた矢先だった。

気が付くと電話口で時間だけが経過していく。なかなか電話を切ろうとしない。一方的に切る訳はいかないし、あの女の代理で受けていてもさすがにぞんざいな扱いは出来ない。

「秋山さん！」痺れを切らした俺のひと喝。

——ああ、そうですね……。

「では、後ほど！」

——……あ、はあ。わ、分かりました。

声の戸惑い、分かるがこういう場合はこちら側から誘導してあげないとこの手の人物は一人で決断できない。はあ、疲れる。受話器をおいて、肩でひと息つこうと思った矢先、事務所の扉が開くのが見えた。

「いらっしゃいませ」奈津美が明るく声を上げる。

扉が三十センチほど開いたまま動かない。あれ……？ 誰か居る

のだろうが、どうしたのだろう。奈津美が首を傾げ、開きかけた扉を怪訝そうにそう覗く。

駿平は奈津美の背中からパソコンのモニターへ目を移すと「どうぞ、どうぞ」と奈津美の声が聞こえる。誰かと思い、頭を擡げて扉へと目をやる。すると更に押し開けられた扉から見覚えある顔が飛び込んできた。

「あ！ あ、秋山さん？」首を突き出し、思わず駿平が頓狂な声を上げる。

「え！ さっき、たしか電話で……」

まさか――、今のいままで何処で？ 事務所の入口廊下辺りで俺と話していたのか、それも長々と三十分ほど。じゃなきゃ、電話が切れてすぐに事務所の扉が開くはずがない。

おいおい、そこまで来ているのならさっさとこちらへ着てくれれば良いのに、呆れてしまう。ムツとするところを堪えるとその反作用で肩に重く圧し掛かるような感触を覚える。

奈津美が応接室へ促すが、彼はその場で肩を落とし、視線を床に落したまま動こうとしない。奈津美がどうぞどうぞ、と半ば強引に応接室へと促す。彼は体を折るように一礼するとやっと足を前に出した。猫背ですぐすと歩く。周りの空気が滲む。ネバリ気のあるジメツとした彼の歩いた後の辺りが澱んでいるように伝わってくる。

思わず首筋を掻いている自分に気付く。気を取り直しパソコンの画面に目を向ける。顔を動かさずチラッと彼を見る。

俯き歩く彼の顔にどこか違和感を受ける。目の周りが暗い。暗いというのは影ではなく、何かくつきりとした影。それが何かと理解するのに少し時間を要した。ん？ 青あざ？ なのか――。応接室に消える彼の背中を見遣ったまましていると奈津美がドアを閉め、こちらに向かって舌をペロツと出した。

すぐに奈津美がコーヒーを運んでいく。このあたりの扱いや状況判断はすこぶる上手い。

「駿平！」小声で駿平を手招きしている。

「なに？」聞こえていたが惚けよう。面倒なことを任せられそうな気がする。パソコンのモニターに向けたまま呟くように、惚けて駿平が返事をする。

「きて！ 早く」また小声で応接室を指差して奈津美が言う。

やれやれといった気持ち、内心舌打ちして席を離れると駿平は応接室へと向かう。

すると奈津美は応接室のドアを開け、駿平の背中を押す。「今すぐ、藤沢を呼びますから。少し待っていて下さいね」と奈津美は笑顔でニツとする。立ち去る時、俺になぜが目配せしてきた。（あんたさ、さっきこの人と話していたのじゃないの？ 知らん振りしないで！）と言いたいのか。

（ちよつと待てよ。俺の担当じゃないだろ、え）目で奈津美に訴えるが彼女は知らん振りしてドアを閉める。

駿平が居心地悪いのでその場でどうかしようかと、その時、秋山はハッと顔を持上げ駿平に縋るような態度を露にする。

「お願いです。このまま訊いてもらえませんか？」秋山がすすっと身を乗り出し、駿平に救いを求めた。

駿平が身を引くとドアに当り『バスッ』と音を立てる「あ、いえ、担当の藤沢がお話を承りますので……」。応接室の外が静かになるのが分かった。息練りしい。はあ、自分が呼吸をしていないに気付く。

「そこをなんとか……」駿平に歩み寄る。そして駿平の両腕を掴む。なんだなんだ。おい、止してくれよ。

否が応でも秋山さんの顔から目を逸らせそうにない。それに左目のふちが黒く、青痣と思いつきりわかる。

「ぶはあ。――あ、はい……」返事とも息継ぎとも付かない。

困った。片目パンダの男に手を握られ、懇願されるとは思わなかった。思わず、ドアのノブを手探りで探す。

ゆっくりとドアを開くとすぐその先に藤沢が居た。恐らく様子を窺っていたのだろうか、駿平に気付くとすぐに両手を合わせ、合掌

している。いつもの藤沢ではなくどう見ても明らかに芝居がかった態度。呆れる、なんで俺が？ あの子のお陰で奈津美が俺に目配せしたのが分かった。奈津美はあの女から何か貰っているのか？
ちゃんと会社に居るのを分かって俺に振るなんて。

——はあ、参ったな。

ドアを閉め、秋山さんの両手をそつと解き、ゆっくりとソファへと促す。

「あ、いえ。何でも」眼鏡のつるをズリズリと持上げ整える。気を取り直した。

「な、何か？」

「……………」

「うほん」咳払いを無理に一つ「えー、と。ところで、どうされました？」駿平もソファに座り、開き直りと諦めで彼の話を聴いた。
「……………」

「秋山さん、言ってもらわないと」又、眼鏡のつるを持上げ整える。気を取り直した。

「はあ……」彼は俯いたままだ。

「またもや溜息か。本当に煮えきれない男だな。」

「実は……、殴られました。彼女に」彼はボソツと言う。思わず彼を見つめる。

「え！　もしかして、——その痣？」少し下から見上げる駿平。

「ええ、まあ」

「何があつたのですか？」

「はあ……」彼は更に背中を丸め、テーブルに顔がくっつくほどである。

「分からないのです。なぜ、彼女が私を殴ったのか……」

「とにかく、話してみてください」駿平は口元を緩め、先ほどとは打って変わる穏やかな声で聞く。

「はあ……」もう一度深く溜息をつく。

彼はボソボソと陰々滅々たる声で話し始める。そこからの話で、

事の内容が少し分かった。

この男がとても小心者で良かったと思った。とにかく、大人しい。それだけに怖いのだが、普通であれば相手方はこちらの会社に被害届やクレームになっても良いものの内心ホッとしている。

相槌を打ち、彼の話にも度も頷き、小一時間ほど訊いて、とりあえず帰ってもらった。実は何とか、いやどちらかと言えば半ば強引に追い返したような形となった。

訊いている限りでは幾つもの誤解が重なっている。その為、彼女から一発喰らった、と言う事らしい。とにかく、秋山さんの一方的な話だけでは後々解決できない。相手方の女性の状況も把握しないと何とも言えないのが、駿平のその場の判断だった。

話を聞いて骨が折れた。彼を見送ったその場から廊下を渡り非常口の階段踊り場へとあるく。

いつもの階段の踊り場で煙草を吹かす課長が目にとまる。煙草の煙が目染みるのか、目を細め吐き出す煙が漂っている。

「吸うか？」歩み寄った駿平に話しかけた。

「あ、はい。すみません」

懐から取り出した煙草を俺に向ける。俺と同じ銘柄の煙草だと思つた。珍しい課長が俺に進めるなんて――。

一本を引き抜き咥える。ポケットを探るがライターの無い事に気づく。駿平は咥えた煙草に手に掛けた。一旦、ここはやめておこうと思つた時、課長がライターを差し向ける。

「どうも」つい差し向けられたライターに煙草を向けた。

駿平本人、気持ち揺らぐことをすっかり忘れていた。

吸い込むとパリパリと乾いた音がした。

――見覚えあるライターだな。

俺の持っているライターとまったく同じだ。いつから……。もしかして、それ、って煙草もライターも、俺の？

「課長、それって？」思わず、声を荒らげて上気した。

「あ、すまんすまん。どうしても我慢できなくなてな。下の自販機までいくのが億劫でな。あの、タポスとか言う大人の証明カードも無いとな」タポス？　タスポじゃないのか——「そしたらおまえの机に煙草がぼつんと俺を見てるじゃないか。吸ってほしいと言わんばかりの煙草がな、つい」また、ニツと笑う。歯茎がむき出しになる。『つい』じゃないだろ、課長！　いい加減にしてくれよな。成人識別カードは別として、いつもいつも俺からの貰い煙草じゃないか。勝手に俺の煙草を吸うなよな。それもライターまでチャッカリと。課長から奪い取ると渋々返してきた。

「課長、少し相談が」ムスツとした口調で課長に突っかかる。

「なんだなんだ？　何の相談だ？　金は無いぞ！」

当たり前だ。金があるのなら貰い煙草なんて、しけた事はしないはずだ。

「いや、秋山さんの事で……」急に真顔に切り替えて言う。

「構わんよ、ここでいいなら」煙草の煙を吐き出し、低音の声で返事をする。

「じゃ」駿平は今日の出来事、秋山さんの事を切り出した。

やはり、課長の見解も俺と同じで良かった。

「ただ、適当に扱うな！　誠意を持って接しろよな。相手が警察、弁護士であろうが、獰悪なヤクザが腕まくって来ようが、向き合え！　丁寧に根気よく話を訊くんだ。それだけだ」と課長の口調と顔がきりっと変った。いつものオヤジではなく、凜とし、ほんの一瞬だが別人のようにみえた。

時に本当に役にたつオヤジだ。

「なつみちゃん」猫なで声。そう言うか否や、通りかかった奈津美の後を追う。いつものオヤジ、いつものダラシナイ顔つきに戻る課長。

駿平は溜息をつき、項垂れる。

——そうだ。あの女、藤沢。

乱暴に吸いかけの煙草を揉み消し、事務所へ向かった。

事務所に戻ると藤沢が自分の机でパソコンに向っていた。

駿平は左右を見回し、誰も居ないことを確認した。幸いに奈津美もいない。よし、いまだ。今日こそは一言ガツンといってやろう。顎を引くほどゴクリと唾を飲む。胸いっぱいには沸きあがる怒り。

熱くなった駿平はツカツカと藤沢へと歩み寄る。

藤沢のいる横まで近づくと、よし！「ふ、藤沢さん」震えた小声で呼ぶ。一応会社では歳も社歴も先輩だが、もう腹に据えかねていた。

「藤沢さん！」

藤沢は駿平を一瞥する。

「おかしいんじゃないですか？ いつも仕事を人に押し付けるような気がするんですが……。別に悪口を言っている訳じゃないんです。ただ、ちよつと多いな、と思って、こんなことが……。最近、とても……。声が震えながらも一気に話した。けれど最後の言葉が細くなっていく。

「何かいった？」今度はパソコンのモニターを見たまま愛想なく話す。

俺の話を訊いているのか？ バカバカしくて、血が上って話した俺が間違いだった。頬を抓る。さっきの課長の顔が過ぎる。

「あ、あのですね！」声が大きくなるが裏返る。

「何？」表情を全く変えない。この女、本当に頭に来る。『何？』はないだろ。惚けた返事を返して。けれど藤沢の目は冷ややかに駿平を見据える。

俺がクソ女に向って吠えているとその横を一瞥くれて通り過ぎる奈津美に気付いた。

「あ、いえ、——もういいです。今の事はなかったことにして下さい」

「ええ、そうね。私忙しいのよね」トントんと束ねたクリアファイルを机に押し当て整える。

話にならない。腹の中で舌打ちして自分の机に戻る。

自分の椅子に座り、急に弱弱しく呟く。はあ、情けない。あの女に睨まれただけで怖気つくような自分が情けない。それに奈津美に見られていたのだろうか？

あー。ムカつく。ふつふつとしていたが、相手に負かされてしょ気になる。

むしゃくしゃしていたが、秋山さんのことに気を向けることにした。

秋山さんの相手、矢倉玲子。彼女の身上ファイル、キーボードを叩いて検索ボタンをクリックする。登録名簿データから検索をする。システムが検索を始めた。一〇%、四五%……。

たしか……、記憶の欠片を繋げる。彼女の会員登録は三カ月前の登録日が書き込まれている。年齢は三十……と、ゲームメーカーで宣伝企画の所属だったような気が、確か――。画面の……八〇%、九五%……、一〇〇%。

そうか、俺と同郷か。九州、福岡の出身。大学が横浜のほうだ。現在の職業は、すでに八年も勤め上げるゲームソフトウェアを企画、開発する会社にいる。世間でも名も知れた有名な企業だ。

部屋の時計を見る。まだ、十時五十四分だ。電話するにはまだ早い。お昼を過ぎにでも彼女に連絡をとってみよう。とりあえず彼女の身上データを印刷しておこう。今の時間を考えるとキャンペーン企画の資料作りもしなきゃな。

検索された彼女が映るモニターの隅にある印刷ボタンをマウスでクリックしてプリンターへ向う。吐き出される用紙を見ながら、先ほどの自分の不甲斐無さに小さく溜息を落す。

第二話（応援） 2

2.

ふと手を止め、溜息をつく。パソコンへの先月の営業成績データ入力を主任から頼まれ、昼休みまでに及んでいる。事務所には誰も居ない。

大丈夫かしら――。

矢倉玲子は右手の拳をみる。少し赤みが残る中指と薬指の付け根が時折痛む。改めてゆっくりと手を擦り眺める。

はあ、どうしてあんなことを。――でも、私は悪くないわ。だいたいあの男が悪いのだ。それにあんな男とは思わなかった。子供の頃から負けん気が強いといつも言われていた私。そんなことで幾度となく失敗、自分でも分かってはいるが、つい、が多い性格だ。

頬杖をつくとぼんやりと数字の並ぶパソコンのモニターを見ていた。画面の隅々まで数字がびっしりと並んでいる。横に目をやるとクリアファイルが積み上げられている。モニターの数字は、ゲームソフトウェア販売契約をしている取引先の売上データ資料が埋められている。玲子はそのデータに基づき販売戦略を企画する業務をしている。平たく言えば、その数字をデータとしてパソコンへ入力し、営業データの販売実績表を作る。表を作るだけで、彼女自身、発言もなく販売企画などといった役割などの大袈裟な事はしていない。当然責任も評価もない。彼女は膨大な入力作業の能力が他の誰よりも速いという評価だけだ。必要とされるのはそれだけだ、と本人も分かっている。

机の携帯電話が鳴る。正確にはマナーモードで振動する携帯電話。手に取り携帯の液晶表示を見る。セキュリティ上の為、会社には持ち込んではいけない携帯電話であるが、特別に許可を貰っている。母の介護の為だ。

やはり母の通う病院からだ。今日は週一の通院日だ。その事で何かを伝えてきたのだろう。携帯電話を受けるのに少し戸惑った。

「はい、矢倉です」

彼女の母親は救えない病氣、記憶が欠落して失くしていく病氣、アルツハイマーだ。まだ初期症状で入院までは至らず、自宅治療をしている。時折介護の方に来て頂き、身の回りの世話をしてもらっている。本来であれば、毎日自分が身の回りの世話をしたいのであるが、二人の生活費を稼げるのは自分以外に誰も居ない。

母子家庭で育った玲子にとって母が唯一の肉親である。その母がこれといった手立てもなく、回復見込みのない病魔に蝕まれて既に八ヶ月が過ぎようとしている。突然だった。それが今の現実でもある。

「ええ、はい、——そうですか……、はい」

「——わかりました。では、今週の土曜日に時間を作り、参ります。私一人で宜しいですよ？ あ、はい、——わかりました」

「態々、連絡ありがとうございます」電話を切るとさらに肩が落ちた。

送話先から聞こえる淡々とした声に怒りもなく、落胆が強まるばかりである。胸に広がる不安は薄っすらとしたものだったが、今は深く滲む不安、いや落胆といったほうがいい。溜息を何度ついてもつき足りない。母の様子を見てみると目頭が重く、溢れそうになる。それどころか本人を前にしてどうしようもないことに怒りさえ覚える。とにかくどうにも出来ないのである。時が経つにつれ、私の事、いえ母本人、自分自身の事すらいったい誰なのか分からないようになる母を見ていられない。だから、責めて母の介護をしておきたい。少しでも——。

拳が痛む記憶、あんな事があってもやはり共に歩くパートナーも早いところ必要だと考える。自分勝手ではあるが、母の事を考えるとこのままより二人の方が良いと最近考えている。介護も一人より二人。けれど私の母の面倒見てくれる相手は居るのだろうか？ はあ、あんな人でなかったら良かったのに。

ブラインドから差し込む柔らかな日差しが事務所の天井に広がる。
やはり私、不味かったかな……。もうあそこには行けないな。

手に握る携帯電話が再び振動した。

まだ、何か言い忘れたことでもあるのかしら、と携帯の表示を見る。誰だろう？ この電話番号に記憶がない。躊躇ったが受話ボタンを押す。

「もしもし？」

——もしもし、矢倉さんのお電話でしょうか？

「はい」

——ハッピーパートナーです。

「え？」

——理想の結婚を提案する『ハッピーパートナー』の野呂といいます。

「あ、はい」

——すみません。今、お電話宜しいですか？

「ええ、あ、はい、ああ」

——大変申し上げにくいことですが……。なんとも歯切れの悪い口調でそれ以上話が進まない。

一瞬、思い浮かばなかった。病院から電話、その事で全然気持ちに余裕が持てなかった。自分でも動揺を隠し切れず露に声となる。どうしよう？ あのことで連絡をよこしたのだろうか。

——あの……。お分かりだと思いますが、秋山さんの事です。

今度は淀みがなく男は話す。やはりそうだ。真摯な口ぶりのようでもある、馬鹿丁寧な口調でもある。付け加えて嫌味が無く冷静だ。

「何か？」背筋を伸ばし、硬直する姿勢で椅子に座りなおした。あの男のことが一気に不安となり胸の中を駆け巡る。

野呂という男の申し入れは、先ずは何とか時間を割いてもらいたい、と。下手で話す男の声が心なしか私側に非がないように受け取れた。

耳から携帯電話を離し、少し考えた。それから肩を落とすと同時

に溜息も深く着いた。

「ええ、わかりました」ならばと頷く自分がいた。

携帯電話を切り、ぼんやりと天井を見遣る。

「わっ！」ふいに手に持つ携帯電話が再び振動した。しどけなく物
思いに耽っていた玲子は思わず驚き表示を凝視した。

あれ？ 今度はいったい誰からだ？ 見覚えのない携帯番号だわ。

一瞬躊躇ったが、受話器を耳に当て応える。「——もしもし」耳に
聞こえる声。

——ああ、あの時の。

第二話（応援） 3

3.

その週の土曜日、朝八時三十分。

野呂という男が言う待ち合わせ場所へ向かおうとしていた。

母にすぐに帰るから、ね。お昼ごはんは食卓の上に準備しておいたから、時計の針が十二時になったら食べるのよ！　と言いついて聞かせる。部屋の内を歩くと、張り紙がしてある。まだそこまで生活には不安は感じられないが、用心に越したことは無い。けれど最近、症状に歯止めが効かなくなっているように窺える。電子レンジでさえ使わせることを躊躇う。だから止むをなく出かける時は直ぐに食べられる物を準備しておく。当然、私が会社に出かけるときも同じで、間違ってもガスコンロなどは使えないように元栓も閉めておくことは日課となっている。本来なら常に側で生活の面倒を見て付き添っていたいけれど、生活費意外の治療代が莫大にかかっている。病院の施設で入院看護などしてもらえるほどの余裕はない。けれど、そろそろ本当に考えなければ――。

「おかあさん！」

「はいはい、大丈夫大丈夫、レイは心配性だね――」玲子の居る玄関へ向って歩いてくる母親。今日は安定して落ち着きのある返事を返してくれる。

「じゃ、行ってくるからね」

気にかかる気持ちを抑え、朝早くから出かけた。午後から母の件で病院へ向うことも必要であるから仕方ない。折角の休みでも休まることがここ最近のところない。

約束の喫茶店に着くとすぐにドアを開けることに躊躇した。

けれどここに突っ立っていても何も解決しない。気を取り直し、

店内に入ると幾つもの並ぶテーブルを見遣る。それらしい男の姿は見当たらない。私のほうが少し早く着いたみたい。少し安堵して席の空いている窓際のテーブルに足を向けた。

席に着くとセカンドバッグを横の椅子に置き、テーブルに両手を乗せる。注文を取りにきたウェイトレスにダージリンを注文する。はあ……。溜息をつき、窓の外をぼんやり見ていた。

ふとあの事を思い出すと煮えくり返るが、野呂という男の電話での申し入れは私には非がないといった口ぶりだった。だから、今朝は男の顔がチラついていても冷静に化粧もできた。

自分を薄く映し出す窓越しから車の行き交う通りの向こうに見える花屋で若い女性の店員が笑顔でラッピングしている姿に目が行く。その向かいにいる相手は若い男性。身につけている服からして二十代半ばかしら。これからデートにでも行くつもりだろうか？ 頭の後ろを掻いて照れ笑いしていることに新鮮ささえも感じる。あの笑顔、これから特定の女性にだけに見せる満面の笑み、となるのだろうか。私もそんな男性が――。

運ばれたダージリンの紅茶を一口啜る。カップソーサーに置いたティーカップの縁に付いた口紅を親指で擦り払う。

母の事といい、なんでこんな事になるのだろうか。私達親子ってとても不幸せなのだろうか。そう考えていると、何処と無く苛つく。あの男には間違っても謝ることなんて、――絶対にしない。喩え野呂という男が土下座をしたとしても。やはり今は思い出しただけで苛立つ。

紅茶をもう一口啜る。少し温くなり苦味が増したような気がする。いったいどちらが悪いのよ？ 私は被害者よ。あの男が悪い。いや、あの男を紹介してくれた結婚相談所も悪いのだ。薄っすらと艶のある唇を横一文字に力強く結ぶ。

三ヵ月ほど前、静香の結婚披露宴に呼ばれた。それはみせつけのように思える。私とサオリを含む三人は同期入社で誰が真っ先に結

婚するか、とめいめいが牽制し、並々に注いだコップの水がかるうじて保つ表面張力のようなであった。その最初に口火を切ったのは静香だった。

静香の披露宴会場でサオリは、悔やしむどころかこれ見よがしと手当たり次第独身らしき男にアプローチ。それに二次会の約束まで取り付けているようだ。節操がないサオリが「遊び遊び、いい男を見つけてまだだよ。結婚は別」日頃、結婚を意識しているが、所変われば発言も優柔不断。「あ、でもね結婚は安定よ。それも贅沢な安定」この女、まったくもって理解できない。ほんと呆れてしまう。付け加え同性であることに腹立たしさも湧き上がる。

披露宴も終わりに近づき、静香の幸せな笑顔も最高潮。もう少しの辛抱。そもそも見せ付けの宴会もこれまで、早々に帰ることをここに来た時から決めていた。但し例外はサオリ。当然、サオリは声をかけた男達と二次会に向うはず。あれだけ声掛け捲りの女はここからが更なる盛り上がりタイム。

披露宴が終わると、貰ってそう嬉しくない引き出物を抱え、宴会場を出てすぐに出口に向う。ホール床は硬いテラコッタ風のタイル張り。玲子のヒールがそのタイルを叩くと品のある乾いた音が発し、ホールに一際高く響き歩く。けれどその音は周り人並みの雑音に掻き消され砕ける。一人だけ残されていく自分が何か可愛そうに思えた。

歩きながら何が結婚よ！ キャンドルサービス、父と娘、愛、男、酒……、くだらない。腹の中で毒づく言葉はやはり結婚に反抗するものばかり。なんだか目頭が少し熱くなってきた。

不意に誰かが私の肩を叩いた。

「玲子、待ってよ！」振り返るとサオリが息を切らしてそこに立っていた。気付かなかった、すぐうしろにサオリが追いかけてきたことを。

「何よ」

「『何よ』は、ないでしょ！」

「もう終わったし、私先に帰るわよ」ハンカチで口を隠す。

「あれ？　いつもの玲子らしくないじゃない」

「何が？」　滲んだ目を見られたのかと思った。

「だってさ、いつもならあんた、いく？　って」目に見えないグラスを持って傾ける。飲みに行く？　といったふうの仕草。

「いや、よしておくわ」

「え！　そうなの？　――そうね、あんた酒はいるとヤバイし」

「何が？」

「あ、いいの、何でもない。――でさ、玲子。訊いてよ、まったく話にならない」

サオリは引き出物の紙袋を持ち直して訊いてもないのに勝手に一人ぼやく。含みを持たせた言葉を玲子にいいながら。

「あんた一人で行ったら？」　心にもないことを言う。本心は少しくらいなら……、と誘いのないサオリにも苛立ちがある。「割といい男たちじゃない」やはり癪に障るのでサオリに言う。

「駄目、駄目、あんなの。これ持っていないよ。全部まとめてバイバイ」あれほど男連中と騒いでいたくせして、サオリの発言と指の仕草で全部の男、金持ってそうじゃないようだ。

「あのさ、この際だから今度お見合いパーティ、行ってみる？」サオリが耳打ちする。

「それって、どこかの会員にでもならないと駄目じゃない？」どこにそんなお金があるのよ。あんた毎月にローンで汲々言っていたじゃないの。

「そうよ――、いつにする？」もうこれか、ほんと軽い女だ。勝手に一人で行けば。

「なんで？　でも、どうしてそんな急ぐのよ」こんな切り返しの言葉、自分の年齢からして焦りのない台詞がおかしいけど。

「だってさ、同期の静香に先越されちゃったのよ。焦るじゃない。こう見えても私だって気にしてるのよ」全然そうは見えない。「でもまだ大丈夫」何が大丈夫なのか、サオリの言うこと意味不明。

「静香の旦那、銀行マンでしょ！ 一応都市銀行マンに対抗するなら、それ以上の――、例えば証券マンか、そう医者よ。いや青年実業家なんてのもね。とにかく負けてられない」

どうして、そう張り合うのよ。本当に馬鹿な女。所かまわず男に声をかけまわす女でも、結婚はしたいものなのか？ けれどその馬鹿な女に付き合っている自分もその類なのかしら。

会員といえば、世間でいう結婚相談所というところへ出向くのかしら。そうすれば理想の結婚が手っ取り早いのだろう。私はその誘いに言葉では否定しても内心軽い気持ちで頷いた。その時、母の事が少し頭にチラついた。そうね私もそろそろ、という気持ちも望んでいた。いや、母のことも私も人並みに幸せくらいは。

週明け月曜日、昼休みの合間にこっそりとインターネットで結婚相談所を検索してみた。会社に近過ぎても誰かに見られると気まずい。いくつかの中、手頃な結婚相談所を決めようと探した。その中から『ハッピーパートナー』が目についた。会社から自宅へと向う帰路にある訳じゃない。その反対、自宅へ向う反対の方向に位置する。ここならという気がした。仕事が終わると、こっそりプリントした『ハッピーパートナー』の用紙をサオリに見せると何処でも問題ないようであっさりと会員候補となった。

翌日、仕事帰り。二人で『ハッピーパートナー』の事務所を訪れ、一緒に会員として申し込んだ。

安くない三十万円という大金をはたいてまで男を手に入れようとするサオリの気持ちにはなれないけど、藤沢とか言うカウンセラーの説明に「出会いは大切だ」、「無理しないでも……」とどちらでもいいわよ、と言わんとするその投げやりとも無理強いしない言葉に頷いている自分の右手にはペンを持っていた。

その後、サオリは直ぐに自分の氣に入った男性とお見合いゲットしたにも拘らず、すぐに男を乗り換える。明け暮れず更に何人かの男を品定めしている。彼女は三十万円で鯛を釣ろうと思っているに違いない。鯛という高学歴、高収入の男を――。恐らく本当のパート

ナーを決めきれないだろう。しかし、どこで三十万円もの大金を彼女が準備出来たのか？ 訊く気になれなかった。もしかしていままでの男達に貢がせた品物を質屋にでも持ち込んだのか？ いや、そのくらいじゃ到底足りるものでない。恐らく現金を貢がせたのだろう。どこかの馬鹿な男にでも、――きつとそうに違いない。

男性会員のファイルに目を落とし迷っていると、カウンセラーが紹介する秋山という男性の詳細に目をやる。大金をはたいて会員になり欲はあるものの、浮かれても。

秋山という男性。

介護の仕事をしている。私にとってもしかすると必要な男性なのかも知れない。それは母にとっても都合が良い気がした。しかし、写真を見てピンとも、これは！ ともない。詳細な身上を見るうち、はて？ と思う箇所が幾つかあったがこのくらいことは割り切りだ。と。選り好みしていても仕方ない。とにかく会ってみようかと思つた。自分の年をおさなりにして他人の事とやかく言う事無い。違うなら断ればよいはず。

翌週、セッティングされたホテルのロビーで紹介された時、実物の男性は写真の印象とはだいぶ違うと思えた。どことなく穏やかな雰囲気。とにかくおとなしく物静かな人物。けれど割と感じがいい。些細なことは付き合っていくうちに慣れてくるものだろう、と感覚的にそう思えた。

それがあんなとんでもない男とは思ひもしなかった。その逆、あんな事を自分でもするとは思ひもしなかった。とても腹立たしくもあり、自己嫌悪で憂鬱でもある。

その後、どうしても結婚相談所まで行く勇気が湧かなかった。行けば絶対に後ろめたさでその場にいる事が耐え切れなかったから。結婚相談所の野呂とかいう職員から電話を貰った時、あのまま電話口で退会したいといつ、言いそびれてここに来てしまった。

ふと手首を返し、腕時計を見る。十時五十分、すでに約束の時間

は過ぎてゐる。午後早めには病院にも足を運ばなければならない。電話の口調からして誠実そうな人物だと思つていたのに、なにより待たせるなんて。人を馬鹿にするのもいい加減にして欲しい。少し苛立ちながらも一口紅茶を啜る。

カップをソーサーの上に置き、店の入り口へと振り向こうとした時、左視界に入る影。思わず驚き身を引く。

改めてその影のほうへ目を向けると笑顔が似合う男が立っている。玲子は慌てて立ち上がると同時に椅子のすびく音が店内に響く。

男の顔をみるなりすぐに分かった。いかにもそれらしい。電話をかけて来た結婚相談所の職員に間違いない。彼は私に笑顔を振りまいているのが見て取れる。当然のこと私の顔は知っている。

カチツとしたグレーのスーツを纏い、縦縞のスプレッドワイドのシャツにレジメンのストライプタイでキュツと襟元を締める。右手にはビジネス用のダレスバッグを持つ。それとは似合わない紙袋を左の小脇に抱えている。

「矢倉さん？　矢倉玲子さん、——ですよ」当然分かっているのにも拘らず、それでも確かめるような口ぶりで私を見下ろす。

「ええ」

「良かった」男は感嘆している。すぐに頭を下げ、快濶よい声で「遅くなりまして申し訳ありません。『ハッピーパートナー』の野呂です。お電話差し上げた者です」

「あ、は、はい」言葉が出ない。

男の口調と態度がワザとらしい。遅れたことに気分を害していた自分だが、この男に不快な気分は微塵も感じられない。それどころか、爽やかささえ感じられる。いやだ私、騙されない。決して惑わされない。こんなことであの事を許すとも思っているのなら、甘いわ。でも——、割かし感じいい男。

「よろしいですか？　ここ？」

「は？」つい見惚れていた。

「あ、いえ、座っても？」

「ああ、どうぞ」玲子は咄嗟に横の椅子に置いてあるハンドバックを手繰り寄せた。無意識に胸に押し付け、揉みくちやにしているハンドバックに思わず自分の動揺に気付いた。こちらを見る男の視線。動揺して引き攣っている頬をみられた。

「すみません。すぐに終わりますから、大丈夫ですよ」

「はは」やはり引き攣っている。「は、そうですか」倣ってお尻を居心地悪そうに椅子に座る玲子。

すぐにウエイトレスが氷水の入ったグラスを運んできた。メニューに見向きもしないで男はコーヒーを注文した。

「改めて、私、『ハッピーパートナー』で営業担当をしています野呂です」と懷から名刺を差し出しながら微笑む。

緊張しているのが自分でも分かった。名刺を両手で受け取りながら、ぎこちなく会釈を返す。

「どうも、この度は」と頭を深々と下げてくる。「お待たせいたしましたして申し訳ありません。早速ですが、当社でご紹介させて頂いた件です。あの方、秋山さんとの件です」紙袋をガサゴソと音を立て、中からのし紙付きのお菓子らしい箱がテーブルに威張るように滑る。改めて言うまでもない。そんな物を受け取りに来た訳ではない。

この場を速やかに終わりたい。言いたいことを伝えて、きれいさっぱりは何も無かった事にしたいだけだ。こんなものを貰っても私は困る。

二人に分け入るようなタイミングでウエイトレスが男の注文したコーヒーを運んできた。男は運ばれたコーヒーを一口啜ると少し間を置いてから話し始めた。

「あの、唐突ですが良かったら教えていただけませんか？」そんな玲子の目つきを悟ったのか、声色を変えて探るような口調だ。

男はテーブルに両手をつき「今回の件、差出がましい事とは思いますが。お二人の問題ではありますが……、ご紹介させて頂いた当社側の責任もありますし、私どもの不手際があるのでしたらお詫びをさせて頂きたいのです。事の内容を把握させて頂きたいので、いや、

元より今日は、矢倉さんのお話をお聴きしたいのが大前提であります」言った矢先、狭いテーブルに擦り付けるほど頭を下げる。

その行動に、つい手を差し伸べようと気持ちが先にたつ。この男に似合わないわ。それに周りの視線が冷ややかに突き刺すのが分かる。特にウエイトレスもこちらの様子を窺っているのが分かる。知らない人が見たら、まるで一方的に私が悪者に見えるじゃない。

「いえ、もう結構です。退会します」遠慮しがちに玲子は首を縦に折る。

「え？」

「もう退会しますから」気持ちを察してよ。

「退会？」私の言っている意味を理解してくれないようだ。頭を持ち上げる。

「だから、何度も言ってるじゃないですか。今後、結構です」ごめんなさい、だからもう止めて。

「ですが、このままですと矢倉さんと秋山さんとの話がですね――」虚勢したさっきまでの気持ちが崩れる。私の気持ちを察して。テーブルに手を着き、上目線で私を見上げないで。あの事はもう、ぶり返さないで、跡形なく白紙にしたい。私がいい、と言っているのだから、もういいじゃない。退会すれば、何も無かったことに出来るくらい訳ないのじゃない。いったい何が言いたいのか？ あの手から詳しく訊いているはずよね。この場で言う事であるじゃない、大変でしたよね、もう安心してくださいますか、あなたは被害者だから先方に重々言い聞かせておきます。本当に申し訳ありません。おっしゃる通りに退会も受理し、全て白紙に致します、でいいじゃない。「もう、無かった事にして下さい。おねがいですから。あ、そうだ。解約金か違約金があるのですよね。幾らですか？」本当は違約金など払いたくもない。そんな苛つく気持ちを押さえ言う。

「いえ、そんな急に言われても。当社としてまずは、お客様の事態を把握し、行き違いなどありましたら、明確にしてですね……」

ええい、しつこい！

「え、じゃ一つ言わせて貰います」男の話を折り、苛立ち言い放つ。玲子の返す言葉に少し身を引く男。

「あの男――、ゲスな奴」呼び捨てである。「はっ」日頃、言動や行動に気をつけていたのに、いけない、つい言ってしまった。明確どころか暴言といってもよい。参ったな。

「……」

「はあ」でも、いいわ。事をはっきりしないとこの男は納得できないみたい。それは私の気持ちを無視しているように思えるのだが、このままでは埒があかないのなら仕方ない。

「一昨日までは、そんな風に思わなかったのですが、先日呆れてしまいました。あの男まったくもって信じられない。変態そのものです」言った後、鼻の穴から空気が抜けたことは悟られなかった。また言ってしまった。男は突然に彼女の豹変に驚いていた。

「……」

「だから――」

玲子の話を折るように男が言う「秋山さんは気が小さい方です。

確かにその類である事は否めません。少し風変わりだが、世の中その位の人間はザラにいます」この男は何を言っているのかしら突然、相手の男性を下げ落しているのかしら――。

「でも、まあ……、そんなところ。うん、ありますね。オタクっぽいとこが。そうですね。やはり秋山さん変人ってところ十分ありますね」腕を組み虚空を睨みながら、口元を歪める。

あれ、まったくもってあの男を犯人扱いだ。言っている事が分かってるのだろうか？ メチャクチャでどちらの味方だ。

「しかしですね、人に危害を加えたり、犯罪行為するような方ではありません。だから、どうしても教えてほしいのです」男は先ほどとは打って変わり態度を急変し、玲子の目をじっと見つめて言う。

どうしたのかしら、この男の言葉にどこことなく頷く。いや惹かれるような、吸い込まれるような目。開き直った凄みというより、目が本気だ。気持ちで私を押し倒してくる。いけない、いけない。こ

んな事を考えるようでは。

「私が嘘を言ってるとしても言うのですか？」それでも気を取り直して負けず言ってしまう。男の目を見ていと言えなくなりそうだ。玲子は眉間の皺を作りそっぽを向く。

「いえ、とんでもない。申し訳ありません」男は慌てて頭を下げる。駿平は胸の内で気持ちを落ち着かせようと懸命だった。ここで状況を悪くするのは不味い。神妙な顔つきで口を引き締める。

クレームはビジネスに付き物だ。溜息交じりの声で、テンポを遅くするように会話を仕向ける。ルール何番目だったかな？クレーム対応マニュアルに基本に忠実に話を進めることにする。だが、思い出せない。こんな時に限って――。何れにせよ、誠意を持って相手に話をさせるように仕向ける事を意識して接すれば――。

「本当に大変申し訳ありません。お怒りは重々察します。どうか最初から話してもらえませんか？」申し訳ない気持ちで何度も頷きながら、彼女の口から真相を引き出すように仕向ける。誠意、誠意と言うが……、最後に頭を下げたまま相手の出かたを窺う。横を見て無視していた彼女がチラチラ駿平を見る。

暫く間を置いてから玲子は男に向き直る。

「なにもそこまで頭を下げなくても、野呂さんが悪い訳じゃないし」苛々している彼女の右目の瞼がピクピクと痙攣を起こしている。

「いえ……」駿平は思わず出かかった言葉を飲み込む。口を瞑り、とにかく反論しない事に意識した。

玲子は俯くと暫く間が空く。どうも腰掛ける椅子が妙に居心地が悪い。

業を煮やした玲子から溜め息交じりで「じゃ……、私もあの時のことを言わせてもらいます」

テーブルの温くなった紅茶を玲子は一気に飲み干す。乾いた喉を潤す。ゴクリと喉を鳴らす。紅茶が喉元を過ぎるその音が一段と増す。それでもまだ足りないのか横にあるグラスの水まで一気に胃袋へと流し込む。喉の渇きというより腹を饑える為のものだろう。思

わず顎を引いて目をパチクリする。

「ヒック!」とシャックリが漏れる。胸を何度か軽く叩くと少し落ち着いたようで、長く息を吐き出し、それからハンカチで口元を拭くと深く落ち着いた声でゆっくりと話し始めた。

「実は……、先月――」

先月末、週末の土曜日。

あの男と昼食をした。

そう言えば既に四回も会っているわ。なんで早く気付かなかったのかしらあんな男だということを。

男は小洒落たイタリアン料理を予約しておいてくれた。私は少し心に余裕も出てきた頃で気の緩みもある。しかし、男は物静かで相変わらず多く語らずの人物だ。最初は緊張しているのだ、と思っていたが何度か会ってもそうでないことが分かってきた。それでも誠実さが伝わる男性だと窺えた。そうだな。そんな人柄のほうが本来結婚するには最適なのもかもしれない。サオリみたいな選り好み、私自身、そんなことは出来そうにない。そんな性分でない与自己分析はしている。

それから、二人は図書館を巡り、美術館に赴いた。暫く展示物を鑑賞して時間を潰す。一通り見終り美術館を出ると喉が渴いた私の様子を察しての事、男が手頃な喫茶店を探し始めた。この辺りならは私も詳しいが、あえて男の案内に任せることにした。

数件の店を覗いた。何処も満員で二人座る席もなく適当な店が中々見当たらない。この辺り以外には私が知る限りの喫茶店は少ない。この人、詳しくないのだろうか、きよろきよろと落ち着きがない。やはり私がそれと無く促せばよかった、と思っていた。暫く歩くと街の景色は変わり、また喫茶店らしき店が見えてきた。男の横顔を見るとホッとした様相がわかった。

更に店に近づくにつれ、店は思いのほか派手である。派手というよりケバケバしい。この店はパスね。顔を逸らしながらそのまま通

り過ぎるのかと思った矢先、店の前で男が立ち止まった。あら、どうしたのかしら？ おもむろに彼に目を向ける。男は店の中を窺っている。

空いた口が塞がらない。そこはメイド喫茶である。

パタツと足を止め、その場から離れようとする男。まさか、何を考えているの？ こんなところに女の私と同伴する店ではないはずなのに。

辺りの視線を横目で確認して男を見遣る。ガラスにへばり付き、ある一点を凝視している。その視線の先にメイドの服装をした女がいる。呆れた。私に目も呉れずただ一点を凝視している。首を左右に振る。ガラスが吐き出す息で曇る。私と居ることを一切忘れ、なりふり構わずである。

私と男、二人の側を通り過ぎる人達の視線が冷ややかだ。訝しように横目で薄く笑って過ぎていく人もいる。どうしよう、恥ずかしい。いやだ、いったいこの状況どういう事。呆れて思わず拳握っていた。

駿平は玲子の話を聞きいていた。息苦しくなり、唾を飲み込むと咽た。

玲子もそこまで言う喉が渴いたらしく、身を乗り出しカップを覗くと紅茶がないことに気付く、さっき飲み干したことも忘れるほど。すぐに視線を逸らし、氷も溶け、汗の掻いたグラスに残る水を一気に乾いた喉へと流し込んだ。それもゴクゴクと喉まで鳴らして。

相当息巻いて話しているので余裕はなさそうだ。飲み干したグラスをテーブルに強く押し付けるように置くと玲子は再び話を続ける。

「それからね……、その場で彼と分かれまして――。だって、そうでしょ！ その場の状況を考えたら誰だったそうするはずです。呆れて……」

気が付くと私は一人歩いていた。立ち止まると地下鉄の入り口の

表示が目止まる。はあ、いったいなんなの？ 手が痛くなるほど拳を握り締めていた。その場で俯くと地面が滲んで見えた。頬が涙で濡れていた。思わず地面を蹴る。悪いことにその勢いでヒールの踵がポキリと折れてしまった。ますます情けない。

腑に落ちない。何故、あの男はメイド喫茶の女を？ そうか、やはりオタクなんだ。やっぱ、最初に会った時……。

でも……。いや、そんなことはない私の思い込みだわ。何かあるのだわ。そうよ、きっとそうに違いない。一人、ムシヤクシヤしてあとど所なくセカセカと歩いた。男をその場に置き去りして来たこと少なからず後悔していた。——いや、あちらから謝ってくるのが筋じゃないかしら。

道路に目を向け、手を上げる。踵の折れたヒールをズルズルと引き吊りながらタクシーを拾った。

第二話（応援） 4

4.

週末の土曜日、携帯電話を見つめていた。

母の診察、病院の待合室で一人溜息を着く。ふう、何度も溜息を着く。ザッと乱暴に携帯電話をバッグに戻す。少しして落ち着かずバッグを開き、携帯電話を探る。躊躇いながら携帯電話を握ったまま待合室の出口へとツカツカと向い、空いたベンチを探す。目の前を通り過ぎる患者や看護婦。車椅子の老人を押す若い看護婦。その人達の先に木陰の洩れるベンチが目に残る。

ベンチに浅く座ると携帯電話を見下ろしダイヤルキーを押す。けれど恐る恐る携帯のダイヤルキーを押す。

聞こえる呼び出し音より、自分の胸の鼓動のほうが大きいようだ。

クツ、と耳に聞こえる相手と繋がる音。

「もしもし」と、話すと同時に思った。何故、私から電話してしまったのだろう。今更ながらではあるが、電話したことの後悔が沸々とする。本当はあちらから電話をしてるのが普通であるはずなのに。

——はい。あ、は、はいはい。

「あの、矢倉ですが……」何から話せば良いのだろう。やはりとても気まずい。

——あの、この前は……。

「……」こちらが声にならない。どう言ったらよいのか。

——すみま……、せ。

「いえ、いいです」男が言い終わらぬうちに玲子が言う。

——は？ いえ、そう言われても……。

「だから、いいですって」つい、むきになる。

——すみません。大変、失礼なところを見られてしまいました。

あれには、実は訳がありました……。

「ええ、そうでしょうね。でも謝らないで下さい」

だって、そうでしょ！　どんな訳があらうと目の当たりにしたあの現場じゃね、謝られると認めていると言う事じゃない。だから、謝らないで。次に話す言葉で終っちゃうじゃない。

——そうですね。ええ、まあ。

「……」

——ですが、もう……。

「いえ、もう一度お会いしましょう」

言った後で後悔した。でもこれで終わるのかと思うとつい——。

——え、今何て言いました？　い、いいのですか？

「あの時のことは、そう簡単には、でも……」電話で話している時、この男のどこか惹かれるものを心の奥深い場所ですっきりと感じている。それだけは間違いない。

そこまで話すと少し胸に痞える気持ちが腹の底へ落ちる。携帯電話を切ると握り締めたまま溜め息を着いた。

改めて後日の約束を取り付けた。私のほうから誘った。

——これで良かったのだろうか？　あれだけしつかりと感じているながら誘っておいて電話を切った後、すぐ悩んでいた。まだ本当に男のことを知り尽くしたわけじゃない。そう、この人は私にとって必要な男性となるのかもしれない。そう思えて——。不安はまだあるが、やはりどこか彼の存在は私にとって意味がある。必然性を感じる。ただなんとなく、そんなふうに思えてならない。

交互に気持ちいが今も揺れ動く。

母の事は気が沈むが胸の痞えがほんの少しだけ、なんとなくだが足取りは軽かった。

空高くに薄く引き延ばした筋雲。見上げた玲子に一瞬だが心地よい風が体を撫でていく。その風が体温を下げたような気がした。

携帯電話をバッグにそっと終い、ベンチを後にして病院の入り口に向った。

「この前は、どうも……」秋山は申し訳なさそうな面持ちで玲子に頭を下げる。

「……」玲子は許そうとしていたが、いざ本人を目の前にとどうしても直ぐには。

「しかし、なんと言ったらよいのか」

「ええ、そうですね。あんな趣味がおありだなんて」なんて嫌味な事を口走っているのだろう。素直にまだなれない気持ちがあるが、あれはあれで、もういいことと自分なりに整理したはず。割り切っているつもりだ。ここに来るまでに気持ちの整理もしてきたのだから。

「どうもこうも、ほ、本当にすみません」

「はあ、もういいですよ。あの位、男の人ならあってもおかしくないですからね」

「すみません」深々と頭を下げる秋山の顔はまだ強張っている。

玲子と秋山はこの前のことを洗い流そうと、玲子のほうから都内のホテルで待ち合わせを提案した。やはり病院で電話したことでの気持ちが少し軽くなり、あの時連絡して良かったのだ、と思えた。

軽く食事をし、ホテルのエレベータに乗り込む。

「あの、玲子さん、お酒は何が？」エレベータの階数ボタンを押しながら秋山は語りかける。

「いえ、私少し……」本当は割りとお酒もいける口で日本酒、特に冷酒がいつもだった。同期にサオリと主婦の静香と行きつけの居酒屋では体外三人で一升瓶は容易く空ける。ただ、今日はそんなところは見せたくない。

「ビールくらいなら？　ちょっとは」

「じゃ、一杯だけ、いいですか？」

好きなお酒もお互いの気分転換には良いものだろうと思い、玲子も秋山の提案に賛成した。

ホテルの直ぐ横にあった赤い暖簾がヒラヒラと夜風に靡く居酒屋

に気付く。秋山と二人並んで暖簾をくぐり賑わいを見せる店内を見渡す。初めて入る店に戸惑いもなく秋山は空いているテーブルを見つけるとすかさず玲子を促す。

秋山はテーブルに置くと手渡されたお絞りと突き出しを持ってきた店員に瓶ビールを注文した。

「どうぞ」差し向けられた瓶ビールに、玲子はグラスを傾け秋山のほうへ差し出した。秋山は手酌で自分のグラスにビールを注ぐ。私がグラスを取ろうとした矢先に秋山が先に自分でグラスを手にしたからタイミングを逃してしまった。改めて二人小さく乾杯、ぎこちなく噛合わないグラスの音がした。

「ところで、お義母さんの具合は如何ですか？」

「ええ、まあ、相変わらずです」

「そうですか、なんと言ってよいやら、あの、私が言うのも差出がましいでしょうが頑張ってください」

「ええ、すみません」

母の事についてそれ以上触れはしなかった。お酒も少し入ったせいか、二人の会話は少し弾んだようだ。彼は都内の介護施設で介護福祉師として働く傍ら、何かはつきりとは言わなかったがボランティアにも参加しているらしい。物静かな彼が珍しくいろんな話をした。秋山は動物が苦手らしく、その要因は子供の頃、犬に追われ、お尻を噛み付かれ泣きながら家に帰った事、自分の家族の事、今の仕事をどう思っているか。

案外、この人はとっても気が優しい人物なのだろうと確信していた。時間の経つのも忘れ、会話に夢中になった。少し気が緩んだのか、調子に乗って手を挙げ日本酒を注文していた。

ふと隣のテーブルに若い女性が座るのが分かった。大きな声を上げ、騒ぎ立てる。数名の若い女性は大学生くらいだと思う。

その中の一人の女性がこちらをチラチラと見る。玲子は視線を合わせないようにしたが、その女性は秋山のほうへ視線を投げかける。それに気付いた秋山は一瞬驚いた表情を見せたが、手を軽く持ち上

げニコツと笑った。

え！ 誰？ この娘は？

私も少し酔いが回っていたが、女性に絡むこの程度のことではまだまだへっちゃらだ。しかし、どこかで見かけたことのある女性だろうか？

気がつくとその女性はするすると秋山にすり寄るとかれの手を握り、見つめているではないか！ いったいどういうこと？ 頭が混乱しかかっている。決して酔いのせいではない。目を疑う。

彼はまったく気にも留めない素振りで彼女を見る。見つめている視線が絡み合うようにも見受ける。優しくも妙な二人。私がおかしいのか？ どう見ても彼の態度は不自然だ。この男、私の目の前で他の女と手を握る。そう言えば、この前の喫茶店の時もそうだった。私がいることを忘れたかのように。あの時の情景が再び甦る。ふつふつと沸き立つあの怒りにも似た吐き気。決してお酒の性ではない。玲子は右手の拳を握り締め店の天井を見上げる。少しクラツときた。もしかして酔いが回っているのかしら。そんな筈はない。このくらいで酔うものか。

「何なの！」そう短く呟くと秋山を見据えた。

頭に血が上り右手を振りかぶるとそれから……、薄暗い景色が広がる。

記憶が薄れる中、秋山が仰向きに倒れるように一瞬見えた。

「ううん、んん……」気付くと揺れている。周りが上下左右に揺れる。

ここはいったい？ どこ？ 身を起こした。――あたたた。頭が痛い。すると拳に痛みが走る。思わず、左手で右手を覆う。

ここはタクシー？ いったいどれくらい経っただろうか？ 頭が痛い。気がつくとも横に秋山が頷いている。しかも彼はハンカチで目を抑えている。

「あ！」あたたた。

「ど、どうしたんですか？」

「止めて！」

「え？」

「いいから、止めて」秋山へ体当たりをしてハンドルを握る運転手の背広の左肩をグイグイと引き寄せる。

「お客さん！　なになに、勘弁して下さいよ」タクシーは蛇行運転して走る。

「早く、止めて頂戴！」

二人の体が急に大きく揺れた。タクシーの運転手が玲子の騒ぎに狼狽えてハンドルを左へとグイと切った。それも二人の状態も考えず行動をとった。

タクシーは道路路肩へ音を立て停車。後続車両に迷惑をかけたようだが、幸いにして無事停車。玲子は後部座席にいた秋山を払いのけ、タクシーを転げるように飛び降りた。呼び止める秋山の声を無視してその場を後にし、逃げるように歩き始めた。

毅然とした態度で勢いよく歩いたが、途中で気分が悪くなった。

秋山のその後はどうなったか分からない。ただ、どうしてもムシヤクシヤとした気持ちはどうにもできず歩いた。

恐らく十分と歩いていないだろう、息が切れてきた。それに気分も悪い。吐き気を抑えカタカタとさらに歩く。舗道にあるコの字型の鉄パイプ椅子を見つけると腰掛け何度も肩で息をつく。吐きそうで吐けない中途半端な状態。心は最悪だ、と思った。

その場で俯いていると涙が溢れてきた。あの時の気持ちと一緒に。何がよ。あの男は見せかけの態度で騙している。あの男の本性はただの女垂らしのオタク野郎だわ。やっぱり騙された。

椅子に座り、項垂れているとなんとも嫌な空気を感じた。じっと見られているような気がする。息を呑みその場をそそくさと離れた。夜の繁華街は酔った女にとってカモだ。身の危険を感じ即刻その場を離れた。

何も無くて良かった。

家に帰りつくと玄関のドアを背にして胸を撫で下ろし何度も大きく肩で息をした。不安とお酒の酔いで息が荒かった。

「レイちゃん？」ビクツとした。何に驚いているのだろう。部屋の奥から聞こえる声はいつもの聞き覚えのある声、母の声。日頃、こんな時間まで起きていることはそうそう無かったので、その声が訝しげに思えた。

居間から母がソロソロと近寄る。

「ああ、ただいま」母の顔を一瞬見て靴を脱ぎながら返事を返す。

「どなた？」

「え？」なんて？ 今なんて言ったの？

「あなた誰？ 人を呼ぶわよ！」

「え？ 私よ！」パンプスに手をかけたまま母の目を見て一瞬固まった。

「ああ、あ、どちら……」首を傾げて私を訝しそうに見る。

「レイよ。玲子！」大声を出して言う。母の目を覗き込み、声を荒げる。「おかあさん！」

暫く二人に沈黙が続く。

すると母は「はっ」と短く息を吞んで、自分の記憶の断片が繋がったかのように手を口に当てる。するとがつくりと項垂れる。

母は俯いたまま「ああ、そうみたいね。ごめんね」自分の記憶の曖昧さにしょ気ている。

「ううん。いいのよ」作り笑いだとわかるが、すぐに母の肩を支え、ベッドへとゆつくりと促す。母は目を瞑り静かに呼吸をする。

遠い昔、怖い夢をみて夜中に目が覚めた。

現実とも夢とも区別が付かない中、辺りを見渡した。――母が居ない。なおさら不安が湧き立った。

布団から跳ね起き隣の部屋に行くと母の後姿。私の体操着に名札を縫い付けている。その母親の背中に纏わり付き思わず泣き出した。私に気付いた母は体操着を横に置くと膝に私を抱えた。そのまま私の髪をゆつくりと撫でてくれた。いつしか心地よい眠りに落ちてい

く。柔らかな母に包まれて眠る。

「――レイ」

「え」

見下ろすと母が私を見ていた。

「どうしたの？」

「いや、あのね……、お母さんのことは気にしなくていいのよ。あなたはあなただから」

「何よ、突然」

「レイを邪魔したくないのよ。レイの人生はレイのもの」

「ええ、わかってる。どうしたのよ」

「いや、言いたかったの」

「そお、うん、分かった」

「なら、いいの、――疲れたわ」

「そうね、おやすみ」

「レイも早く横になって頂戴」

「わかってる」そう言うとき母の肩まで布団を引き上げる。

――母の寝息を聞くと部屋を出て居間のソファに身を投げる。

肩に手を乗せ、首を回す。まだお酒が残っているようだ。

「はあ……」今日は最悪。それにとっても疲れた。

目を閉じるとゆらゆらと酔いで回る。頭の奥が痺れていく。

遠くから声が聞こえる。……玲子さん！……玲子さん！　もうい

いわ、駄目……。止して……。いい加減に……。「あ！　嫌だ！」

大声を出した。

自分の呼び声で不意に跳ね上がりソファから落ちそうになった。

夢だったのだ。

痛っ！　思わず右手に痛みが走る。肩にかけた手を降ろし、甲を見てみる。どこも何ともないが握ると痛みが走る。拳に何かしら感触が残る。そう言えば、秋山さんの目を覆っていたハンカチが急に思い出された。

もしかして……？　私、彼をこの手で？　まさか……。

けれど憶えていない。気がついた時、タクシーの中だった。何故だかとても言いようのない気持ちで、恥ずかしくて、その場から逃れたくてつい、飛び出てしまった。けれど、確かに手応えがあった。ガツンとした鈍く重い感触が残る。

台所にフラフラと歩み寄り、適当にグラスを選び蛇口を捻る。その場でゴクゴクと喉を鳴らした。

それからもう何ひとつ考えなくなかった。

とにかくリセットしてしまいたいのが、どうすればよいものか考えが浮かばない。できれば早くあの『ハッピーパートナー』とも縁を切り、あの男とも絶対に会わないように決めた。何を思ったか、思考がまともに働かない中、バッグを弄り携帯電話の『秋山』と記憶してあるアドレスを消去した。後は『ハッピーパートナー』も同じ、消去してそのままソファアヘへと携帯電話をを放り投げ倒れこんだ。後にして思えば、携帯電話のアドレスを消したからといっても何も縁は切れないのに。

およそ――、恐らく、一時間くらいだろう。

玲子は回想しながら駿平を前にして話し続けた。

胸に痞えて言いたかった不満をぶちまけたと思う。我を忘れて荒げた口調で前後なくぶちまける。ふと気付くと目の前の男は気圧され息継ぐ事も忘れているようだった。それに右手がまだ痛い。気付くと力を込めた右手でテーブルを何度も叩いていた。話し出したら止めどなく次から次へと続けた。

玲子の回想を黙って訊いていた駿平は、冷え切ったコーヒーを啜るというより、一気にゴクリと喉を鳴らし飲み込んだ。

「あの……」玲子の話が一応の終了と判断した駿平は躊躇いがちに切り出す。

「矢倉さん。秋山さんのこと、勘違いをしていませんか……」

「え？」

「お聞きになっていないでしょうが、秋山さんうちへ来られました」

「そうですか、で？」一応、冷静に頷く。

だから、それがどうしたというの？　いくら紹介といってもこんな事も人に相談するなんて……、それに自分の事を決められない男って、どうかしら。

「ええ、秋山さんのこと。本当はそんな人じゃないですよ」

「そうかしら？　あなたは会社の立場で言い訳を並べ、物事を治めようとしてませんか？」

「と、とんでもないです。そんなことは無いですよ」駿平は手をひらひらと横に振り、とんでもないと否定をする。少しばかり狼狽する。

駿平の反応に疑念の眼差しで見遣る玲子。

すると思ひ余って言う駿平「どうか、私の話を聴いてください」テーブルに両手を乗せ、眉間に皺を寄せ、訴えるように玲子を見つめる「秋山さんから事細かに訊きました。すべての疑いが晴れる訳じやありませんが、責めて、いや、少しでも聞いて貰えないでしうか？」言い訳を並べる為に来た訳じゃない。ここで秋山さんのことを釈明しておかないと誤解が解けず、すれ違いのままとなるだろう、と強く思っていた。

「いえ、もう結構です」

『沢山の男と女の幸せの数だけ喜びを味わえる。そんな男と女の背中をそっと押してやるのが俺たちの仕事』と課長の台詞が思い浮かんだ。会社の立場もあるが、二人にとってきつと後悔する事になる。今ここで誤解を解いて俺がこの二人の背中を押さなきゃ。課長の台詞、俺の背中も押しているようだ。

玲子は駿平から窓へと視線を移す。暫くそのまま遠くを見遣る。肩を上下し、長いため息を落とすと駿平へ振り返る。すると駿平から視線を店奥へと移す。

ウエイトレスがこちらを見ていたように目が合う。

「すみません。お水、お願いします」

彼女の呼び声に気づいたウエイトレスがツカツカと歩み寄り玲子

のグラスへと冷水を注ぐ。その注がれた水を一飲みするとゆつくりとグラスをテーブルにコトリと音を立て置いた。

「どうぞ」ボソッと話す。

「え？」

「だから、どうぞ。お話下さい」冷静に駿平を見る玲子。

「あ、はい」玲子の態度にすこしドギマギして返事をする。

駿平はこめかみをポリポリと掻いて呼吸を整える。

「え……、まず、ひとつ。喫茶店でのこと、覚えていますか？」

「え、ええ」やはりそのこと？ 何だか思い出したくない事だ。

「そうですね。うん。――あの時の状況は、確かに秋山さんの誤解を招く行動でしたよね。まあ、訊くところによると硝子にへばりつき、店の中を食い入る様にされた行動ですが――」

「あ、あの時のことですか」

「ええ、『あの時』のことです」

「――はい」玲子が不貞腐れ気味で返事する。

いったいあの時の話を持ち出しているまさら何を説明しようと言うのだろうか。思い出しただけでも腹立たしい。

「実はですね、あの店でバイトしている女の子、不適切なバイトを強いられていたようでして」

「え？ どういうこと？」

「いや、だからですね、あの店でバイトしている娘を知ってたらしく、あの店、以前から警察もマークしていたらしいのです。それで」

「あ、あの、すみません。言っている意味がわからないのですが――」駿平の言葉を切るように言う。

「あ」一瞬、一時停止した「すみません。そうですね。じゃ、最初から」一時停止した話を巻き戻して、もう一度最初から駿平は説明を再生した。玲子は駿平を見据えた姿勢となる。

「実はですね。秋山さん、障害者や児童福祉の徘徊、非行防止ボランティアの活動の会に参加していました。それが毎週土曜日と日曜

日の夕方から繁華街を市の職員の方と巡回しているらしいのです」

「はあ」

「秋山さんの参加活動している児童非行防止会は総勢五十名で構成されています。十名程度で班を作り、主に児童施設の児童がアルバイトをする際に法に触れるような際どいアルバイトや違法な労働に就労してないか、等を巡回、監視してそう言った仕事場へは指導を順次していくらしいみたいです。秋山さんは主に家庭に問題を抱えた若年層の高校生が担当らしくの巡回エリアは台東区から秋葉原地区が中心のようです。仕事を終え夕方から深夜の時間までみたいですよ。大変ですよ。いくらボランティアといえ、仕事を終えて四、五時間ほど歩いて周り、時として身を危険な状態に晒すことさえあるようです。私には到底真似出来そうにないですが。とにかく非行防止ボランティアのようなものらしいですよ」

そんなことは、あの人の口から訊いたことはない。まあ、そこまで話すことがなかったといえ、そうかもしれない。

「それで、以前からマークしていた店に秋山さんの知っている児童養護施設に入所していて行方不明の娘を発見したらしくて、つい慌ててとった行動が周りから異常にとられてしまったよう。偶々通りがかった時、あの時の――、『メイド喫茶』ですよ。まあその後、警察の手も加わり違法就業店舗として摘発されたみたいです。結果、その店は営業停止ということみたいです。それはそれで良かったと思うのですが、秋山さんは不謹慎な人物と勘違いされたままですよ」

考え込んでいる玲子の目を慎重に覗き込んだ。

「あなたもそう思われた、と。いやそう勘違いされても仕方ないような行動だったらしいと。本人がその後、反省をしていました。しまったな――、とね」玲子を見ると嗜めるように言う。

「え、あ、そう、ですか」玲子が罰惡そうに頷く。

メイド喫茶に明け暮れるオタク男と勘違いしていた。大人しい人柄からオタク男、実はオタク男ではなく心優しい男性へと、自分の

見る目がない。早合点してほんの少しのことに気を取られ本質を見抜けない。情けない。でも、でもでもそのくらい話してくれた方がいいじゃない。だって人生を共にしようか、と考えるほどの付き合いをしていたのだから。

「それから、居酒屋でのこと、――ですが」困惑して考え込んでいる玲子への俊平は真摯な姿勢から一変にして形成が逆転したような不適な顔付きで話す。

「まだ、なにか」玲子は駿平の顔へと目を向けると駿平の視線に気づき強張らせた。

追い討ちをかけるように駿平は玲子をじっと見る。

身を引き、怪訝な表情を浮かべる玲子。

何よ？ 何よ！ 私のほうが悪いとでも言いたいのか？ いったいこの男は和解に來たのか、それとも脅迫めいたことを態々言うためにここまで來たのか。いったい私がすべて悪者とでも言いたい訳？

「ええ」と俊平が一言。続けて咳払いをつく「居酒屋の出来事が極め付けのようですよ」

「ああ」ああ、あの時のこと？ あの時のことはあまり記憶が定かではない。気がついた時、タクシーの中で目を醒ました。私は彼の膝にうつ伏していた。いや、それともひっくり返っていたのだろうか。とにかく、恥かしい状態だったに違いない。居酒屋での記憶があまりなく、どうやって彼が私を連れ立ったことさえわからないのだ。あられもなく酷かったに違いない。店の人からどんな視線を浴びていたのだろうか。或いは最低なのか、とにかく女としては羞じるべきなのだろう。記憶がないことも。

「あの時は、『メイド喫茶』どころか、相当な失態と本人は悔やんでいました。なんせ秋山さんとお会いしてお話を訊いて直ぐに分かりました。――一発食らったことも」

「え？ あれも？」驚いてとても知らなかった風に業とらしく答える。

――ええ、本当は覚えているわよ。けれどあの時は、彼のあの応

対。――だって変でしょ！

「言って良いのか、偏見ではありませんが、彼女を見た瞬間に秋山さん、ピンと来たようです。少し知的障害を持たれた娘さんらしく秋山さんへ頼り、擦り寄ったみたいですね。まあ、普通ではそこまですみ取れない機微な状況も経験からしてなんとなく、らしいようですよ」

そうかな、と思った。いや、そこまでは私も読みきれなかった。けれど、あれはないでしょ！　だって私が横に居ながらあの態度はないでしょ！　あの女。彼の横ににじり寄って来て座るとじっと目を見つめる。その眼差しは彼に何かを求めるようで。誰だってあの状況をみれば勘違いするはずだわ。

「そ、そうですか。だと、思ったのですけど」玲子は気持ちを押し殺し無理やり相槌を打つ。

「そうなんですよ。良かった！　じゃ、あの時のこと――」駿平は残りのコーヒ―を飲み干す。

彼女、本人を目の前にして言い難いことだが、詳しい説明をしないと。それも、今ここで言わないと――。けれど、さきほどからの感じからしてうまく行きそうだ。ならばここで、と。

「いや、あの――。あのですね」駿平は秋山から訊いた状況を説明し始めた。恰も彼女が事の事態を呑み込めたと判断しているものと思いきわずけに話す。今度は掻い摘む事無く、最初から細かく話し始める。それでも時折、玲子の表情を途中、途中確認しながら。

「……」

わかった、わかったわよ。もういいわよ。どうせ私が短気でそっかしくて勝手に思い込んでしまった、もういいわよ、と心の中で叫んでいる。頭に浮かんだあの時の状況、かぶりを振り、払いのけようとする。

あい反する玲子の気持ちを察していない駿平は更に説明を続ける。「……」堪えてを聞き流す。けれど、じわじわと怒りが胃袋、喉元を逆流して一気に駆け上がりそうになる。もうこれ以上この場に居

たくない。立ち去りたい気持ちが胸を衝く。

はあ、息苦しい。呼吸が荒くなる。思い出してきた。――あの時のことを払いのけようとしたのに。なぜ、そこまでして掘り起こしたい訳？ それって、あ、あの男の言い分を全面に受け入れ、私の気持ちは？ じゃ、どうでもいい訳？ すべていい訳じゃない。

とにかく一方的な言い方で、もう、我慢ならない。

突然、『ギーツ』と椅子の素引く派手な音が耳を衝く、玲子は駿平の話を中断したく思わずその場を立つ。

「え？」玲子の突然立ち上げる行動に思わず仰け反る駿平。

「もう結構です！」眉を吊り上げ、駿平を見下ろしたまま叫ぶ。

虚を衝かれた。形相と荒げた声に驚いた駿平は玲子を見上げ凝視した。駿平は思わず周りを見回した。視線をいっぺんに集めていると思った。まずいな――、言い過ぎて拗れた？

「だからもう、結構です。そんなに言われてまであなた方の紹介される人と会うつもりはありません」きっぱりと言い切った。

その投げやりな口調の玲子に向き直り、「ちょ、ちょっと待ってください！」周りの視線なんてどうでも良いと両手で宥める。

駿平を見下ろす玲子は鼻の穴を膨らませ、睨みつけたままだ。

「とにかく、ちょっと待ってください。も、もう一度、話を聴いて下さい」

対峙する二人は暫くそのままだ状態だった。

「とにかく、座って下さい」

はっ、と玲子が我に帰った。

駿平の言葉で我に帰る。

気がつくとも周りの人達の視線が注がれている事に気付く。顔が真っ赤になっていることが自分でも分かるくらい恥ずかしくなり、椅子に慌てて座る。

「すみません。取り乱して」俯いて言う。

玲子は駿平の顔、周りへの視線、何処にも顔を向けられず、視線をテーブルに向けたままじっとして固まってしまった。

するとツカツカとウエイトレスが冷静な顔つきで歩み寄り、空になったテーブルのグラスを新しいものと取り替えた。冷静かどうかは分からないが、足取りからして恐らく冷静な表情に違いない。駿平の指示なのか、こちらの様子を監視しているのか、絶妙なタイミングである。

ウエイトレスがその場を離れると、どうぞ、と駿平が勧める。

少し間を置いから、新しく取り替えられたグラスへと玲子の手が伸び、乾ききった喉へと流し込まれた。それもゴクゴクと駿平にも聞こえるほど喉が。

「すみません。取り乱して」俯いて謝る玲子。

「あ、いえ、私が気持ちを察せず一方的に――、申し訳ありません」頭を下げながら玲子に詫げる。

ふう、とひと息つくとし少し落ち着いたのだろうか、玲子はバッグからハンカチを取り出し、額を拭いてヒラヒラと上気した顔へと風を送る。

「そうだ！」玲子は何かを思い出したのか、思わず呟くと腕時計に目を落とす。

「え？ どうしました」

「あ、すみません。いえ、大丈夫、大丈夫。気にしないで」

彼女に一瞬焦りが見える。恐らく午後の予定の時間を気にしていると言うことだろう。

「あの、今日この辺で止めておきましようか？」眼鏡のつるを押し上げ、駿平は確認するかのように言う。

「はあ、でもいいです。折角だから――」少し震える口調で言う。

不意に駿平の携帯電話が振動した。駿平は少し驚いたが、携帯電話を取り出し、目で玲子に了解を貰う。

手刀を作ると「すみません。ちょっと」そう言い終わらぬうちに駿平は立ち上がり、一礼したかと思うと化粧室へ小走りで向かう。これでもかと、しつこく携帯電話は鳴り続ける。

化粧室に入り、鍵と落とすと慌てて受話ボタンを押す。

「もしもし、はいはい」

——おい、おれおれ。

「お疲れ様です。で？」

——で？　じゃないだろう。上司に向かって、で？　は。

「ああ、ですね。で？　そちらは大丈夫ですよ？」

——もう、まったく。ああ、わかった。ちゃんと任せておけ。ワッ！　ちちち。煙草が——。

いや、やっぱり心配だ。

「ちゃんと？　本当に？　大丈夫ですか？」　何度も念を押す。

——手筈は大丈夫だ。なんだ、おまえ、俺を信用していないのか？

「はい」　元氣よく答える。いっそのこと奈津美の方がまだましかも知れない。あの女なら抜かりなくこなすと思う。

——は？　なんと？

「はいはい、大丈夫ですよ？　とにかく頼みます」

——なんか、嫌だよな。ああ、大丈夫だと言ってるだろうが、何度も。しかしな、そう、そもそもお前の考え通りにいくか、どうか……。

「じゃ、と言うことで」

——おいおい、お……。

いきなり携帯電話の通話ボタンを切った。課長の話は無駄に長くなりそうで、ほどほどのところで切る。本当に大丈夫なのだろうか？　しかし、いまさら奈津美には頼めそうにない。ましてやあの女になんて、今更あり得ない。

一抹の不安を抱えながら、駿平は携帯電話を切るとすぐに化粧室から飛び出し、テーブルへと向った。

駿平は席に着くなりグラスの水を飲むと「——それですね」　先ほどの続きを話す。

「はあ」　落ち着きない、気のない返事を返す玲子にこれ以上の話し合いは無理そうだ。

「止めておきましょう」

「え？」

「いや、このくらいにしておきましょう」

「はあ？」駿平の一言に拍子抜けした玲子。

「うん。今日はこの辺で。午後から予定があるんでしょ？」

「ええ、まあ。――そうですか」

「じゃ、そういうことで」唇の両側を吊り上げほくそ笑む駿平。

「分かりました。先ほどの話、もう一度考えさせて下さい。なんと
言うか、今の自分自身の気持ちを整理したいので」

「そうですね」俊平は呟くと自分の腕時計を見る。

「あの……」

「なにか？」

「伝えて下さいあの方へ」

「え？」

「今度、直接私にすべてを話して下さい。そもそも、こんな大切なことなのに代理を立てるなんて。本人の口からお聞きたいです」

「あ、はい。そう伝えます」しっかりと返事をする。

「待ってます」そう一言だけ言い残すと玲子は席を立つ。今度はゆつくりと。それからバッグを抱えると中から財布を取り出した。

「いえ、結構です。ここは私が」と手を持ち上げ、玲子の行動を制した。

「そうですか、じゃ」玲子はその場で一礼し、駿平に丁寧に礼を述べると店を出て行った。

どう、解釈したら良いのだろう。うまく行ったということなのだろうか？ よく分からないが、恐らく悪い状態は脱したと思って良いだろう。今の説明で秋山さんのことを少しは理解してくれた筈。彼女は取り乱したが、店をでる時の後姿に落ち着きを感じとった。なぜか、それだけでもかなり解決、いや前進したようにさえ思えた。後は課長が――。

駿平は男と女、特に女性の心理、思考を理解するのはまだまだ自分にはわからないものだな、と腕を組む。

懷から煙草を取り出し、火を点ける。深く長く胸いっぱい吸い込むいつものクラツと軽い眩暈がした。首をコキコキと鳴らすともう一口吸う。

息苦しかった。ここへ着てから相手を気遣い、煙草を抑えていた。灰皿が目の前にあるにも拘らず、堪えているのが辛いこと。それでも多少は目途がついて良かった。

ふと窓へ目をやる。道路を挟んだ通りの向かいにある花屋が目止まる。

白髪の老人が店の店員から花束を受け取っていた。定年をとうに迎えて、社会を卒業して、十分に人生を知り尽くした男が照れ笑いとも取れる笑顔で頭を下げる。店員と二人交互に頭を下げる。ふと、どちらが客か分からないくらいだ。

俺もあの年くらいになれば、少しは女の気持ちが分かるいい大人になれるのだろうか。その前に課長の世代を超えなきゃならん。ただ、あのおやじみたいにな性格になると絶対にあの老人のようにはない。絶対そう思う。

駿平はコーヒーカーップに手を伸ばそうとしたが、飲み干して残ってないのに気付き手を引いた。その手で吸い差しを灰皿におくと懷から携帯電話を取り出した。

素早く携帯電話からメールを作って山根へ送信した。

『課長、今向かいました。よろしくお願いします。大丈夫ですよね？』

予め、彼女との約束と予定を聞き出していたことだから、先回りして課長の確認を取るだけだ。少々、課長には不安が残るが。

もう一口煙草を吸うと紫の煙を天井へと吐き出す。半分ほどになる煙草をゆつくりと灰皿で揉み消す。

するとツカツカとウェイトレスが歩み寄ってくる気配を感じた。灰皿に目を向けていたがハッキリと分かる。手が伸びてきて目の前のグラスを引くと代わりに新しいグラスがコトリと置かれた。その瞬間思わず、ウェイトレスの胸元あたりのネームカードに目が行く。

『御厨』、どこかで訊いた名前だな。何処……。あ、そうだ、奈津美と同じ苗字だ。ついでに顔まで見届けようと思ったが、既に後姿しか確認出来なかった。まあ、良いか。同じ苗字だからといってまさか……。敢えて止しておこうと思った。それにしても奈津美とは大違いだ。

第二話（応援） 5

5.

玲子は喫茶店を出て小走りで駆けると大通りへと抜けた。病院から言われた時間に少々焦りがあったがすぐに運よくタクシーを拾えた。

「星和総合病院までおねがします」開いたドアへ転げ込みながら運転席に向って声をかけた。

はぁ、息が切れた。深く深呼吸をした。

私も分からず屋じゃない。

改めて思い巡らせた。

あそこまで詳しく話を訊いて、それに彼の気持ちが一……。だから、本心を訊いて。そう、彼の本心が素直な気持ちで訊きたい。今はそれが一番だと考え、なにかしら心を決めようと思った。そのほうが吹っ切れる気がする。

けれど、本当に彼は自分の口から語ってくれるだろうか？ 時折、ハッキリとしないところがある。歯切れも悪く自分に自身を持てずに俯いて不安な表情をする。そんな仕草にイライラする自分がいる。決してせっかちな方ではないが、やはり気にする。もう少し男らしく頼りがいがあれば言うことはないのだけれど……。やはり、贅沢なのかしら。

そうこう考えているうちにタクシーは目的の病院正門を潜る。タクシー乗り場に停車すると料金メーターが丁度、一二〇〇円を表示していた。玲子は支払いを終えると後部ドアが開く。降りようとすると待っていたかのように看護婦に支えられ、杖をついた腰の折れた老女と目が合う。歳からして七十をゆうに超えているだろう。

玲子は目が合ったままタクシーを降りる。看護婦がタクシーの運転手に向って老女が乗り込むことを告げる。看護婦に支えられた老

女がヨタヨタと後部座席に乗り込む。『ボタン』と音を響かせ閉まるドアを見ながら玲子は老女を見遣る。すると笑顔で頭を下げる老女を乗せたタクシーがするすると発車した。

「すみません。急かして」看護婦が玲子に向って頭を下げる。

「いえ、そんな――。おばあちゃん、まだまだお若いですね」手をヒラヒラとさせ、愛想笑いする玲子。

「それでも、もう九十ですよ。ああ見えても」

「え！　そうなんだ」

「それじゃ」と言いながら看護婦は、もう一度お礼を述べてその場を離れる。

誰とも知らない老女を乗せたタクシーを見送りながら、思い描いた。その母親の笑顔が浮かぶ。あの年齢まで元気に記憶を保ちながら生き永らえて欲しい。

そうだ、腕時計の針に目を落すと十三時を少し回ったところだった。予約しておいた担当医師が気を利かせて待っていてくれると言ったがいつも甘えてばかりはいられない。気持ちに有り難いからなおさら急がなければ、とバッグを脇に抱え、走った。

カタカタと小刻みにヒールの乾いた音を響かせ、総合案内のカウンターを越えて行こうとした時、急に呼び止められた。

「矢倉さん！」

何？　誰？　私を呼んだ？

「矢倉さん！　矢倉さん！」

「はい？」思わず、その場に突んのめりそうになりながら急停止して声のする方へ振り返る。

「すみません。ちょっと待って」

誰だろう？　中年男がこちらへ向って叫んでいる。総合案内カウンターの前、自動販売機の前で手をヒラヒラとし、こっち、こっちと手招きしている。

見覚えがない、というより誰？　訝しげに中年男を見る玲子。するとこちらへユタユタと走り寄る中年男性。左手には紙袋を持

ち、歩くたびカサカサと音がする。

誰？ 記憶を呼び起こしても、全く持って思い浮かばない。

「いや、良かった気付いて。ほんと危うかった」クシャクシャのハンカチを額に当て、首から顎当りを拭う。

冷房の効いているはずだが、吹き出る汗？ 油？ どちらでも良い。それよりいったい誰なの？ それに急いでいるところに何の用かしら？

「あの、どちら様、ですか？ 私急いでいるんですが……」いったい何なのよ？

「お、そうだった。失礼しました。こういう者です」右手に持つハンカチへ左手を添えて丁寧に折り畳むと、紙袋を持つ左手でズボンの左後ろポケットへと終おうとしたが、なかなか上手くいかない。ハンカチを取り出し、今度は右手に持ち替えズボンの右後ろポケットへ捻じ込んだ。

ああ、じれったい！ さっさとして頂戴。大体紙袋を持つ手と反対の手を使えばいいじゃない。

今度は背広のあちこちをパタパタと叩くと、お、と気付いたのか胸ポケットへ左手をまたもやも差し込もうとしたが、慌てて右手で左胸ポケットへ差込み名刺を取り出し、やっと玲子に差し出した。名刺はヨレヨレに折れ曲がっていた。何とも受け取りたくないようだが止むを得ず片手で受取る。

『ハッピーパートナー 山根』。肩書きは課長である。大丈夫かしらこの人？

玲子は山根に向って、思わず驚いたかのように「ああ」と頷いた。またもやハッピーパートナーか。で、何の用事なのだろうか？ さきほど野呂という担当と話をついたはず、何もここまで押しかけてくるなんて。いったいどういうつもりなのだろう。

「で、何か？」溜息をつきながら言う。

「ええ、少しばかり」二カツと歯茎を見せ、手を揉みながら言う。そのまま山根は横に首を振り、視線を向ける。総合案内カウンタ

ーのその後ろにある待合室。その前に横に備えつけてあるベンチに座る二人の女性。一人は中年の女性、もう一人は若い。女性というより、女子高生呼んだほうがいいかもしれない。

こちらの視線に気付くと中年の女性が女子高生に向って頷いた。すると女子高生がスッと立ち上がる。続いて中年の女性も立ち上がると直ぐに女子高生の手を引く。女子高生は突っ立ったまま、首を折り、ぼんやりと遠くをみるような、焦点が合わないような視線をしている。中年の女性がもう一度、女子高生に向って頷くと少し強引と言えるようだが、手を引いてこちらへと向ってきた。

女子高生と思えたが、近づいてみると中学生くらいの子供と思う。その手を引く中年女性、二人にも見覚えはない。いったい誰なのだろう？

対峙するように目の前にいる二人と山根へと向き合う。

すぐに中年女性は玲子に向って何も言わず深々とお辞儀をする。その中年女性をつい訝しげに見る。

「あー、あのー」

「あ、そうでした。この方、覚えていませんか？」山根が女の子を紹介した。

「いえ、どこかで遭った？」女の子を覗き込むように問いかけた。首を傾げる女の子がニコリと笑う。そう言われてもこの子に覚えがない。

「あの、私と何か？」山根に向って質問した。

「そうか、普段の格好じゃ分かり難いかもね。じゃ、こうしたら、どう？」

山根は左手に持つ紙袋からガサガサと衣擦れの音を立て白、黒と膨らむ衣装を取り出した。その衣装を自分の胸に当てて見せた。

「うほん！」中年女性が山根を見ながら咳払いをする。

「おっと、失礼」その衣装を女の子の前から全身と重ね合せた。暫く考えた。その間の後「え、あの時の？」玲子はふいに思い出した。もしかして、それって『メイド衣装』？

そう、そうだ、覚えがある。

そうだ、あのメイド喫茶の衣装を鮮明に思い出した。秋山が店のガラスに張り付き、凝視してみていた。私も傍から秋山の横顔とメイド衣装を着飾った女の子を何度も見比べるように見たからだ。

「え！　なんで？」なぜここで？

「思い出しました？」うんうんと歯茎をむき出し嬉しそうに女の子の後ろから頷いている山根が妙に危なっかしい中年に見える。

横にいる中年の女性がメイド衣装を少し乱暴にグイグイと引き寄せると気付いた山根が急に真顔になる。

「うほん！　実は、この子、あなたが秋山さんと一緒に行ったメイド喫茶で無理やりアルバイトさせられていたのです」

「すみません。私はメイド喫茶には一緒に行っていません！　店の外から店内が見えただけです！」直ぐに言葉を返す。

「そ、そうでした。失礼、失礼」

「で、うちの野呂から訊いたでしょうが、この子を救ったのですよ。秋山さんが」

「ええ、まあ。一応そう訊きました」

「だから、お分かりでしょ！　秋山さんは、正義感溢れる人なんですよ」

傍で山根の話を訊いていた中年女性が口を開いた。「これでなんとか誤解をとけますか？」

「ええ、まあ」もう大体のことは分かっていたから、敢えて言われなくても彼の人柄はだいぶん分かってきている。だから大丈夫。

「秋山さんは日頃の行動は頼りないかもしれませんが。それにオドオドするところがあるが、障害を持った人物に対しては人並み以上の接し方をする方です。好奇の目を持つ事も無く自然と接している。介護という職をするべく人物なのです。だから……」

「ええ、ありがとう。そこまでもして、あの人を――」

中年女性は深く一礼した。改めて二人は自分たちの紹介をして日頃の秋山さんのことを話した。

しかし、良かった。彼は殴られたことについてはあまり触れなかったと思う。それは気分を害してつい酔った勢いで彼を殴ったことだ。全く記憶が無い。そんなことはない。サオリが言う酒癖が悪いことを多少は知っていたのだから私も十分に悪かった。

もう十分だわ。玲子は、改めて秋山の全体の包むような優しさに惚れ直していた。ただ、これからもそんな一面をもっと理解してあげなきゃね。

あっ、いけない！ 母の担当医と面会だったことを急に思い出した。腕時計を見る。とうに約束の時間が過ぎている。

「すみません。私、行かなきゃ！」

「そうでしたね。引き止めて申し訳ありませんでした」マイペースに頷く山根。

「じゃ、私。今度ね！」素晴らしい終わらぬうちに走り始めていた。

エレベーターに向って走る。タイミングよく開くドア、飛び込もうと一瞬振り返ると山根が中年女性に叱られているように見えた。

あの、山根とか言う課長、本当に大丈夫かしら。

第二話（応援） 6

6.

壁の時計が十二時を少し過ぎたのに気付き、書類を纏めあげ、席を立とうとした。

昼食に行こうと席を立つと同時にタイミング良くというか、悪いとか目目の前の電話のランプが点滅を始めた。追いかけるように電子音も喧しく鳴り始める。

はいはい、心で呟いて受話器に手を伸ばす。どうせ、あの女どもは、と毒づきながらそれでも振り返る。サッと辺りをみるが、やはり誰も電話を取ろうとしない。

やれやれと駿平は溜息をもらすと「はい、愛のキューピット。ハッピー♪ ハッピーパートナーです」嫌でも営業の声で応える。やっぱり馬鹿げている。

——もしもし。

「はい、こちら愛のキューピット。ハッピー……」

——野呂さん！

「あ、はい。野呂ですが」

——あの、矢倉です。

「あ、矢倉さん！」

——やっぱり、野呂さんでしたね。なんとなくそんな声だと。

「そうですか？」

——ええ。

矢倉さんに会ってから、あれから二週間が過ぎた。秋山さんから連絡はないが、彼女からの連絡は、久しぶりだった。

あの後、すぐに二人がどうなったかを知りたかったが、課長が「止しておけ。そっとしておけばいいんだ。あとは二人が決めることだ」と言われたことで連絡をしなかった。それにあの女から言われ

たことが一番引つかかったからだ。勝手にお節介しないで！ 何が『お節介しないで』だ。大体何もしないでその言い草はないだろう。だが、そうかも知れない。男と女の背中をそっと押してあげれば、それで十分なはずだし、世話焼きすぎても。

——ありがとう。

「え？ ああ、はい」納得していてもあの女のことを思い出しただけで腹立たしさが込上げ、しどろもどろになりかけた。

——あの、ありがとうございました。あの後、改めて彼から連絡を貰いました。会ってじっくりと話し合う事ができ、お互いの関係は一層深まりました。皆さんに彼への勘違いを解いて貰ったことがとても大きかったです。

「あ、そんな事無いですよ」

——いえ、皆さんのお陰です。それに藤原さんにも大変お世話になりました。何度かお会いしました。その時に彼の事を更に詳しく教えて貰いました。そうだ、藤原さんいます？ お礼を。

一瞬、ガクツと来た。なんと？ 藤原のお陰？ あの女がいったい何をしてくれたと言うのだ？ 今回の件は俺と課長とで仕組んで遣り終えた、と思っていたのにあの女？

駿平たちの仕組んだことが茶番劇で、取り越し苦労していたことを思い知らされた。

「あの、藤原は今、不在で……」

——あれ？ 訊かれてないのでですか？ 母の事も彼の事も。

何の話だ？

「すみません。一体？」

——いいえ、こちらこそ。母の病気のことで日頃、精神的に私、参ってまして……。実は先週、母を病院に連れ立って行った時、病院で藤原さんと彼と一緒に待っていてくれました。突然だったのですが、母の手を引いて支える彼の後姿を見た時、なんと言うか、彼がいてくれるのだ、という気持ちにさせられ、とても支えられて幸せだと実感しました。これなら、と強く実感しました。藤原さん

のお氣遣いがとても嬉しくて。あ、ああ、すみません。

矢倉さんは堪えて嬉しい気持ちを押し殺しながら話しているように受け取れた。

「そうでしたか」そうか、そうなんだ。あの女、勝手なまねを……。でも、洒落た粹なことを。

——あ、すみません。もうこんな時間。又、改めてお礼を。

「あ、いいえ。態々、そんな事大丈夫ですよ。それより、今度こそは！」

——ええ、わかってます。では、本当によろしく藤原さんにお伝え下さい。そうだ、あの言葉も領きました。

「はい？ なにか」なんだなんだ、あの女にとって、一体なんなんだ。

——ええ、一人より二人。女は愛されて幸せになるのだ、と。私、なんだか頷いていました。

少し考えた。「——そうですね。うん、そうでしょうね」そうかあ、そうかもな。あの女。

あの女の言った台詞。なんとなく頷ける。まあ、偶には良いこと言うものだ。

——今度、正式に二人のこれからのことを報告に参ります。じゃ、失礼します。あ、それから、もう一つ。私、お酒を飲むとちよつと……。まあ、あの今後は自重します。

「あ、はい、ではお待ちしていますよ」

電話を切ると椅子に深く座る。

矢倉さん酒になにか問題あり、なのだろうか？ 酒飲んで記憶無くなる、とか。酒癖？

そうだ。思い出したように椅子から尻を浮かべながら後ろを振り向き、あの女をつい捜そうとした。

「わ！」ビックリした。退いて机に尻餅をつく。その勢いで机の書類をぶちまけた。

目の前にいたのは課長が指二本をつき立て、齒グキを剥き出しニンマリとして突っ立っていた。

いつもいつも、いったいどうやって後ろにいるのか？ まったく
気配を感じさせない油断ならないおやじだ。

「と、言うことで」短い言葉の後、山根は踵をかえすと首だけ振り
返り、なにしてるんだ？ 早く来い！ 駿平に言いたげだ。

何が、『と、言うことで』なんだ？ まったく、どうにもこうに
も。ふざけたおやじ。腹で毒づく。

それにしても『一人より二人』か……。あの藤原の一言。

いつもの足取りで、いつもの階段の踊り場へと煙に巻かれる為
に
向う山根。

課長の後続き、藤原の台詞を反芻しながら駿平はとぼとぼと歩
く。

第三話（騙す） 1（前書き）

若い頃に恋に破れた女が相談所に紹介された男性との恋に悩む。

山根課長の知り合いである紗江子は勤めている花屋の店長、蒼井から半ば強引に結婚相談所に行かされた。そこで紹介されたその男は紗江子に胸に響くものを感じた。満更悪くない。

しかし、幾度か会う毎に男の正体を紗江子は薄々感じ取る。実はその男、とんでもない犯罪者、詐欺師。女から金を巻き上げる為に偽って『ハッピーパートナー』に登録し、接近してきたようだ。紗江子はその男と何度もデートを繰り返す。深く愛していく反面、更に胸騒ぎが胸に広がる。

ある時、男の本性に気付いた紗江子は自分で気持ちの決着をつけ、向った待ち合わせ場所。又、騙されたと心では思う。まさか、そんな人物を相談所から紹介されるとは思ってもなかった。ただ、本当に信じたくない気持ちに交差する。

ところがそこで待ち伏せていた駿平と課長。山根が男の本性を伝えようとてきたが、紗江子は驚きもせず、それを払い除けるように気丈に振舞う。

またしても敗れた恋。ささくれた気持ちにさせる恋だらけだが、やはり本当の恋を探して生きる方がましだと、次へと気持ちを向ける。何故、課長は紗江子の待ち合わせの場所や時間までも知っているのか？

第三話（騙す） 1

1.

「その後お変わりありませんか？　——いえ、そうですか……。良かった。」

「では……。え？　いえ、とんでもないですよ。——ありがとうございます。頑張って下さいね。……。あ、いや無理せず上手くお互いの気持ちを育んで下さいね。……。じゃ、吉報をお待ちしておりますよ。——あ、すみません。またプレッシャーな言い方でしたね。何かあれば言ってください。それでは失礼します」

駿平は受話器を置くと安堵の溜息をつく「良かった……」つい言葉が漏れた。最近、色々仕事での悩みを抱え物憂いと思っていた。それに営業成績も思うように上がらない矢先のこの電話は少し気が晴れる。手元のクリアファイルを開き、一枚のスナップ写真を指で摘まんで眺める。そこには男と女二人が微笑ましく並んで写る写真。眺めて「うんうん」一人頷く。

見入っている駿平の横を通り過ぎる藤沢に気付き、顔を持ち上げ少しテンポがずれたが駿平は声をかけた。「藤沢さん、どうです？　やっぱ、この二人お似合いでしょ？　ほらこの前登録した……」

藤沢は差出した写真に一瞥をくれただけで過ぎていく。そっけない態度だ。

な、なんだ。この人は。相変わらず不遜で無愛想、全くもって鼻持ちにならない。言葉の一つやふたつくらいしても良いものを。だいたい、よくもこの仕事をやってられるものだ。

「よ！」背後からの声。

呼び掛けられた声のするほうへと体を捻る。

ズボンをズリ上げながらニツと歯茎をむき出して笑うおやじ。

課長だ。はあ……。

珍しく声をかけられた。

だが、いつもの顔で、いつもの仕草、決まって指を二本突き立てる。が、駿平の顔の様子をみるとすこし気まずそうに指を曲げる。それもくさい芝居だと分かっている。

駿平は課長を一瞥しただけで、何事も何も見なかったことにしようと体を捻り、自分の机に向う。写真を元の位置に帰しそのクリアファイルを引出しに終わるとパソコンのモニターに目をやる。拘らないほうがいい。

課長は咳払いを一つ。「なあ、どうしたよ、駿平」

背後から機嫌をとる嫌な猫なで声が聞こえる。はあ……、げんなりする。

「怖い顔しちゃってさ、なんだなんだ。え？」

「いえ、なんでもありません」モニターに向ったまま、平たい声で振り返りもせずに答える。すると課長が駿平の首に腕を巻きつけ「まあまあ、そんなイラつかない、気を静めてさ。こんな時は、胸一杯に行き渡るモクが俺たちを癒してくれる。な、と言うわけでいつもの一服」そう言いながら、耳元になま暖かくヤニの漂う息を吹きかける。

俺は別にイラついてなんかいない。いや、イラつく？ イラつかせるその原因はあんただろうが。

駿平の肩に漂うヤニの匂い。すぐに課長の腕が解ける。

はあ……、溜息をひとつ落す。まあ、いいか。あの藤沢の態度に気分転換で一息つくか、このおやじならまだましだ――。

面倒くさそうに駿平は「はいはい」と返事をする。すると返事が帰ってこない。振り返ると中年おやじはすでに事務所の出口のドアノブに手をかけ、右手をひらひらとする。気色悪くこっちこっちと手招きをする。いったいあんたはどんな神経してるいのか底がみえない。とってもマイペースだ。あの女、藤沢といい、課長といい、まったくもって理解不能である。それを考えると深い沼にズボズボと体が埋まっていく気分だ。とてもイラつく！

やはりイラついている。

結局、項垂れたまま出口へと向かう。そんな駿平をみてアカンベ―をするいつもの奈津美をいつものように睨み返す。いったい俺に對して何の意味があるのか分からないが毎度の光景だ。俺の優柔不断な態度に業を煮やすのか、お門違いだろう。

「どうだ、忙しいか？」踊り場の手すりに両肘を乗せ、空を見上げる。

「はあ……」さっきの電話でいい気分だったが、藤沢の存在と課長の登場で逆戻りだ。

「はあ、じゃねーだろ」駿平へと振り返ると眉間に皺を寄せる。

「ええ、まあ」溜息交じりの返事をした。

「それも違うだろ！ はい！ 頑張ってます！ だろ？」駿平を覗き込む。

「はいはい」

「そうそう、で？」頷きながら駿平を見遣る。

「で？」

「だから……、さ」ニヤつとした目つきで二本の指を空に浮かぶ雲へと突き刺し、駿平の反応を待っている。

はいはい、まったく本当にもう。しょうがないおやじだ。渋々懷から煙草を取り出す。

「ところで、課長」駿平は課長の銜えた煙草に火を点けながら訊く。

「なんだ？」

「なんで、藤沢さんて、いつもあなんですか？」

「彼女、何かあったか？」課長は目の前に漂う煙を扇ぎながら聞き返す。

「いえ、いつもですね。藤沢さん、自分担当の会員、それも大半の会員さんをいつも私に押し付けるんですよ。まったく参りますよ。挙句の果て尻拭いまで。それに日頃の協調性のなさど無愛想、それにですよ……」

「はいはい。なんだそんな事か」惚けて頭をボリボリ掻く。鬘で頭皮が蒸れるのか時々ボリボリと掻く。

「『なんだ、そんな事』は、ないでしょう！ とても問題です。このままでもいいのですか？」ますます語気を強める駿平。

「そうか。――まあ、な」顎を突き出し、所々の髭を耄る。課長の鼻穴からもわもと吐き出される煙。課長の目が遠くをぼんやりと見遣る。

課長は暫く考えに耽る。

そんな考えるほど何か訳ありかよ。

「藤沢は、バツ一だよ」

それがどうした？

「もうかれこれ五年になるかな」煙草を深く吸う。

「――なんだったら、おまえに薦めようか？ 姉さん女房ってのもいいぞ。それに営業成績にも繋がるし」ニヤニヤと齒茎を出して笑う。

一人でうんうん、と反芻している。

「結構です」

おいおい、いい加減にしてくれ。悪い冗談だ。腹の中で毒づく。それにバツ一が？ だからどうしたというのだ。

横で眉間に皺を寄せ、目を剥き、顔を歪ませる駿平に気付いた課長が肩を竦める。

「冗談、冗談。本気にしちゃいかな。――ま、しかしな、彼女の才能には驚かさせるよ、まったく。直感、とか言ってたな」言い訳というより宥める課長。「本来、ビジネスには理論、数字や裏づけがあつてこそ成果があるんだ。だがこの世界、男と女。理屈じゃ上手いかない。ピンとくるもんがある。藤沢は男と女、こと恋愛に関してピンとくるようだ。そう、ピンとな。そのへんはお前のお下半身と同じだ」チラッと横目で駿平の股間を見る。「まあ、まだまだ分からんだろうな、お前には」もう一口煙草を吸うと膨らませた鼻穴から煙が噴出す。ふと思ひ出したように「そうそうある週刊誌だ

ったかな、『生命の不思議…』とかいう記事があったな。元々、母親の腹の中にいる胎児は、みんな最初は女なんだ。命が脈打つ時、男か女かに形成される。生命の不思議だな。まあ、お前も俺もピンときたくちのほうだな」

だから、バツ一とどう関係があるのだ？

首を傾げる駿平に気付く課長。

「すまん。話が逸れた。要は結婚してしまえばこの商売の結果は成功だ。だがな、その後離婚する者だっている。だからな――」トントンと煙草の灰を落す。

「……」駿平は黙って課長を見据える。

「ともかく、彼女は女だがピンとくるらしい。不思議にピンと。成婚率という数字より、成婚後のフォローにまで気を使っているところも、恐らくピンとくるのだろうな」鼻と口から煙が湧き出る。

『ピン』がしつこい！ それは分かるが胸糞悪い。納得はいかないし、大体日頃の態度といい、無責任さが気に食わない。

「おまえ、結婚させれば終りと思っていけないか？ すこしでもそんな気持ちでいれば、紹介された二人に失礼だぞ」駿平に視線を向け、諭すように釘を差す。その視線を駿平は逸らす。

売上主義のこの会社。競争原理の世の中では仕方ないことではあるが、確かに課長の言う通りかもしれない。

「この業界、ビジネスライクだけじゃない。本来ビジネスには、『落としどころ』ってえのがあるんだよ。上面の考えだけではおしまいだ。これから、ということが不足しているのだ。これ！ といった二人を直感的に判断して、いけると思ったら無闇にお節介しない。むろん、最初のお膳立てやそこまでは手をかけるがな。ちなみにあいつ、いや彼女、あれでも面倒見よくてとても優しい女なんだ」

そんな！ 到底思えない、あの女が。いや、待てよ。課長の言葉は鵜呑みできないが、他の人には決して見せない仮面の裏にある一面なのかも知れない。でもな――。

首を傾げ両腕を抱え込む駿平。

「そうそう、お前の日頃の態度を見てみると昔の自分を思い出すな。熱く正義感を振り翳すところ。それと、大雑把なところもな」

要らん世話。それに正義感を振りかざす？ 俺もこの年齢になるとこんなおやじになるのか。全然、有難くない。それに俺は大雑把な性格じゃない。アヤと暮らしている時も部屋の掃除だってまめにしているし、下駄箱、風呂、洗面台と小まめに綺麗にしているし、それに……。

「ところでおまえ、辞めようなんて思っちゃいないだろうな？」駿平を見上げ唐突に言う。

一瞬ビクついて見下ろすと課長の細い黒目がいつもと違う。鈍く光る黒目に睨まれる。時折、突き刺すような鋭い目でこんな視線を投げかけてくる。この時ばかりはよく分らん。仕事中にはまったく見せない圧倒的な視線を。

しかしそうだな、課長の言うとおり確かにうんざりしている。特に最近はあるこれ考える。

課長は肩を窄めた駿平を見据える。口を歪め、渋い顔つきのまま顎の髭を筆る。「いっ」痛みで小声を洩らす。「まあな、元氣ねーしよ」目を逸らしてもう一口煙草を吸う。

俺の態度が顔に出ているのだろうか？ 確かに迷っていた。というのも本当にこの仕事、性に合っているのだろうか、と自分の中でいつも杞憂してやる気がなく自棄になっていたところもある。そんな風に見ているのか――。

「俺は辞めさせんぞ、お前を」駿平を指差す。「いいか、この仕事をなめるなよ。俺たちのやってる仕事は人と人を取り持つ仕事だ。それでもでっかい仕事。そう、愛だ。一番遣り甲斐ある仕事と思わんか？ 人は物じゃない、感情がある。誰でもいいって訳じゃない。だからビジネスライクじゃだめなんだ。成婚に辿りつくまでは思うように行かない。だがな、百人、いや一万人のうち、一人でも結ばれれば良しとするくらいの考えじゃなきゃ持たんぞ。みんな違うんだ。その一組が結ばれる。又、別の一組が結ばれる。沢山の男と女

の幸せの数だけ喜びを味わえる。そんな男と女の背中をそっと押し
てやるのが俺たちの仕事だ。結ばれない男と女は幸せじゃない、と
は言わん。きっかけやチャンスすらない人がゴロゴロしている。だ
からな、そう考えればとても意味のあることを任されてる。いいか
！ そこんとこ、お前にはとことん教え込む」

課長の言わんとすることが分かるが、そこまで心底素直に頷ける
にはまだまだだ。もっと時間かかるのかも知れない。駿平はその場
で首を縦に振って一応分かった風に頷きやり過ごして訊いていた。

「おい、駿平！」

背筋がピンと伸び、同時に声のする方向へ振り返ると奈津美が腕
を組み、仁王立ちしている。いつからその場に居たのかは分からな
いが、目を剥いてこちらを睨んでいる。

「電話！」、「花田さんから」

クラクラとした。その呼び捨てはないだろう。何怒っているんだ
？ 突っかかるところは相変わらずだ。それにつけても俺のことを
いつも呼び捨てだ。例えば社歴が俺より少しばかり長いからといって
もな。――毎度のことなので疲れてとても言い返す気にもなれな
い。はいはい、と事務所に戻る。

事務所に向い歩きながら、つくづく言い返す根性のない自分が弱
く嫌にもなる。

何気に振り返ると課長は、もう一本の貰い煙草に火を点けていた。
すぐに口からと鼻から煙が吐き出される。その鼻に栓をするかのよ
うに指を突っ込み穿る。捏ねるように穿る。一瞬、こちらの視線に
気付くと指を鼻に突っ込んだまま一瞬固まるが、歯茎をニツと剥き
出し何事も無かったように鼻を穿った手をあげて振る。

いったい課長は何が言いたかったのか？ 藤沢のバツ一と男と女
のビッグな愛と仕事がどう関係があるのだ？ やっぱり、会社を辞
めようかな。課長のあの台詞、説得力ないな。

「痛て！」立ち止まっていた駿平の後頭部を奈津美が叩いた。

第三話（騙す） 2

2.

今度こそはきっと大丈夫。自信を持ってそう思いつつ、花に水をやる。胸の奥底から滲み出る嬉しさが込上げ、ついほくそ笑んでしまう。ふと、周りを見回す。

——良かった。誰もいないみたい。こんな浮かれた自分を見られたくないと思った。年甲斐も無くときめいているのだ。この年になり、訪れた春を逃すまいと願っている。

さて、今日も約束の時間まであと少し。小一時間ほどもすれば仕事の帰り支度を整え、後は待ち合わせ場所へと向うつもり。

「紗江子、なにか良いことでもあるん？」

「え？」びっくりした。

振り返ると腕を組んだ蒼井がすぐ側から声をかけてきた。今さっきまでそんな気配を感じなかった。

蒼井は紗江子の勤める花屋の店長。紗江子より十五歳上で貫禄のよい体格をした容姿。その容姿と同様、見た目とあけずけなところが男顔負けで、更に付け加え世話焼きな女性だ。この花屋は私が高校のバイトからの長い付き合いで暇になると仕事で世話になっている。だから若い頃の私の事もよく知っている。

やはり見られた？

「顕著だもんね。ほんと正直な人やわ、あいかわらず」

蒼井は分かっている茶化してくる。

「あ、いえ、そう、ありがとうございます」何にお礼返しているのかしら。まあ、いいわ。今はいや、今度こそは——。

三十六歳を目前に控えた紗江子、花田紗江子。

この年齢になるまで何一つ浮いた話が無かった訳ではない。十年ほど遡ると一度だけ結婚目前までいった事がある。その時のことを

思い出すだけで胸が痛む。

三年ほどの付き合った男、いや愛したと錯覚した男がいた。それが妻子がいたのである。男は妻子がいることを隠し続けており、その事について全く触れずでいた。気付かなかった私のせいでもあるが、隠して付き合った男も最低である。いやそれ以上にそんな男に騙された私のほうがもっと最低だわ。怒りも唾棄すべくもなく自身自身の不甲斐無さに 自責の念に駆られた。だからそれからは忘れることにし、何事もなかったかのように自分を貝のように気持ちを硬く閉ざして女であることを意識しないように心がけた。

「頑張ってね。紗江子の幸せが私の願いなのよ。いや、あなたのお母さんの願いでもあるの」

「ええ」

「幸恵姉さんが亡くなってもう、十八年になるわね」右手に持つ剪定ハサミをテーブルに置きながら店の軒先から遠くに見える空を見上げる。彼女は手を翳し、空を見上げる。五月の青い空にぽっかりと浮いた綿帽子に似た雲がどことなく人の輪郭に見える。その雲が二人を見下ろし、声をかけてきそうである。

「私、頼まれたのよ。あんたのお母さんに」蒼井はレジの側に歩み寄り、置いてあった新しい煙草の封を切りながら呟く。

銜えた煙草に火を点け、薄く香るメンソールを一息吐き出す。

「紗江子にはやっぱり、お似合いの人がきつと必要だと思うのよ。こんな事を言うのは酷かもしれないけど、あの男が悪いの」あの男とは昔の記憶に残る男のことだ。「だってそうじゃない。詐欺紛いなこととしてさ、あんたにどれだけ残酷な被害を負わせたのよ。まったく」ついばやく蒼井がイラつく。少し不機嫌に煙草の灰を落す時、私のやり場の無い困った顔に気付くと我に帰った。

「あ、ごめん。言い過ぎたわね」蒼井はしまった、という顔つきで眉の上辺りを煙草の持つ左手の小指で掻いた。

「いいえ、私も悪いのだから。――仕方ない」

「悪く受け取らんよ。とにかくあんたにはさ、幸せになって欲しい

のよ」もう一口煙草を吹かす「――けれど良かったわ、ほんと」蒼井は胸に手を当てる。心底思っているのが分かる。すると煙草の灰が落ちそうなることに気付き灰皿に灰を落す。

はあ、お節介なところが偶に傷だけど、頼れる姉さん肌なところに昔から安心を感じる。

そろそろ、自分も紛切ることが必要だ、と考えていたから今の蒼井の言葉は嫌でもなく、素直に受け入れることができる。時間が傷を癒してくれるたことも感謝している。

ふと、三カ月前ここでのやり取りのことが彼女に思い浮かんだ。

三カ月前。

勧められて来た結婚相談所のドアの前で短く小さく深呼吸をした。あの二人からやりくるめられたからである。だから、今ここに居る。

さらにその一週間前の回想。

山根が紗江子の勤める花屋へ出向いてきた。

「あら、いらっしやいませ」

「ああ」

笑顔で山根を迎えたのに店に入ってくるなり私と目を合わせないようにする素振りをなんとなく感じ取った。それによそよそしく山根が蒼井とさりげない目配せしているようにも感じられた。

山根は暫く店内の花をうろうろしていた。なにも目的なく物色しているようだった。

声をかけようとしたその矢先に山根に向って蒼井が唐突に話しかけた。

「あ、そうだ山根さんにとって確か結婚相談所だったよね？」わざとらしい質問を投げかける。

「あ、うん」そして咳払いをする。

「じゃ、山根さんにとって結婚を世話してくれるだよね」ベタな台詞を棒読みしているように聞える。それに山根さん、と余所余所し

い。いつもなら山ちゃんと呼んでいるのに。

「そうだな」続けて煙草を銜えた山根課長が無理してうんうんと頷いている。

「あんた、もういいんじゃない？」蒼井が言う。

誰に言っているのかしら？

「もう終わったことだからね。気持ちわかるけど、そろそろ、ね！」
今度はわざとらしく紗江子に目を向ける。

え！ 私に言っているの？

「いえ、私は、もう……」両手が塞がっている紗江子がかぶりを振り、届いたばかりの花をショーケースに運び入れていた。

「なに言ってるの、ね！」煙草の火を消す山根に向って同意を求める蒼井。寸劇を終えた山根は困惑している気配もなく聞き流しているようだ。

山根さんは時々、花を買いに来る。それも決まっていとも菊の花を買い求める。時には配達を頼むこともある。けれど今日はいつもの菊の花の前に向わず、うろうろしていたのはこういう訳だったのか。

「あ、うん。紗江ちゃん？ そのやつ」山根が指さしてショーケースの奥に並べてあるカーネーションをみて言う。やはりまだ浮ついていようだ。「なら、うちの若いもんに世話させようか？」キョロキョロした後、レジの横にある灰皿にさり気なく目を落とし、残る吸殻を指で弾いている。

「山ちゃん、頼むわよ、いい男をね。いや、誠実な男を。いや、裏切らない男を！ いい！」蒼井が念をおす。

「あいあい、ところでメンソールでもいいんだけど、な」

いつものように強請る山根さんだ。来る度、蒼井に煙草を漁る。素行がやっといつもの山根に戻っているようだ。それより、なに勝手に二人で事を進めているのだろうか？

紗江子はガラスのショーケース扉をゆっくりと閉めながら「あの、結構ですよ。私の事は。ありがとうございます。お気持ちだけでも

……」閉め終わるとかぶりを振り、右手までも横に振り拒否するポーズを作る。

「紗江子、いいからいいから。あ、お金のことなら大丈夫！心配しないで」蒼井は紗江子から視線を山根に向ける「ね！山ちゃん安く負けといてね」山根と強引に話を進めようとする。どさくさに紛れて値引き交渉もしている。蒼井の気持ちとはとても有難いし、お金のことを言っている訳ではないが、私の意見など全く聞き入れて貰えそうにないようだ。

結局、その場で蒼井は強引ともいえる押しの一手。やはり最初から山ちゃんと仕組んでいたのだろう。どうもタイミングと話が早すぎる。山ちゃんも断ることもせず、ただ従うばかり。結局、蒼井のグイグイ押す勢いに負けてしまった。彼女の気持ちを無下に断ることも出来ず、顔を立てるつもりで行くだけ行ってみようと頷いた。

翌週の土曜日『ハッピーパートナー』の事務所の前に紗江子はいた。

小さく短い深呼吸をし、ノブに手をかけ恐々とドアを押す。

中に入ると「いらっしやいませ」。すぐに若い男が明るく出迎えてくれた。割と感じのいい男だ。仕立ての良い紺の縦縞柄スーツが様になっている。

事務所へ入り、ドアを閉めると「こちらへ」と促され、カウンターの椅子に手をかける。恐る恐る椅子に着こうとした時、奥のほうから手を振る男が目飛び込む。

「紗江ちゃん」山根が歯茎を剥き出し、ニツとする。

山ちゃんだ。すぐに分かった。思わず半立ちのまま、笑顔で会釈する。

若い男は私に名刺を差出し、自分があなたの担当で野呂だと言った。

それからここでのシステムや今後の話を丁寧に説明してくれた。ガイドンスブックを捲るとすぐにコースと会費へと目が行く。思っ

ていた以上の金額でびっくりしたけれど入会費はすでに支払って貰っている、と言う。蒼井がすでに入金を済ませているのだとすぐに分かった。有難迷惑といえはそうかも知れないが、今更ながら彼女の手際良さと世話焼きに腹立たしさというより、有難い気持ちになった。

入会手続き五日後、『ハッピーパートナー』の事務所に出向き、数冊の男性会員ファイルブックの頁をパラパラと捲っていた。この会員として入会している男性は医者、自営業、弁護士、美容室オーナー、普通どこにでもいる会社員などと幅広く、合わせるとおよそ一五〇〇名近くの写真付き会員名簿である。野呂という若い男に薦められるまま。更にあれよあれよと事が進んでいくことの速さに気乗りしないと思うが断るタイミングを逃す。けれどとりあえず少しくらいはいいか、と。それに結婚相談所ともなれば、そうそう変な男性を紹介する訳じゃないだろうし、安心感はある。

折角だからという気持ちになり、三冊目のファイルブックを何枚か捲ると一人の男性に目が留まった。不思議と目に留まる写真の男性は違和感も無く自然というか、前から知っていたというような人。もしかすると、この人？ そう、直感めいたものを感じた。けれどそれとは反対に過去の不安が甦る。躊躇っていたが野呂という担当は私の視線を見逃さなかったようだ。彼は躊躇より直感をと。

仕事とはいえ親切にここまでして貰ったことと自分の直感的めいた流れに任せ、とりあえずその男性と会うことにした。

私の選んだ男性と私との調整役も彼が取り持った。

一週間後、都内のホテルで初めてお互い知り合い、その後も男性と三回ほど会った。

思っていた通り、二人でいると居心地が良い。だんだんと安堵感ともいえる空気が二人を包む。断りきれず出向いた結婚相談所で目についた男性。本当の本当。もしかして今度こそは――、直感めいたものだったが、今は液体が繊維に染み込むようにどうしようもなく押し戻せない。ジワジワと染み込むのをただ、じっと受け入れて

いく。

「いつまでニヤニヤしてるの？ 早いところその花、ラッピングして届けて頂戴。それとね——」まったくもう、といった口調だった。蒼井の言葉を訊き終わらず「はいはい、わかってます。じゃ、これもやっておきます。石川さん宅へ届けておきますよ。あ、これって山根さんのいつものですよね」

店の時計がすでに四時半になろうとしていた。早いとこしなきゃ。紗江子は菊の花を手際よく包装し終えたと、すぐに配達の準備を始めた。

彼、私の姿をどう映るかしら、なんだか、少し若すぎるかもしれない。つい、店の人に勧められその気になりレジで財布を開いた。仕事を終え、先週末買ったばかりの薄桃色の無地のワンピースに着替え今日の待ち合わせ場所に立つ。

夕方の六時を少し回ったところだがまだ明るい。五月の青い空、ほのかな新緑の香りが鼻をくすぐる。深く胸いっぱい吸い込む。全てが紗江子にとって以前とは違う。

何気に辺りを見る。横の視界に入るバス停。

ん？ やはり今日も居るようだわ。

私が立つこの場所から少し先にあるバス停の横で空を見上げる若い女の子。歳は恐らく十代半ば位、制服を着ているわけでないのが正確ではないが、高校生だと思える。以前からその場所に居たのかどうか分からない。この待ち合わせ場所を使うようになって彼女の存在に気づいた。いつもバス停のあの位置で誰かを待っている。けれど彼女が迎えるの車に乗ったのを見たことはない。

これは私の勝手な思い込みかも知れないが、彼女の少し違う目つき、風貌が健常者ではないとすぐに分かる。だから、身内か施設の人間が迎えにくるに決まっている、と思う。

彼女を見ていると今日も目が合った。

私に向って笑っている。最初は思わず身を引いたが、何度か目が会う度に不思議と距離感も近くに感じたられたこともあり、そう驚きもない。それでも彼女の事、障害者と分かっていることで上手く振舞えずドギマギしている自分がとても恥ずかしい。誰しもそれが本音のところだと一般的に思うのでは。

「え、なに？」

あの子が私にむかって手を振り回している。親しそうに唇の両脇を引き上げヘラヘラと笑顔を作る。

「え？」あの子どうしたのかしら？

行き交う人を避けながら目を凝らして彼女を見る。彼女の仕草、人差し指で私を指す。親指……、人差し指と人差し指を立ててあわせる……、小指を立てると指三本、それから小指を向ける。

え、どういうこと？

彼女は首を傾げ、口元を緩め笑う。でもすぐに真顔になり何事も無かったかのようにして空を見上げる。暫くすると空を見上げてまた、身振り手振りをする。さっきの仕草に似ている。

彼女の表情が気になり、思わずつい彼女に向って歩きだしそうになった。

「紗江子さーん」遠く後ろから呼び止められた。

声のする方へ振り返る。

片手を持ち上げ、こちらへ走ってくる男の姿が見えた。私もつられ胸の辺りまで手を持ち上げ、ひらひらとする。まるで少女のように燥ぐ自分が急に恥ずかしくなった。辺りを目だけでキョロキョロして手を下ろす。

男は手の届く距離まで駆け寄ると肩で息して微笑む。「すみません、遅れて。……はあはあ、待ちましたか？」待ち合わせ約束の時間、六時半。決して遅刻では無いが彼は必ずと喋っているくらい謝る。

「さあ、行きましょう」男は大きく溜息をつき、息を整え、会話もそこそこ歩き始める。夕飯で予約しておいた中華レストランへと向

う為に。

その場を離れる間に後ろへ振り返るとバス停の彼女はまだそこで空を見上げていた。両手をブランとして何事も無かったような顔つきで。いったい何だったのだろうか。彼女の仕草が妙に気にかかって胸の中での疑問が消えなかった。

レストランへはこれから歩いて行けば十五分くらいでたどり着けるはず、と男は紗江子に話しかけてくる。行き交う人混みの中を彼が行く手を掻き分け、私の歩き易いように行く手を確保してエスコートする。それも適度な歩く速さで、とても気遣ってくれる。

私が選んだ男性。黒岩康之。見た目、若く見えるが三十六歳、私と同じ年。相談所に登録したのも私より少し前のようだ。外資系の商社に勤めているらしく、主にアジア辺りを担当していると、訊いている。けれどなぜ、わざわざ結婚相談所に入会してまでも……。気にかかるし、不思議と思った。商社マンならそれ相当の女性を結婚相手を考えると思う。

誰がみても彼の容姿は決して悪くない。少し見上げるくらいの長身一七六センチで、世の男の中では高い部類に入ると思う。髪は少し長め、全体を持ち上げ横に流している。両眉からずっと鼻筋も通っており、黒目もはっきりとしている。身に纏っている洋服も決して流行を意識することもなく自然である。

黒岩の話では忙しい仕事柄、自分を理解して貰える相手と巡り合えなかったらしい。それでも何人かとお付き合いしたとは訊いた。そんな彼をどう否定することはない。全く無いとは言えないが普通の上といったところだろう。

ご両親は健在で九州の福岡で暮らしているらしく二人兄弟で弟さんがいるとも訊いた。弟さんの写真を見せて貰ったことがあるがあまり似ていない、と少し首を傾げた私に、言い難そうに彼の口から異母兄弟だと話した。

私としては出来れば早い機会でご両親にご挨拶にお伺いしたい。一度、彼に気持ちを伝えておきたいけど、仕事の都合でなかなかタ

イミングが合わない。こんなことって、少し焦らないでおいたほうがよいのかしら。しつこくするのもね、ただね……。昔のあのときを思い起こすと安心しておきたい。たとえ結婚相談所の紹介とはいえ……。

「紗江子さん！ どう？」唐突に黒岩が話しかけた。
「え」

「美味しいですか？」二人の横を通り過ぎる店員に気付かれぬよう紗江子に耳打ちをした。

「あ、ええ、とっても」スプーンからずりつと鱈鰯が落ちた。

「そうですか——」黒岩は紗江子の顔を窺っている。なにか考え事をしている風に思えたらしく、紗江子に向って問いかける。

「あ、いえ何も」もう一度掬いなおそうとスープを掻きまわす。広い円卓を黒岩と二人並んで食事をする。微妙に距離があるものの回を重ねる毎に距離は縮じまる。

少しばかり早い時間のせい、中華レストランには食事をする紗江子達以外、人はまばらだ。

「この中華ね、杏仁豆腐が拔群なんです。他のもまずまず美味しいですね」店員に気付かれないうちに小声で紗江子へ話す。「杏仁豆腐が僕にとってメインメニューなんですがね。——最後のお楽しみと言う事で」

「ええ、でもこのスープ、鱈鰯でしょう！ とっても美味しい」誉めながらもなかなか鱈鰯がスプーンに乗り切れず、スープだけを握ねている。

「紗江子さん？」
「は？」

「いや、今日はなんとなく紗江子さんの様子が、すこし……」黒岩が少し顔を曇らせる。

「なんでもないですよ、なんでも」紗江子のかぶりを振る。

黒岩は一瞬、怪訝そうな顔をしたが「そうか、なら良かった。う

ん」一応、納得した風に言う。ほくそ笑んで私を見ているのが分かる。私の態度にほんの少しばかり怪訝そうだが、彼は一応納得した素振りですその場を流す。

黒岩が軽く咳払いをして「どうも、僕は北京ダックやら鱻鱻なんていまひとつなんですがね」彼はまた小声で話を続けた。

「え？」

「あ、ごめん。ここへ予約までしておいて失礼ですよ」今度は聞き返さず左のこめかみをポリポリと掻く。

「あ、そんな事無いですよ。美味しいです全部、とつても。でも、黒岩さんお奨めのデザートを特に期待しておきます」残りの鱻鱻のスープにスプーンがコツコツと容器にあたる音がなおも響くが、紗江子は鱻鱻の切れ端を掬いながら微笑みを返す。

次に出てきた食べ物チャーハン、期待の杏仁豆腐はその次あたりかしら。

「やっぱり杏仁豆腐が一番でしたね」こそっと彼の耳元で呟いた。

「でしょ！」黒岩の声が大きい。レジで精算している中年の男がチラッと二人へ視線を向けた。またしても黒岩が咳払いをし、肩を窄め罰が悪そうな顔を作る。メインの料理よりデザートを誉められるのは店側としてこの会話は嫌な気にさせられるのかもしれない。けれど杏仁豆腐は抜群に美味しかった。私もそう思った。

「ご馳走さまでした」

「いえ、どういたしまして。さてと――。あれ？ あ！ え？」

「どうしましたか？」黒岩が上着の懐を探っている。動揺が彼の顔に広がり、ズボンに何度も手を突っ込み、もう一度上着の両ポケットから内ポケットと全ての袋という袋を掻きまわしている。

「あ、いやね――」黒岩は腰を折り、薄暗い自分の足元の床を穴が開くほど見る。首を捻り起き上がるとさっきまで食事していたテーブルへ駆け出した。

暫くすると紗江子の待つレジへ、俯き加減の黒岩が頭を掻きなが

ら歩いてきた。

「はあ——」

「もしかして……」

「え——、その、もしかしてです」

慌ててポーチを開き財布を探る。「黒岩さん、大丈夫です。私が払います」紗江子はポーチから赤色の分厚い財布を取り出し、クレジットカードをレジの男に差し出した。

「申し訳ない」苦々しい顔で口も歪ませ、黒岩は本当に申し訳なさそうな態度である。

「大丈夫、大丈夫。ささ、もう出ましようよ」紗江子は黒岩の腕を引き、店のドアを押した。二人を見送る男は顔色一つ変えないで目礼をしていた。

その後の予定を取りやめようと言った黒岩だったが、紗江子が折角だから、とのやり取り後、近くの見晴らしの良いホテルで二人同じ紅茶だけを楽しんでその日の帰路に着いた。

第三話（騙す） 3

3.

それから、一週間後の土曜日に二人は都内のビジネスホテルの喫茶ルームで向き合っていた。

先週の食事のお礼を電話で伝えたと黒岩から会えないか、と自然な口調で誘ってきた。

会って十分としないうちに神妙な顔で黒岩は突然話を切り出した。
「紗江子さん、実はね。隆志という弟が……、事故起こしちゃったんだ」

「え、異母弟、弟さん、あ！」

「うん、まあね。大した事はないのだが、昨晚遅く連絡をよこしてきてね——。一昨日話しておいたと思うのだけど——、明日からの香港出張が。参ったな——」

とても歯切れが悪く要領を得ない黒岩の言葉。それより、「隆志という弟」？ 不自然な言い方。そうか、異母兄弟だからそんな言い方をするのだ、とそう思った。

「それで？」

「ん——、ぶつけた相手が悪くてね……」黒岩は腕を組み唸ったまま横一文字に硬く結んだ口から次の言葉が一向にでる様子がない。俯いて暫く思考したのち「はあ」と溜息を深く着く。

「黒岩さん、私に出来ることがあれば——」その様子を悟って紗江子は真剣な眼差しで黒岩を見る

「いや、やっぱりよしておこう。こんなことは出来ないし、不味い。うん。訊かなかったことにして下さい」

「え……」

「さあ、明日僕は出張だから、今日は少しゆっくりと会っておきたい」両膝をポンと叩き、汗の掻いたグラスの水を飲み干した。

黒岩は明日から向う出張先の香港の話始めた。紗江子は気になって仕方なかった。黒岩とは何れ結婚するであろう男性。その弟さん、悩んでいる黒岩を見るに見かねない。そんな彼をみている私のほうが悩んでしまう。

紗江子は黒岩とのこれまでの事を思い起こしてみた。

何度も食事をした。映画も一緒に観た。二人の時間に色が塗りつぶされていく。けれど何処となく漂う不安な気持ち、私への優しさ、押し付けがましくなく嫌味もない。全てにおいて納得するが、これ以上という踏み込んだ気持ちの深さがなかった。直感で感じた筈なのにどうしてもそれ以上になりきれない。これが彼の悩みなら、本心で苦しんでいるのなら、私のやるべきことは今この時なのかもしれない。

唇を少し舐め、乾いた喉に押し込むように思わずゴクリと鉛のような唾を飲み込んだ。そして胃袋から腸へどっしりとした気持ちを据えて言った。

「どうしたらいいの？」

「え？」

「弟さんのこと？」

「なにをですか？ いや大丈夫。紗江子さんは心配しないでいい。もう止しましょう」

「だって、気が気でないのです。私は黒岩さんの……、黒岩さんの……。人生を共にしたいのです」

「ありがとうございます。でも大丈夫です」黒岩は薄く笑った。

「だから、どうしたらいいのですか？ 弟さんのこと」

黒岩は項垂れ、かぶり振る。何度も振る。そして大きく溜息を着くと口を閉ざして紗江子に視線を向ける。そしてもう一度俯く。暫くしてやっと顔を持ち上げる。

「百……、百万円、いや、五十万」

紗江子は黒岩の口を見遣ったままで硬直している。

「ええ、五十万を貸して欲しいのです。こんなお金の話をしたくな

かったから……。やっぱり、止しましょう」

「待って下さい！ 五十万で、それで良いのですね？」

「え？」

「いや、五十万円あれば。明後日までに五十万円あればいいのですね！」

「え、まあ——」

「分かりました。明後日までに用意します。それを弟さんへ渡して」大見得きつて言うわけじゃないが、いままですべて貯めてきた蓄えがある。五十万くらいなら何とかなる。

「ちょ、ちょっと待ってください」紗江子の口を塞ぐように黒岩が言い返す。

「いくらなんでもやはり出来ません。この話止めましょう」

「出させてください」

「あなたって人は——。はあ……」

二人の間に十分なほどの間があり、黒岩が椅子に座りなおし姿勢を改めて言う。

「ありがとうございます。本当に隆志の仕出かした事にあなたまで巻き込んでしまつて——。本当に申し訳ない」テーブルに頭を擦りつけ礼を言う黒岩。

「黒岩さん。止してください。いいじゃないですか、私の気持ちです。ただ——」

「はい？」

「返して貰う……、で良いですよ？ 一応として」

「わかっています。当然、責任もつて。まったくもって本当に本当にすみません。困っていました。いま持ち合わせがなくてね。私の口座は全て定期預金でして、すぐにお金の工面も明日の出張で隆志に渡すことも出来なくて——。本当にどうしようかと困り果てていたのです。でも、本当に良いのですか？ 隆志とも会ったことがないのに——」一気に話を続ける。

「弟さんはなら、この前写真を見せてもらったから大丈夫です」

「あ、そうでしたね」

「ところで、相手の方は？」

黒岩は唇をひと舐めする「暴力団の関係者みたいです」舌打ちをして弟の失態を恥じている口ぶりである。

「じゃ、警察へは？」

「はあ」黒岩はかぶりをふる。「行けてないですね」

「――実は、隆志も高校に上がった頃、グレてましてね。今じゃ全然普通の会社勤めですが、まあ、そんなこともありどうしてもなかなか警察には行きたがらないんですよ。それに最初は相手の素性が分からなかったみたいで、話しているうちにどうやら暴力団かそういう筋の相手らしい。拗れるのを嫌がり、どうやらお金で話をつけるように脅されてですね……」

「脅されて……、ですか？　でも、なおさら警察のほうへ届けたほうが……」

「私もそう、言っているのですが、隆志もなかなか聞かなくて、強情な奴で困っています。それに私へ頼りたがらないのです。腹違いと言う事もあり、あいつの立場からして。だからなおさら私も隆志にはしてやりたくて……」

深く触れないほうがよさそうな気がした。まだ、私には分からないことがある。今は彼の気持ちを分かってあげたい。

第三話（騙す） 4

4.

二週間後の金曜日、夕方。いつもの待ち合わせ場所。

手首を返し、腕時計を見る。時計の針は午後六時を丁度さしている。久しぶりに彼と会える。昨晚、香港から帰国したばかりで疲れていないかしら。送られてきたメールを読み返す。

彼とはほとんど携帯メールで連絡を取り合っている。仕事柄、メールのほうが都合よいらしい。先週は出張でメールすら出来なかった。本当は日頃から会ったほうが良い、ゆっくりと話すことができる。それにそろそろ今後の二人のことをゆっくりと話したいと思っていた。しかし、昨日のメールでは来週からまたシンガポールへ出張するらしい。それも二週間ほどみたいだ。今度の出張は牛革製品の輸入買い付けで現地コーディネーターと終日同行らしい。当分又、メールも出来ない。

携帯をバッグに終いながら……。あれ、今日は居ないのかしら？ふと思いついたようにバス停辺りを見遣る。いつもならあのバス停の横で空を見上げている女の子が今日は居ない。最近は何事か友達のように気にかかる。けれどいつも彼女の不可解な仕草についても気にかかっている。手をあれこれしていたことくらいしか思い出さない。それより何かあったのかしら、何もないとよいのだけだ……。ど……。

バッグに入れてある携帯がブルブルと振動して鳴り始めた。彼かもしれない。探って取り出し液晶表示を見ると一瞬見覚えのない番号に首を傾げ戸惑う。番号の記憶を呼び起こす。――そうだ、結婚相談所『ハッピーパートナー』からだ。

携帯の通話ボタンを押し、耳に当てる。

「もしもし、花田ですが」

——花田紗江子さんのお電話ですか？

「あ、はい」

——『ハッピーパートナー』の野呂です。その後お変わりありませんか？

「え？ あ、はい」

——良かった。頑張ってくださいね。あ、いや無理せず上手くお互いの気持ちを育んでくださいね。

「ええ、上手く。そうですね」

少しばかりのやり取りを交わし二人の状況やお互いの気持ちを野呂に伝えた。

——じゃ、吉報をお待ちしておりますよ。あ、すみません。プレッシャーな言い方でしたね。何かあれば言ってください。

通話を終わると携帯電話を握ったまま軽く溜め息を吐いた。

野呂という男は私の幸せを素直に喜んでいるようだわ。

「紗江子さん、遅れてすみません」 バッグに携帯電話をしようと同時に名前を呼ばれた。

少し驚き、振り返るとそこに黒岩が立っていた。つい腕時計をみた。午後六時を少し過ぎたところ、相変わらずの台詞と時間に正確だわ。

「すみません。時間間違えていましたか？」

「あ、いいえ」

胸を撫で下ろし「この前は本当に助かりました。隆志もほうもなんとか落ち着いて本当に助かりました」黒岩は深く頭を下げる。

「そうです、良かったです」

灰色の紙袋を上着の懷から取り出し、紗江子へゆっくりと差し出した「お借りしたお金です。早くお返ししないと、と思ひましてね」

「え！ そんな、私。でも、大丈夫なのですか？ ありがとう」

「何を言っているんですか。私こそ本当にありがとうがとうございました。回りの目があります。早くしまってください」

「ええ、わかりました」目の前の紙袋を慌ててバッグの底辺りへ押

し込んだ。

紗江子がバッグのファスナーを閉じるのを確認してから「じゃ、今日はなに食べますか？　大丈夫ですよ。すっからかんじゃありません。今日は遠慮しないで」上着軽く叩く黒岩は頷く。

「はい、じゃあ、お願いします」

「紗江子さんの好きなものでいいですよ。そうだ寿司でもどうですか？　取引先の接待で使った店があるんですが、きっと気に入りますよ」紗江子をみる黒岩の眼差しが強い。

「接待で使うほどの店なんて、とても……」

「心配は要りませんよ。任せて下さい」

黒岩は紗江子を伴いすぐに歩き始めた。

第三話（騙す） 5

5.

「ただいま戻りました」ドアを押し開けると同時に発した疲れた声。ヘトヘトだ。とても疲れた。こう蒸し暑くちや身が持たん。

鞆を机に乱暴に置くとエアコンの噴出し口まで歩き、火照った自分の顔を冷気に晒す。そろそろ梅雨も近づいているのか、このところ蒸し暑い日が続く。

「駿平！ これ見て！」

なんだ。事務所に戻るなり呼び捨てか？ うざい奴だな、それでも女の端くれか。まったくもう、毎度ムカつく女だ。無視すると喧しいことこの上ない。

「はいはい」奈津美へと振り返りながら首に纏わりつくシャツに指を突っ込む。べとつくシャツを浮かせながらネクタイも緩める。それでもその場で涼んでいた。

「先週の領収書、あれ駄目だからね。あれじゃ処理できないし、課長の承認印もないし」モニターに釘付け状態、こちらを見向きもしないで叫ぶ。

その言い草にムツとした。そんなことぐらいで、いちいち呼び捨てるな。課長があれば処理しろと指示してきたというのに、駿平は唇を歪め奥歯を噛み締めると両手の拳に力が籠る。肩に力が――。

「なにしてるのよ？ ぼーっとしてないで、早く早く！」

お前、自分勝手な奴だな、言いたい事いって。こめかみに血管が浮き出るのが自分でも分かる。

「分かったよ」我慢して奈津美に歩み寄る。何故、おれがここまでして我慢しなきゃならないのだろうか？ けれど、どういう訳だかムカつく割には奈津美に従っている自分がいる。

「見てみて！ これ」

見下ろして奈津美の指さすモニターへ顔を近づける。大手インターネット検索サイトの芸能・事件記事の画面に大きく目立つ赤文字で「相沢紀香、離婚！ 破格の慰謝料？」――読み上げたと同時に後頭部をいきなり叩かれた。気持ちよい音が事務所に響く。

「何！　する？」振り向き、思わず殴り返そうと首を持ち上げた。

「どこみてんのよ！　ここよ！　ここ、ここ」モニターの画面隅をコツコツと叩く。

痛たー、後頭部を擦りながら睨み返した。奈津美は駿平の視線を無視して言う。

鼻息荒く、奈津美の指さす場所に投げやりに目をやる。しつこく奈津美は指をさす。よくよく見る「いったい、なんなんだよ？」

奈津美の指先、モノクロの男の写真がある。

ん？　これって、なにに指名手配？　なんだ？

「指名手配？　で、この男が？」

「ええ！　わからんの？　あんたって人は。――本当にうちの社員？」

「はあ？　何いってんだよ。え！」

「いい、この男の顔。見覚えはない？　あんたの知っている奴だよ」語気を強める奈津美。

もう一度、モニターの隅に映る親指ほどの男の顔をじっと見つめた――。それでも思いつかない。

暫くして「あ！」固唾を呑んだ駿平は言葉を失った。

「分かった！　そう」前から知っていたかのような奈津美の口ぶり。

「この人？　え！　なんで？」まるで言葉になってない。

「この男？」この男と呼び捨てしても良い、と言える犯罪に関与している男ということだ。「この男、って本当にあの人？　似た人じゃない？」なぜか信じきれないし、咄嗟のことで男の名前が出てこない。

「いや、絶対に間違いない！」言い切る奈津美の顔は強張っている。世の中に似たような人間は居る。それにモニターの写真も鮮明で

はない。半信半疑の気分だ。しかし、もしこの男がそうだとしたら、何故ネットにまで掲載されるほどののか。表沙汰までする必要があるのだろうか？ まさかうちの会社に関する事態になるのか改めて記事を読み直す。

記事性としては在り来りで割とよく聞くものだが、指名手配のこの男の起こす被害数が相当なものである。恐らくその記事性としてネット検索会社の事件記事に取り上げられたものである。それも共犯者がいるようだ。

「本当にこの記事――、がセネタじゃないだろうな」

「なに、言ってるのよ。ここまで掲載するのだから、がセネタではないと思うわ」

しかし、参ったな。これが本当なら――。でも、早急に究明しなきゃならない。本当にどうしたものか。

呻っているばかりだ。

「ところで課長は？」

「出張中よ！ 中国。一昨日からよ！ あんた訊いてなかったの？」
呆れて言い放つ。

「は、そうか。そうか……」 国際結婚の縁組の付き人で一昨日から中国に出かけたばかりだ。いつもの あのおやじの話半分しか訊いていなかったから、仕方ない。

言葉も続かず駿平は腕を組み、虚空を見上げ顰めっ面で鼻に皺を寄せる。

この男は俺が担当だ。

靴先をコツコツと叩き考える駿平。考えが思い浮かばない。しかし、ことが本社に知れ渡る前に何とか手を打ち、穩便に終えなければ。

――果たして上手くいくだろうか。

「とにかくこの男の入会時の資料を取り出し洗い出す。それから気付かれないように男と接触する段取りを」

「で、その後は？」 大丈夫かといった不安な目つきを奈津美は投げ

かける。

「いや、まだ考えてない」駿平の目が泳ぐ。

「やっぱりね。大丈夫？ そんなので」駿平をたしなめる。

「このことはまだ警察には、——分かるだろ。とにかく今は自力で出来ることをやる」

「ええ、でもあまり時間をかけられないからね」いつもの口調で相変わらず俺の上司気取りか。

「急いで、課長に連絡を取っておいてくれ」

第三話（騙す） 6

6.

約束の場所へ向う。電車からタクシーへと乗り継いで向う。

時計の針は午後十時三十分を丁度さしている。週末のせいか道路が混んでいるけど、十五分もすれば約束の場所には着けるはず。

今日は自棄に落ち着かない。

いつになく今日は約束の時間が遅い。それだけのことで落ち着かないのではない。昨晚遅く黒岩から携帯へ電話があった。いつもはメールでのやり取りが多い。けれど昨晚は珍しく電話で短めの言葉「午後の十一時を近くに来て欲しい」とだけを告げて携帯を切った。それ以外に会話はなく、いつになく迷いがありそうな声に。

それだけではない。最近、府に落ちないことが多い。

困っているとはいえ、いくらなんでもやはりお金の話を切り出してくることなんてどうなのか？ 相談所で知り合ったのだから、そんな変な男が登録されているはずがないし、山ちゃんの会社だということもあるが。

待合わせ場所に着くと紗江子は運転手にタクシー代を素早く支払って降りると小走りで向う。腕時計に目を落すと午後十時五十分、まだ余裕があるけれど気が急いた。

約束の場所に着くとすでに黒岩が先に着ていた。足元には煙草の吸殻が三本ほど散らかっている。私に姿に気付くと慌てて銜えている煙草も足元に投げ捨て踏みにじる。

「すみません。遅れて」

「こちらこそすみません。こんな遅くから申し訳ない」黒岩は神妙に頭を下げる。

「そんな」

——そう言えば、彼が煙草を吸う姿を見たことがなかった。今夜

やはりいつもとは様子が違う。遅い約束の時間といい、煙草を吸う姿。紗江子は何ともいえない不安が胸の中で広がりつつあった。

少し沈んだ口調で「少し歩きますか」紗江子の返事も聞かず、黒岩は顔を叛け、一人歩き始めた。

一瞬、その行動の意味が分からず、彼との距離を縮める為に後を追いかけた。

黒岩の横に並び、さりげなく見る。彼の顔は蒼白で口数が少ない。時折、何かをいいたげな素振りを見せるが、鉛でも吞まされたように唇が歪む。なかなか切り出さない黒岩はいつもの彼らしくない。黒岩は気にもせず歩く。

紗江子は考えた。すでに遠い昔となる留めておいた記憶。その記憶の欠片が繋がりはじめた。呼び起こしたくない記憶が頭の一面に広がる。鼓動が大きく波を打つ。その不安が広がりとつあることを阻止したく、足を止め、腹を決めて問いかけた「黒岩さん。なにか？」その呼びかけで背筋が伸び、後ろへ引き戻されたような反応と顔になる黒岩。その場でピタッと足を止めた。

暫くそのままの距離を保った。横を通り過ぎる人達は全くといっていいほど二人に無関心だ。

黒岩が踵を返すと言い難そうに切り出した「実は――」

対峙する二人は二メートルほど離れており、声は聞こえるが、少し訊きづらい。紗江子は黒岩へと歩み寄り「弟さんのことで？ あれからなにか？」

「いえ、その件はなんとかありました」すぐに否定する黒岩。

「じゃ……、ほかに何か？」

黒岩は俯いて口を硬く閉ざしている。夜も遅く薄暗いが横一文字に引き締めた口元に何か迷いが見られ、決断しかねている。

かなりの時間を要した。いや、恐らく大した時間ではないだろうけど、私の中ではとても長く感じられた。

「実は――、仕事で損失しました」

「え？ 今なんと」

黒岩は唇をひと舐めした。唾を飲み込み、溜息交じりに話を続けた。「実は、会社へ損失を与えたことで責任を取らされる事になりました。背任行為として問われて、その……」言い淀んだ黒岩が続ける「子会社への出向と減棒、もしくはは損害額を会社へ支払うということ。だから仕事で今、とても厳しい局面に立たされています」彼の話――、意味が分からない。けれど彼は今、とんでもない状態にいただけが大きく私を貫き、砕く。

「私、どうしたら？」胸に広がる不安を抑えつつ黒岩に聞く。

「紗江子さん。――白紙にしてももらえないかな」

「え！」

「二人のことは無かった事に――」

「なぜ？」虚を衝かれた。彼を分かつとしているところに言われた言葉に耳を疑った。

「だから、二人はもう会わないほうが……」黒岩がなるだけ視線を合わせないように項垂れて「恐らく、あなたにとんでもない迷惑が掛かる。――そうじゃないにしても間違ひなく苦勞させることになる」おもむろに煙草を取り出し銜える。

「でも、どうにかならないの？ 私の出来ること。何かない？ 何か？」歩み寄って聞く。

「いや、恐らく無理かも……」そう言いながら黒岩は煙草に火を点ける。何故、そう簡単に二人のこれからの事を決めるなんて、――どうして？ 私には言われてすぐに理解できない。だって本当にこれからじゃないの？ 彼の言うこと、何故なの？

それから又、かなりの時間と思えた。やはりものの数分だろう。この短い時間でぼんやりとだけ事の成り行きに逆らえないのかもしれない、と思った。はあ、私は深く溜息を洩らし俯く。街頭に照らされたアスファルトが滲んでみえる。鼻を吸る。こんなことで……。どうにもならない。何処にどう、ぶつけようのない腹立たしい気持ちを堪えつつハンカチを取り出す。頭の奥のほうで妻子がいた男のことが浮かんた。あの時とは違う。ただ、今は『別れ』という

二文字が漂う。目の前にいる黒岩はあの時に男とは違う。そのことは強く言える。自分が気持ちをもてば乗り越える事態だと思う。そうだ。不安となり漂う気持ちを払いのければ。

「でも……」ふと黒岩の口元が動いた。

「でも？　でも何？」紗江子の言葉に反応した。

「いや、やはりよそう。これは決していい考えではない」かぶりを振る。

「はっきり言ってください」

「こればかりはね……」口を歪め、黒岩は夜空を見上げる。目を閉じると眉間に皺を寄せる。「やはり、無理だ」溜息交じりに呟く。

「いや、私になんとか出来ることがあるはずです。会社に損害を与えたといってましたよね？」黒岩の否定する言葉から何か解決策を見出す紗江子。鼻を吸りながら言う。

「ええ、まあ」

「損害、それって賠償問題ですか？　もしかしてお金で解決できるのですか？」

その言葉、お金に黒岩が反応したのを紗江子は見逃さなかった。やはり……。いや恐らく私からお金を借りることを気にしているのだろうか。きっとそうに違いない。ここへ来るまで胸に広がる疑念を抱いていたが、彼に限ってそんな事はある筈がない。私が勝手にそう思い込んでいるだけ。

「もう、いいですよ。止しましょう。こんな僕のことには首を突っ込まないほうが懸命です」残り少ない煙草を躊躇いもせず足元に投げる。軽く革靴の爪先で踏みにじる。

「とにかく、私に出来る限りのことをさせて下さい」

「ほんと、もういいですよ。今日、今ここで終わりにしましょう」「いえ、ここで諦めたら後悔します。きっと後悔する」

紗江子の目。愛情というより熱意に気圧されたようだ。

黒岩は間を置いてから、紗江子をベンチへ誘い二人で腰掛けると詳しく話し始めた。自分の仕出かした事、会社への損害、自分の今

の状態から今後の予測される事等と。

「分かりました」すかさず紗江子は頷いた。

「本当に、あなたって人は――」黒岩は紗江子の手を取り、体を引き寄せた。黒岩の胸に蹲る紗江子の背中に両腕を回し、右手で風に靡く黒髪を撫でると唇を重ねてきた。

第三話（騙す）

7

7.

「どうしたのよ？ 紗江子。何か元気ないじゃない」

「えー、そ、そんなことないわよ」

何気ない蒼井の言葉に狼狽した。

蒼井から声をかけられなくても胸の奥深いところで何かが壊れていくようなものを感じている。黒岩に言い張ったことに自信を失くしている。それどころか考えれば考えるほどやはり彼に不審感を抱き始めている。なぜだろう？ あれほど詰め寄って全面的に彼を救いたい一心だったのに、今は不安の一言。

布に垂れたインクが繊維との隙間を絡まるように急速に滲んでいく。拭い去れない不安。重なる繊維に滲む液体を押さえつけても速度は落ちるもののジワジワと広がり止められない。今は胸いっぱいに広がる前になんとか食い止める手段のなさに足掻いていた。

「ちょっとちょっと！ その薔薇の茎、短すぎるんじゃない？」

薔薇の茎がテーブルに散乱している。考え事のせいで手に持つ剪定ばさみで無意識に切り刻んでいた。

「あ、すみません」ゴソゴソと慌てて両手で薔薇の茎をかき集める。

「いっ！」棘が右手の小指に刺さる。痛みが走り、思わず小声が洩れた。

「だから、紗江子。本当に大丈夫？ ここ最近変よ。しっかりして

頂戴。彼氏が出来て上手く言ってるからといって、もう願いよ！

来週は忙しくなるからね。分かってる？」蒼井が紗江子の横に並んで薔薇の棘に注意を払いながらかき集める。

「大丈夫。私片付けます。それから――」

「どうかした？」

「今日はもう早引きしてもいいかしら？」かき集めながら申し訳無

さそうに紗江子が聞く。

「まあ、いいけど……。どこか具合でも悪いの？」

「ええ、まあ。——じゃ、これ捨ててきますね」かき集めた商品にならない薔薇の残骸を外の塵箱に流し込む。

蒼井には言えそうにない。山ちゃんに無理言ってお願ひした手前、彼女の立場がない。

第三話（騙す） 8

8.

「課長！」ハンドルを握る駿平が助手席に向って大声で叫ぶ。

中国出張帰りで日本に着いたばかりの課長を空港に迎えに出向き、会社に戻る車中で事の事態を掻い摘んで話す。出張くらいで態々迎えに行くことはないが、状況が状況なだけ致し方ない。

「訊いてますよね？ 奈津美から」

「ああ、そうガミガミ怒鳴るなよ！」緊張感のない返答だ。「疲れてるんだからな。——でも、そのこと訊いたのは藤沢からだけだな」緊急事態だというのに能天気な鼻を穿る。

「え！ 藤沢さんから……、ですか？」

「ああ、そうだ。以外か？ あんなふうでも人一倍気にかけているんだ。あ！」銜えた煙草から灰が落ちる。

薄く開けた窓の隙間から流れ込んだ風に煽られ銜えていた煙草を落す。山根は慌てて背広に落ちた煙草を慌てて拾う。すると車内で灰が広がる。「課長！ 何してるんですか！ まったく」駿平はパウウインドにのスイッチに手をかける。

「で、どうします？ いったいどうしたらいいんですか？」自分にもかかる煙草の灰を払いながら聞き返す。

「で？ じゃないだろ！ わ！ 突然、窓開けるなよな」課長の右手が自分の頭を抑えている。「開けるなら開けるって言ってくれなきゃ困るじゃないか」煙草の煙を車外に出す為に窓を全開にした事に文句を言う。

「はあ」

「まあ、待て。こういったことはな。——しかし、だいたいなお前がもつとしっかりしていればこんな事態にならなかったんだ」拾い上げた煙草を灰皿で揉み消す。

「え！ 何ですか！」その言い草と責任転嫁に駿平はすぐに反応し、目を剥き大声を出す「僕に責任を擦り付けるですか？ それって上司の言うことですか？」課長の顔を睨みつけて言う、思わず腹が立って言い返してしまった。出張やら忙しいと事欠いて。そもそも彼女は課長の知り合いからの入会会員なのだ。俺に責任を擦り付けるのはおかしいよ。

山根はズレそうになった鬘を丁寧にと整える。

「そうだったな。悪い、悪い」そう言いながらも平然と悪気がない顔つきで神妙さが全く見えない。感じ悪い！ このくそおやじ。惚ける課長に気付かれないように睨む。

「お、前、まえまえ！」ひっくり返った声でフロントガラスに指を突き刺す。駿平が慌てて正面に視線を戻す。二人を乗せた社有車はセンターラインを超え、対向車に向っている事態に気付く。慌ててハンドルを切る駿平が狼狽している。

なんとか車を立て直すと「す、すみません」駿平の声が上ずっている。

「で、どこまで話たっけ？」危うく死ぬところだったにも関わらず平然とした口調で駿平のスーツに手をつ込みガサコソと探っている。「あ！」とおやじにカツときて吠える。

「なんだなんだ！ どうした？」背広に手をつ込んだままの課長が今度は狼狽して慌てふためいている。

「課長！ 俺の！ なにやってるんですか？」駿平のスーツを左指さして言う。

すでに煙草を銜え悠長にライターを探している山根。胸やズボンのポケットをポンポン叩いている。いったい……。本当にムカつくおやじ。今この手にハンドルが無ければ、このおやじのぶよぶよと脂肪の詰まった太い首を絞めつけてやりたい。両手でも納まらないくらいの太さだろう。恐らく本気で締め付けても息の根を止められるかどうか難しいだろう。だが、山根は駿平の殺意など全くといった感じであるし、一向にお構いなしのようだ。探し当てたライター

で煙草に火を点け、銜え煙草のまま食い込むシートベルを剥ぎ取るようにし、体を捻る。出張帰りの黒いボストンバッグのファスナーを引くとガサゴソと乾いた音がする。

「ところで、どうだ？　これ食べるか？　美味しいぞ。土産だ。沢山買ってきたからね」乾燥ナツメグの入った袋の裏包みを見て呑気に言う。

「げっ！　騙された！」カサカサと音を立て、声を荒げる。

「どうしたんですか？」

「これ、台湾じゃねーか。ちえっ、参ったな。ほんとによ、あいつら詐欺だな」

「はあ、そうですか」気のない返事を返す。俺の話訊いているのか？「で、そのイカサマ詐欺師野郎は？」急に会話を戻す課長。

「え？　あ、はい。その男は明後日会う段取りをつけています。そこで突きつけてやろうかと思えます。素直に正体を明かせば話し合いをしますが、追求を逃れるようであれば警察に突き出すつもりです」

「そうか……」短い腕を組み「その対処もう少し待てんか？　俺に考えがある。任せてくれ」

「え！　でも、それって不味くないですか？　もし、本社に事の内容が知れるとただじゃ済まないのでは？　喻え課長でもヤバイですよ。早いとこなんとかしないと」

「ああ、分かってる。でもな、この件は頼む」

「私情を挟むと適切な判断を失うのでは？」

「それも分かっている。だが、そこを無理言っただけで頼んでいるんじゃないか」

いつもの課長ではない。いつもなら意味分からんおやじだが、今日の前にいるのは訳ありのおやじだ。当然のことだろう、彼女は課長の紹介だから。娘を想う父親のような素振りだ。

——ふと、滅多に会わない田舎の親父と課長が重なる。最近、田舎に帰ることの少ない。いや、避けているのだ。いつも後姿をみて育

った親父が一人で生活しているのは分かっているから、あえて会わないようにしている。なんとなくだが。

「あの方、課長の知り合いでしたよね」

「ああ、そうだ」頭を掻いて腕を組み呻る「はあ……。しかし、紗江ちゃんには申し訳ないことをしたな」

「そうですね。うちに落ち度がありますからね。彼女から言われても仕方ないですね」

「いや、それだけじゃなく――」課長が溜息交じりの呟くと窓の外に目をやる。

「なにか他に？」

「いやな、紗江ちゃん。昔、男に騙されたことがあるんだ。それは今回の状況とはやや違うが、まあ近いものはある。蒼井さんから後に訊いた話なんだ」

「そうですか」

「こんな事態だから、お前にも話しておいてほうが良いかも知れない。彼女の今後の幸せを、と思つてのことだったのだが、これじゃ彼女も昔のことを蒸し返すみたいだからな。これ以上の事態は避けたい」

窓の外を流れる景色を見入っている課長の後ろ頭が少し歪んで、いやズレて見える哀愁漂う後頭だ。突き出た下腹であるが器用に体を捻り全身で窓に向ける姿。

「昔付き合つた男がな、妻子のあることを隠していた」ボソツと課長が話した。「彼女との仲が深まりつつ最後の最後、結婚しようとした話が持ち上がった矢先、男が失踪。妻子を残して失踪したんだ。恐らく自分の仕出かした事の大きさに耐え切れなかったのだろくな。彼女も家族に悟られることなく男を探していた。それから、半年後経ってからだったかな、隣町の高尾山ってあるだろ！ 割と目立たない」

「高尾山？ ああ、パツとしない山でしたが、最近ハイキングコースや遊具施設ができて、小学校の遠足や家族連れで週末賑わってい

るみたいですよ」

「その高尾山の中腹にだいぶ前だけどな休憩所があった。裏手に一際目立つ立派な枝ぶりの松の木、今は山が切り開かれて残念だが伐採されたと訊いた。その太く立派な枝にロープをかけて。そこで……」そこまで話すと課長は自分の首に両手をかける。そして、グイッと締め付けた。顔を歪ませ白目を剥く、半開きの口からだらしく舌を出す。突然、車が揺れた。車道に段差があったのだろう。

「ゴホゴホ」と山根は思いつきり咽る。

「何してるんですか？」

「自殺！ おえー。首吊り自殺だよ」

「自殺？」

「おえー。おい！ しっかりと運転頼むぞ。死ぬところだった。おー」課長が自分の首に力を込めた瞬間吐きそうに咽る。車の揺れた衝撃で自分の喉仏を圧迫したのだ。何もそこまで思いつきり締めなくても。咽ながら話す。

「男が自殺？ 彼女のせい？ じゃ、それで罪を受止めて？」駿平が唾を飛ばしながら聞き返す。

「おいおい、汚ねーな。――ばーか、誰も男が自殺したとはいってない。信じてるの？ そんなこと！」

「今、課長そう言ったじゃないですか！」

「わるい、冗談冗談。男は、自殺はしてないけど、ひと騒動あった。彼女は妻子ある男に振り回されたことは事実だ」

相変わらず調子狂うな。どこまで本気で訊いていれば良いのか半信半疑である。

彼女の若き頃、ひと騒動あったということは分かった。それに彼女に対する課長の申し訳けなさも十分に受け取れる。

「ともかく、この件は黙ってもう少し時間をくれ」

ハンドルを握る手に汗が滲む。溜息を着くと一人頷く。

「分かりました。じゃ」

「ああ、すまん。無理言って」

「いえ、いいんです」

「これ食べるか？」振り返る課長の顔。いつの間にか開封したばかりの乾燥ナツメグを口いっぱい頬張っている顔は山猿みたいである。挙句の果てニコツと笑うと歯茎と歯の隙間にナツメグの食べカスが、びっしりとこびり着いている。

「課長！」このおっさん本当に大丈夫か？ さっきまでの会話がぶっ飛んだ。ハンドルを握りなおしアクセルを踏む右足に力を込めた。それから又、パワーウインドにそっと手をかけた。

第三話（騙す） 9

9.

約束の待ち合わせ場所へ向う。

紗江子は黒岩がいつも指定する待ち合わせとは違う場所を今日は指定してきた。品川駅からタクシーに乗りここまで来た。さほど遠くないこの埠頭は最近夜でも人通りが多い。駐車場も拡張され週末は賑わいを見せていた埠頭は入り口からすぐに屋台が軒を並べている。土曜日ともなればさらに賑わいを見せるらしく口コミでもちよつとしたスポットになっていた。暖色系の街灯が乾いたアスファルトを照らす。どのベンチにも先客がいるようで邪魔にならないよう紗江子は場所を選んだ。それでも薄闇の中でも黒岩がすぐに分かり易い場所に立つ。

腕時計を見る。時計の針は二十時四十分になったばかり。二十一時の時間までにまだ二十分もある。まだ少し早いけれど居ても経つてもいられずついこの約束の場所へきてしまった。

左肩にかけたハンドバッグの取っ手をぎゅっと握る右手。思わず力が入る。はあ、どうしよう。肩で溜息をつく、いくつもの数え切れない溜息。つけば着くほどどうしても落ち着かない。私の気持ちが一歩前に進もうとすると、彼の気持ちちがそれとは反対に一歩後ずさるそんな気がしてならない。いや、一進一退というより最近はどうどん彼が遠のいていく気がする。

落ち着かず、再び腕時計を見る。時計の針はさっきから全然進んでいない。この腕時計、壊れてない？ コツコツと叩いてみる。――そんな訳ないわよね。はあ、早く時間が経たないかしら。

時間の経過に苛立つ紗江子。又、ジワジワと不安が胸いっぱいに広がる。

本当にこれで良かったのかしら――。あの時、彼を目の前にして

つい勢いで口走った。それでその時は良かった。けれどこの場に居ながらして迷いが生じている。時間が経てば経つほど迷いの方があの時の気持ちをみしめしと押し潰していく。いったい、どっちが良かったのだろうか？ 改めて冷静になろうと呼吸を整えるようにした。

暫くして又、時計の針を見る。今度は時計の針が二十時五十五分になったばかり。あともう少し。あと少し――。

「課長、いいんですか？ これで本当に良かったんですか？」不服そうに駿平が課長に噛み付く。どうしても納得いかない様子で絡む。

「ああ、いいんだ」

苛立ちを隠しきれない駿平と課長二人、屋台の物陰で小声、で遣りあう。だが、課長はまったくもってのんびりと構えている。

駿平がどうしても絡みたくなる訳にはここで黒岩の首根っこを捕まえようということだ。紗江子と会うときが現行犯に近い。彼女が黒岩に何か金品などを渡すだろう。或いは何かその決定的な確たる瞬間を狙おうという計画だ。山根が考えた計画は刑事張りの捕物丁だ。けれど彼女の目の前で黒岩の素性を突きつけるということは彼女の気持ちを無視した乱暴なやり方であることは間違いない。課長がそんな乱暴な手段で解決しようとしているのか？ 意図が掴めない。

相変わらず人通りが多い場所だ。通り過ぎる人が怪訝そうな目で過ぎていく。二人の遣り取りはこの人ごみにはさほど影響ない。それより駿平は取り分け変哲のないスーツ姿だが、課長の山根はサングラスとトレンチコートを纏っている。五月の半ば差し掛かうとする初夏、日中は蒸し暑くエアコンが必要になってきた季節だが、夜まだまだ寒い。夜風は晒した肌を冷やす。肌寒いからコートは分かるが、レイバンのシューターのサングラス。黒岩軍団の渡哲也気取りはないだろ。おまけに指のでたレザー製のドライバークローブまでも。夜のサングラスにドライバークローブ、異様な怪しい人物

と思われても仕方ない。とにかく本人は刑事か、探偵気取りの出で立ちである。目立つことこの上ない。付け加えて言うとな左手にはソースがたっぷりの串に刺さった烏賊焼きを持つミスマッチ。

「そもそも、なんでここがわかったんですか？ 教えて下さいよ」

「あ？ まあいいじゃないか。あいつに頼んだんだ。……いや何でもない」しらを切る課長に陰りのある顔つきになる。

「え！ あいつって？」

「いや、何でもない。とにかくないない。――あ、烏賊のソースが垂れたじゃないか。おまえが話しかけるからだぞ！」トレンチコートに垂れたソースに大騒ぎしている。

「課長！ 静かに」口に指を当て駿平も焦る。

だいたい、本当に今日のこの時間と場所まで本人に訊かないと分かるはずの無いのだが。ここへ向う車で散々食い下がったが、課長は口をまったく開こうとしなかった。で、これだ。挙句の果て有耶無耶にする。そう言えば、課長が車に乗り込むとき携帯電話の会話終りの言葉に……むら？ とか聞こえたような気がした。

はっ、思わず洩れそうになる。もしかしてカミムラ？ あの無言電話の相手も確か、ムラカミと言ったような記憶が……。

けれどどうして？ あのムラカミという人物が課長に何を教えてくれたのだろうか？

「いいんだ、俺に任せておけ」そう言うとな課長は烏賊焼きの串を側の屑入れに放る。振り返るとすぐに二本の指を駿平に向けてきた。

思考している駿平の顔間近に指二本が向ってきた。その向ってきた課長の指に驚いた駿平が身を引く。

びっくりした。この場においても要求する課長、仕方なく懷から煙草を取り出し課長に差し向ける。まったく課長の突然の行動に虚を衝き呆れる。今度は銜た煙草に火を点けろと要求してくる。世話の焼けるおやじだ。

駿平は火の点いたライターを差し向けながら「課長。何か隠してないですか？」

「なにを？」

惚ける課長にもう一度質問を投げかけようとした。「外部に誰かと繋がっている人物は……」と言いかけた駿平の質問を「居ない！」と途中で折る。ぴしゃりと言いつつ切った口調だが、何かを隠そうとするのが感じられた。煙草を一気に吸う仕草に違和感があった。

その課長の横顔を見ながら、落ち着きなく煙草を銜える駿平。その目に疑念を拭い去れない視線があった。

少し肌寒い。薄手のセーターだけで良いと思っていたけれど寒い。海風が彼女の晒した肩から腕の体温を奪う。

紗江子は両手を交差させ二の腕辺りをさする。その瞬間ハンドバッグが肩から落ちそうになる。思わず右手でハンドバッグを掴む。肩にかけなおしてハンドバッグのファスナーを引くと一センチほどの厚みのある茶封筒を確認する。小さく溜息をつくとハンドバッグの底へと押しやる。

手首を返し、腕時計を見る。

そろそろだわ。

「課長、もうそろそろ時間ですよ。二十一時でしたよね。十五分ほどですよ」

相変わらず煙草を吹かす課長に向かって囁し立てるように言う。

「ああ、わかってる」

「あの男、もう来る頃じゃないですか？」

「ん？ んん。——そうだな」長く吐き出す煙草の煙。それに爪楊枝も銜えている。

気の無い返事だな、大丈夫か？ こんな時に。ああ言っていたが本当に上手く解決してくれるのだろうか？ 悠長に煙草を吸っている場合ではない気がするが。

どうも落ち着かない。つい何度も手首を返し、腕時計を見る。薄暗くてよく見えないが、恐らく針は二十時四十八分を過ぎたところ

を差している。さつき覗いたときから五分と経過していないようだ。駿平の焦りとは裏腹に暫くその状態にまだ変化は訪れない。

焦る気持ちを押さえようと溜息交じりの深呼吸を着き、首を左右に折ってコキコキと鳴らす。

いつの間にか課長は人目も憚らず鼻を穿る。その穿った指を屋台の外壁に塗りつけているように見えた。駿平は見ても見ぬふりをして課長との距離を空けた。

暫く時間が流れた。

課長が煙草の吸い差しを放ると革靴のつま先で揉み消す。

コートの襟を整える。そして物陰からスツと飛び出した。

不意に山根が動いた。

背筋を伸ばすと握る右手を口元へ運び咳払いをひとつ吐く。スタスタと彼女へと向かって歩き出した。

その突然の行動に慌てて追いかける。山根の背中から視線を落とし、腕時計を見た。時計の針は二十一時にはまだなのに。え、どうして？

「紗江ちゃん」

突然の呼び掛けに驚き、紗江子は身を固め萎縮した。

紗江子は硬直した身を解きながらゆっくりと声のするほうへ体を捻る。そこには彼女の待ちわびた人物はいない。

落胆するというより疑いの眼差しでじっと見る。薄暗い中、彼女の目に確認できた人物、山根。片手を上げサングラスを懐にしまう。山根の後ろに慌てて続く野呂がスーツの襟を正してこちらへ向って駆けてくる。

あれ、山ちゃんだ。それに野呂さんも一緒だわ。なぜ、ここに？思わず右手で口元を隠す。二人いったいどうしてここにいるの？「や、山ちゃん？なぜここへ？」彼女はまだ口を押さえたままで言う。驚きを隠しきれず動揺している。

「いや、こいつがな」横にいる駿平へと親指を立てた左手をくいく

いとする。ムツとした顔で課長を睨む駿平が横に並ぶ。

二人は紗江子と対峙した。

「来ないよ」山根がぼそつと呟く。

「え？」一瞬動揺を露にした。

「あの人は来ないよ。――来れないんだ。分かっていると思うが、実は今回の事で紗江ちゃんに迷惑掛けられないと言ってな、断りにくくて。こうして代理で来たんだ」

なぜそんなことを言えるのか？ 課長は申し訳無い言葉で言う。

山根に対峙する紗江子は暫く俯いたままである。それから溜息交じりで、ふう、と肩が大きく上下した。

「分かっていました」

「ん？ 何を？」紗江子の言葉に少し遅れて反応した課長。

「彼のこと……」

「そうか、なら話が早い」

「いえ、彼の本当のこと」

予想していなかった返事に駿平も驚く。

――そうか、「もしかして？」と課長は腕を組み、黙りこくる。

山根が口を開いたのは暫く経ってからだ。横でイライラと山根を見ていた駿平が痺れを切らし、身を乗り出そうとしたときの事。神妙な顔を解き溜息交じりに言う。

「紗江ちゃん。既に分かっていたのか。黒岩の事？」

「ええ、まあ」一言頷く紗江子。

「じゃ、結婚詐欺だということも？」

「じゃ、最初から……」

紗江子の顔を覗き込む。

「いえ、最初は分かりませんでした。何度か会ってお金の話が出るようになってから、何となくおかしいな、と」今度は首を縦に振る紗江子。

「そうだったか、既にね……」

迷いを払うように「はい、覚悟も決めていました。でも、嘘であってほしい。間違った事実であって欲しい。迷いながらも真実を知りたくそれだけでここにきました。結果はどうであれハッキリと」

どうやら彼女はすでに知っていたのだ。どうやって確信を持ったかは分からないが黒岩が変だということを薄々感じとっていたのだろう。その落ち着いた目が腹を決めていたことを表している。けれどその予感的中したことが残念でならない顔つきだ。

「彼の弟さんの事故の件で少し違和感を感じ取っていました。確信を得たのは、弟さんはまるで別人のようで彼とは似ても似つかない容姿だったから」堪えて浮ついた声で彼女は言う。彼女はやはり、彼の弟さんと会ったときにすでにおかしいと感じ取っていたようだ。「やはり、そうですか……」口を挟むように駿平が相槌を打つ。

紗江子は黙って頷く。

「すまんかった。俺がもつとしっかりと確認しておけば、こんなことにはならなかった筈だった」項垂れる課長。それを見ていた駿平も頭を下げる。

「何言うのですか。そんな事、全然ないです。山ちゃんは悪くないです。それに紹介してくださった『ハッピーパートナー』も野呂さんも皆さんも悪くないです」

「そうか、——そう言われてもな」

「そう思っていますから。そう思わないと遣り切れないし、自分が惨めになるだけです。だから、もう……」

彼女の目に涙を堪えているのが薄暗い中でも分かる。

「——そうか、ともかく本当に悪かった。だから、蹴りはきっちりとして貰った。もうこれで……」課長が頭を下げる。山根に倣って駿平もう一度、深々と頭を下げる。

彼女は奥歯を噛み締め、堪えて俯く。薄闇でもその表情は見て取れた。

「蒼井さんにはこのことを言わないで下さい」山根に向って訴える。山根は首を持ち上げ彼女を見上げる「彼女には縁がなかったと、言

うことにしておいてください。すみません、お願いします」今度は紗江子が頭を下げる。

そのまますすり泣く声が暫く続いた。堪えていてもやはり堪えきれない気持ちが溢れる。

俯く彼女の髪が海風で揺れる。

山根が彼女に歩み寄ると崩れるように山根のトレンチコートにしがみ付く。それから暫くすすり泣いていた。彼女は堪えていた。やりきれない表情で課長は夜空を見上げじっと黙っていた。海風で揺れる課長の少ない髪は飛んで行きそうで堪えている。

「送っていいですか？」気障な台詞を小声で囁く。それも低い声で。

「いえ、大丈夫です。なんとか」

彼女は山根から離れると深く頭を下げる。顔を持ち上げると同時に踵を返す。そのまま駐車場のほうへとすたすたと歩き始めた。

遠くになった紗江子の姿が小さくなる。それから人ごみに消えてしまったのを確認してから山根が呟く。

「もう既に解決していたのだ。いや、解決しようと心に決めて今晚、奴に会うつもりでいたのだろうか。ふう……」

「課長」駿平が呟く。

山根に歩み寄りながら「なぜです」

「なんか、辛いもんだな」駿平の質問を聞き流す。

「けれど結婚詐欺って初めから分かっていたら、こんなことにはならなかったのですけど……」

「仕方ないさ、結婚相談所は、興信所でも探偵事務所でもない。むしろ警察でもないからな。お客さまが登録する時、はなから疑ってしまっただけじゃないかな。信用第一のこの業界だ。男と女、止むを得ないことだが、今回ばかりは滅入るな」

「そうですね。私もそう思います」

「さて一服するか」そう言いながら指を二本突き立てる。またかよ。いつもいつも貰い煙草で課長本人が自分で買ったのを見たことが無い。煙草を差し出すと課長は当たり前のように引き抜く。続けて言

われるまでもなくライターも差し出す。

ふむ、と頷く課長の銜えていた煙草に火をつけると一息長く煙草の煙を吐き出す。煙草を銜えなおすとトレンチコートの襟を立てる。サングラスを懷から取り出し掛ける。歩き始める山根を駿平が追いかけるように歩く。

「ところであの男、黒岩とはどうした、いえ、どうケリをつけたのですか？」

「あ、あいつか」

「ええ、会ったんでしよう」

「あ、会ったよ。一昨日にな。今日のこの場所も時間も訊き出した。あいつに言ってやったよ。この場所に行くなら警察に通報するしかない。しかし、罪を認め彼女に会わない事！ それとうちの会社を即退会すること！ 他の人から騙し取ったお金と今後の身の振り方を考え警察に自首するんだ、その方が罪も軽くなるはず。とな、いろいろと脅してやったよ」

課長のどこにそんな脅しができるほどの凄みがあるのか信じられなかった。そう本当に脅したのだろうか。

「恐らく明日にでも警察に行くはずだ。あ、それから会社の登録データはすぐに消すな。警察が来たとき一応の証拠資料として対応しないとな、隠滅したら逆に疑われるからな」

「じゃ、うちに警察来るんですか？」

「まあ、多少仕方ない。おれのほうから本社に報告しておく」

「そうですか……」

「心配するな、手は回してある。だが、覚悟しておけ」しよげる駿平に渴を入れる。

「ところで彼女、気持ちの整理がついてもう一度出会いを求めるかな？」

「ああ、そうだな。彼女本当にいつかな……。女も男も分からんもんだからな」

「そうかな……、そんな時が訪れたら……。いや、もう出来ないか

な」首を捻りながら駿平は溜息を着く。

「わからん、わからん。ふむふむ」腕を組みひとり頷く。

このおやじのほうが全く分からね。

でも、そうかもしれない。

男も女も恋に傷ついても懲りない生き物だ。彼女とて又、同じ。

一つ終わっても何れ次があるだろう。見渡せば人間、男と女。横を通り過ぎる女性も、もしかして明日は別の場所で偶然出会うかもしれない。アヤもひょっこり帰ってくるかも知れない。

んな訳ないか――。

もう少しやってみるか。喩えビジネスと割り切ってもきっかけを作るならまんざら悪くないかもしれない、この仕事。

ふと、もしかして、カミムラという人物と課長で黒岩に何かしたのか？

「ところで課長」

「なんだ？」

「カミムラ、って知りませんか？」

「カミムラ？」

「そうですよ、カミムラ」もう一度訊きなおす。

「はて？」

「惚けないで下さいよ」しつこく問い詰める。

「はいはい」駿平の質問を聞き流すのを観念したのか耳の穴を穿る山根。

ふいに立ち止まり、駿平に向って振り返ると人差し指を突き立て「誰にも言うなよ。ま、エージュントだ。」

「エージュント？」

「ああ、そうだ」

「何のエージュント？」

「エージュントは、エージュントって言ってるだろうが」口を尖らせて連呼する。山根は踵を返すと、歩き始めた。とてもものろのろと歩く。

課長の背中を見送る「でも……」それ以上訊き返せなかった。岩見から訊いた何かの組織？ 裏への繋がり？

駿平は納得いかず、その後もしつこく食い下がるが答えは同じ。呆れたように仕方なく山根の後を歩いた。

第三話（騙す） 10

10.

空を見上げた。

夏の夕方、西の空はまだ明るく薄青い。

紗江子はいつもの待ち合わせだった場所に立つ。

どうしてここへ足を運んだのだろう。ここへ来ても、もう何もないはずなのについ、足を運んでしまった。

ふと視線を感じる。ゆっくりと首を捻るとバス停横にいつも立っていた彼女と一緒に並んでいた。いつのまに？ 私の顔をじっと見て首を傾げる。そのまま空を見上げた。

そうか、そんな時間だったわね。あなたはこの場所に毎日くるのね。これからもずっと――。

紗江子も彼女の見上げる空に目を遣る。

「あたひ」突然、発した言葉に気付き、彼女に顔を向ける。彼女はずっと私の顔を見て笑うだけ。

ふいに真顔になる「おおこ」

「え？」

「わたいおおこ……」聞き取り難い発音で彼女は親指を突き立てる。

「なに？」耳を傾け聴きなおした。

「あ」空を見上げ、指をさす。

噛合わない会話と続かない会話。難聴者？ 彼女なりに何か懸命

に伝えようとしている。

「なあない……」

「え、何？」

「なあない……」

「私の事？ それって」

「さこお、なあない……」

「さこお？」

彼女は自分の唇辺りを人差し指で差す。「さこ、さ・あ・こ」

「そっか！　あなた、さこちゃんて言うの」

初めてこの子と話した。名前も初めて知った。耳が不自由だから、その会話の言葉が聞き辛いのだ。

「なひていい。えへへへ、おかーあん、いいて。なひていいって」

「なひて？　あ、そうね、おかあさん、泣いていいって」涙が滲む、鼻を吸る紗江子に差出されたタオル。紗江子はいつの間にか涙が溢れ、頬を伝っていることに気付く。

差出されたタオルは熊の絵柄がプリントされていた。その熊のプリントに懐かしさが甦る。子供の頃、母と二人で歩いたデパートのこと。ショーウィンドに飾られた動物絵柄、刺繍で縫われ、青色の色彩が鮮やかなワンピースを縫い強請って泣いた記憶を思い出していた。精彩な青色が子供の頃に焼きついている。

「ひほーひ、くも」又、空を指差し、彼女が唐突に話す。

「明日は雨かな……」そう言いながら紗江子も彼女に倣って空を指さす。見上げると青々とした空に飛行機雲が伸びている。

そうか！　なんで今頃気付いたのだろう。彼女の仕草。いや仕草ではなく手話だったことを。

「ねえ、あの時、私にくれた手話覚えている？　私に――」ゆっくりと、口を大きく彼女に伝わり易いように話す。

首を傾げ、少しポカンとしていた彼女がコクリと小さく頷き、下唇をひと舐めして両肩から全身を動かし始めた。

人差し指で私を指す。親指……、人差し指と人差し指を立ててあわせる……、小指を立てると指三本。それから小指を向ける。

何を意味しているのか分からない。手話の意味が分からないけれど、何か意味あることを私へ伝えたかったはず。

この子、もしかして予言めいたこと。直感も優れているのだろうか？　彼のこともきつと早くから見抜いていたのかもしれない。だから私に信号を送ってきていたのだろう。きつとそうに違いない。注意

したほうが良い、――と。

親指……？ 小指を立てる……？ 指三本……？ それから小指……？ 親指、小指、指三本、小指。何かを意味する手話なのだろうなあ。親指は分かる。恐らく男だろう。――そうか、気にかけていたのだろう。あの人、あの男のことに違いない。

「ありがとうね。次こそはきつといい男だからね」紗江子は彼女に向ける。

一度はしまい込んでおいた気持ちだけど、やはり一人より二人だね。ささくれた気持ちばかりじゃ寂しい。

空を指差したまま彼女は笑う。穏やかな笑顔が紗江子に目に映る。紗江子も又、空を見上げる。

清んだ青色からオレンジ色へと薄っすらと変わりかけている空の境目に飛行機雲が白い線を引く。

了

第三話（騙す） 10（後書き）

あり得ないようであり得る特別でない普段の話。

綺麗な恋愛だけでなく、男と女は出会いに飢えています。コミカルに展開していくストーリーですが、少子高齢化が進む中、とても深刻な問題です。

悪い噂があるにしても、その担い手となる結婚ビジネスは現代社会で重要な位置づけであることを伝えたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3528t/>

一人より二人

2011年5月18日00時40分発行